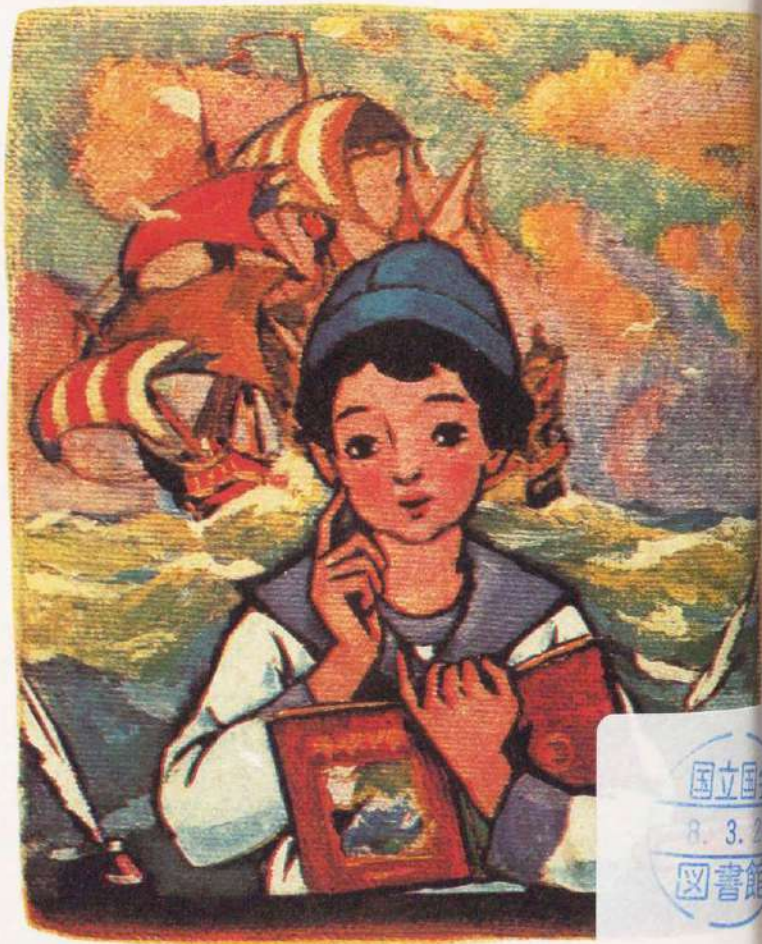


# 金の星

Z32-B88



国立国会  
8. 3. 20  
図書館

第六卷 八月号 第八号

行發日一月八年三十五大 本誌創刊日九月七年三十五大

(行發日一月一月每) 刊誌物報時種三期星三十五大

金の星 第六卷第七號



Kodak Color Control Patches

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM, Kodak

よい繪をかくには

よい繪具を

王様クレイヨン  
キングクレイヨン  
王様水彩繪具

最寄の文具店にて  
文品を直に  
お買取り  
下さい



東京元賣社 東京工業株式會社  
東京市神田區表神保町六  
五九二四東京東區口警服

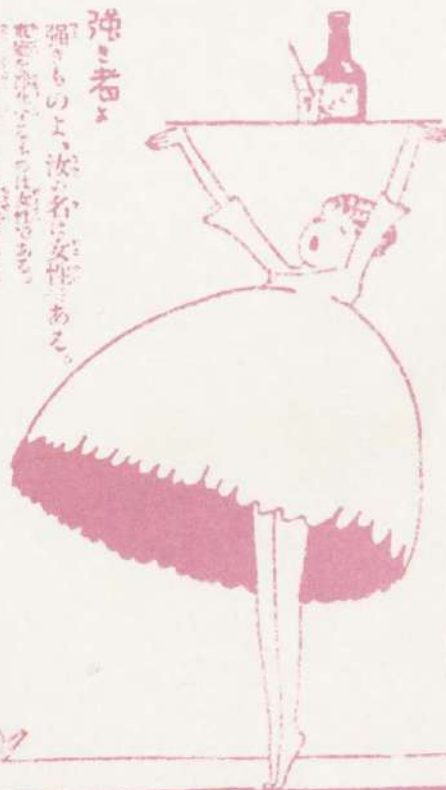
強壯飲料

女性とカールヒス

強壯者

強壯者とは、汝の名は女性である。

強壯者とは、汝の名は女性である。  
強壯者とは、汝の名は女性である。  
強壯者とは、汝の名は女性である。  
強壯者とは、汝の名は女性である。  
強壯者とは、汝の名は女性である。



東京元賣社

金の星

# 世界少年少女

編一第

版三第

## ロビンソン漂流記

(四六判箱入美本 内容百四十六頁 定価金九十銭 送料金十五銭)  
船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中で難船に出遭ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸つて来るまでの長い物語りです。世界の少年少女に、これ程深山讀まれた本はないといはれてゐる、稀有な物語りです。ですから、この本を讀まない者は、一生の不幸だとさへいはれてゐます。

編二第

版三第

## ナポレオン物語

(四六判箱入美本 内容百五十六頁 定価金九十銭 送料金十五銭)  
「ナポレオン物語」は即ちナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた少年ナポレオンが、ナポレオン大帝と稱せられて、歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化絶りない物語を、わかり易く面白く書いたものです。一代の英雄ナポレオンの面影は、必ずや讀者に大きな反響を與へるでせう。

編三第

版三第

## ドン・キホーテ

(四六判箱入美本 内容百七十七頁 定価金九十銭 送料金十五銭)  
イスパニヤのある村にケイザノといふ男がりましたが、毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、村馬に乗つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にはあはれな死をとげるといふ筋の物語りです。

編四第

版三第

## コロンブス物語

(四六判箱入美本 内容約百七十頁 定価金九十銭 送料金十五銭)  
アメリカ大陸を發見したコロンブスの物語りです。コロンブスが苦心奮闘して遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化絶りない運命と、大きな努力には、感嘆せずにはあられません。その面白い物語りです。偉人の傳記として、實に興味深い物語りです。

編五第

版二第

## ガリバアー旅行記

(四六判箱入美本 内容約百七十頁 定価金九十銭 送料金十五銭)  
ガリバアーが、艦船して小人島に漂着し、それより大人國を巡ぐる、滑稽と奇抜な面白い物語りで、そこに人世の諷刺や、大いなる教訓が含まれてゐます。世の少年少女諸君に、興味と有益なる讀物として此の本をおすすめいたします。

社の編

# 女著名大系

發行所 金の星社  
東京市外田端三五一番地

振替東京五九五六番





目次 (第六卷・第八號)

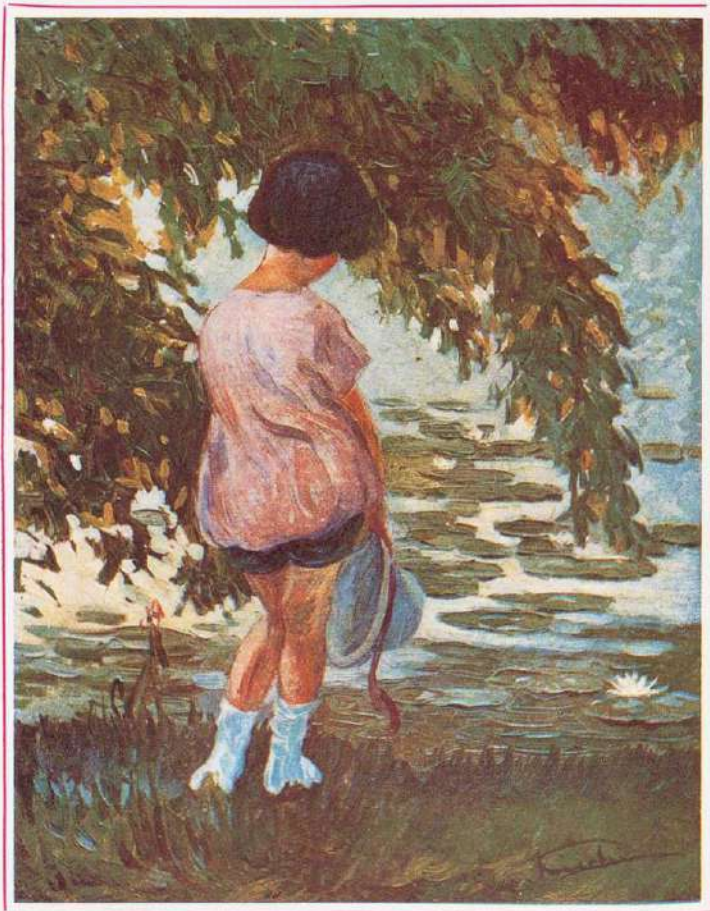
船はゆく／＼(表紙・原色版)……………寺内萬治郎  
 水のほとり(口繪・三色版)……………岡本 歸一  
 十三人目の神様(口繪・色版)……………寺内萬治郎  
 宮城野の萩(童話)……………(一)野口 雨情  
 同作(童話)……………(二)本居 長世  
 ねむり御殿(童話)……………(六)宇野 浩二  
 武衛ちがひ(童話)……………(二)小島政二郎  
 ラム王の一生(童話)……………(一)武井 武雄  
 目高の子供(推選童話)……………(三)三須 英三  
 山のふもと(兒童劇)……………(三)小寺 融吉  
 ホシローヒルム(尾長猿の巻)……………(一)寺内萬治郎  
 甚兵衛の鼻(童話)……………(六)高田 哲  
 お宮の建つ音(幼年時)……………(六)海達 公子  
 カリフの鶴(世界名作童話)……………(六)三宅 房子

孫悟空と牛魔王(童話)……………(三)楠山 正雄  
 繪は夜何をするでせう(推選童話)……………(六)坂井 羊子  
 合歡の花(傳説童話)……………(六)藤澤 衛彦  
 フアトメを救ひに(童話)……………(六)藤森 淳三  
 十五少年漂流物語(長篇)……………(六)霜田 史光  
 盗賊を捕へて吐られた話(童話)……………(六)久米 絃一  
 王女になつた人魚の話(童話)……………(一〇)森川 一朗  
 むねむり(童話)……………(一〇)若山 牧水  
 鳥の子をとろ(童話)……………(一〇)野口 雨情選  
 かに(幼年時)……………(一〇)若山 牧水選  
 達(自由畫)……………(一〇)山本 鼎選  
 足(畫方)……………(一〇)齋藤 佐次郎選  
 請演(幼年時)……………(一〇)沖野岩三郎

長篇 童話 挿畫  
**山の少年**……………(二〇)沖野岩三郎  
 寺内萬治郎 岡本 歸一 藤谷 虹兒 武井 武雄 水島爾保布

附録





水のほとり

(金の星畫譜)

岡本歸一畫

虹兒詩畫 睡蓮の夢 定價金一圓七十錢 送料書留十五錢 水谷まさる先生著 詩集 水色の花 定價金一圓五十錢 送料書留十五錢

落谷虹兒詩畫 銀沙の汀 定價金一圓三十錢 送料書留十三錢 水谷まさる先生著 小曲 寶石の夢 定價金九十三錢 送料書留十三錢

落谷虹兒小曲 夢の跡 定價金四十五錢 送料金十一錢 水谷まさる先生著 少女 詩の作り方 定價金八十五錢 送料書留十三錢

吾が親愛なる本誌愛讀者諸君の机上に、内容装幀共に他に比類なき、交蘭社發行の良書を備へ、朝夕の清き心胸に繙かれむことを敢て推奨する！

東振 京替 市口 神座 田東 區京 南四 神〇 保二 町七 六番 交 蘭 社

西條八十小曲 靜かなる眉 定價金九十錢 送料書留十三錢 吉屋信子先生著 花物 語 第一 各定價一圓三十錢 第二 送料金十五錢 第三 送料金十五錢

西條八十詩集 砂 定價金一圓七十錢 送料書留十五錢 間司つね先生著 詩集 夜の薔薇 定價金一圓三十錢 送料書留十三錢

西條八十新らしい詩の味ひ方 定價金一圓六十錢 送料書留十五錢 野口雨情童先生著 謠 作方問答 定價金一圓二十錢 送料金十三錢

◆いさ下ち持おを物讀供子のアデイへ山へ海◆

沖野岩 三郎著 落谷虹 兒裝幀 小島政 二郎著 武井武 雄裝幀 上里 朝秀著 齋田喬 裝幀 相良 德三著 齋田喬 裝幀 中島 孤島著 齋田喬 裝幀

史歴	史歴	史歴	話童	話民
キリシヤの神話	エジプトから現代まで ことも美術史	日本の祖先の生活 風俗史	コサツク騎兵	黒船物語

刊近	刊近	版六	刊新	刊近
送料 定三 四六 料 一價 〇六 二 四 〇 版 三 〇 頁	送料 定三 四六 料 一價 〇六 二 四 〇 版 三 〇 頁	送料 定二 四六 料 一價 八三 八 〇 〇 版 八 〇 頁	送料 定二 四六 料 一價 〇六 八 〇 〇 版 八 〇 頁	送料 定二 四六 料 一價 〇六 八 〇 〇 版 八 〇 頁

九州の海洋に美しくも疾い一の傳説「黒船物語」は必つと皆さんの涙を誘ふことと思ひます。沖野先生の近來の快著です。

ユイモア文學が、茶氣文學が、日本にも生れました。皆様のお馴染の小島先生は、パンキホーラを作つたセルバンテスほどユカイな先生です。笑つて腹をかかへ笑ひながら讀ませよう。

私共の祖先達はどんな處に、どんな風をして、どんな家に、どうして暮して居たでせう。今日から考へまことばかりです。

今日まで児童のための美術では全く一冊もありませんでした。相良先生は東大の美術出の先生です。あらゆる方面から親切に説明して下さいます。名畫も六十餘枚別り込んであります。

ギリシヤ神話の權威中島先生は今日まで日本に紹介されておなかつたギリシヤ神話の幾つかを本書に御紹介下さいます。心からおすすめいたします。

三二四五—東京東替換 院書アデイ 區込牛市京東 六三六—三込牛電 四一町伏山 兌發

◆たしま來がみ休おの夏なイカユいし樂◆

赤坂 清七郎 武井武 雄裝幀 吉田 助治編 武井武 雄裝幀 河野 伊三郎 齋田喬 裝幀 水谷 勝武著 武井武 雄裝幀 野口 雨情著 齋田喬 裝幀

童謠	話童	童謠	話童	話童
木の葉の使ひ	マッチの兵隊	鈴草	西遊記	黄金島

刊近	版六	版六	刊新	版六
送料 定二 四六 料 一價 〇六 〇 八 〇 版 八 〇 頁	送料 定二 四六 料 一價 八六 八 〇 〇 版 八 〇 頁	送料 定一 四六 料 一價 九六 〇 六 〇 版 八 〇 頁	送料 定四 四六 料 一價 二〇 二 四 〇 版 二 〇 頁	送料 定二 四六 料 一價 二〇 〇 八 〇 版 八 〇 頁

水谷まさる氏から摘んで下さつた花です。なつかしいやさしい品のよい童話集です。どうか御母様、御姉様も御一緒に讀み下さい。

朝日に輝く葉末の露を一滴二滴三滴と手の中にはふりおとして下さいました。なぜ葉末の露はかくも美しいのでせう。

その名篇「西遊記」を子供のために書きかへたものです。奇抜な強い孫悟空がいづらしたり、仙術で三蔵法師の危難を助けたりするユカイな順讀記行です。

詩を讀んだり書いたりする事も心を廣くものです。子供の心から出たたふとき童話を集め一つ一つにその大なる所を説明して童話の味ひ方を教へたものです。

その名篇「西遊記」を子供のために書きかへたものです。奇抜な強い孫悟空がいづらしたり、仙術で三蔵法師の危難を助けたりするユカイな順讀記行です。

目のクル／＼と賢い小さなサムが、村長さん達と黄金島を探しに出かける冒険談。ナンバや百鬼の海賊が出ます。怪物も出れる戦争もやるこれは世界的童話家スチヴンソンのお話です。

三二四五—東京東替換 院書アデイ 區込牛市京東 六五六—三込牛電 四一町伏山 兌發





(第六頁の(ねむり御殿)を御覽下さい)

寺内萬治郎講

# 民謡と童謡の作りやう

野口雨情 先生新著

菊半截美装三百廿頁  
箱入羽二重表紙

定價一圓五十錢  
送料金十三錢

## 新版

- 一、新らたに民謡、童謡を作らんとする人は本書を御覽なさい。創作と摸倣から、調子、用語等懇切丁寧に説いてあります。
- 二、民謡、童謡を味はんとする人は本書を御覽下さい。本書は先づ「民謡とは何んなものか」を明かにし、童謡との差違を示し、その發達を興味深く説き、郷土藝術としての價値と使用とを教へて居ます。
- 三、音樂として民謡童謡を味はんとする人は本書を御覽なさい。擬聲に就いて、起承轉結、押韻法など詳しく述べてあります。
- 四、實に本書は民謡童謡を作り味はんとする人にとつて唯一の寶典であつて、本書を讀んで著者の努力に感謝しない人はないでせう。

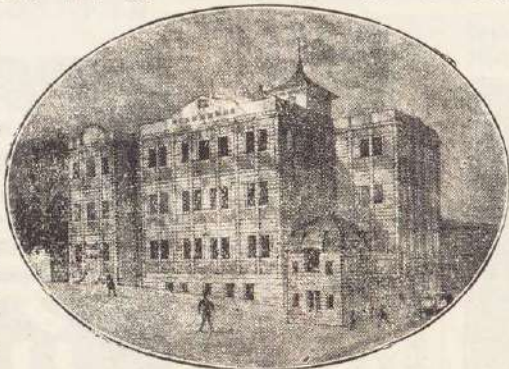
### 發兌所

東京神田美土代町二丁目一番地  
振替東京二五四〇〇番

白揚社

■ 天下青少年の登龍門 ■

會長 尾崎行雄  
 監 理 山内繁雄  
 文 遠藤隆吉  
 學 監 藤吉



(本會事務所設計圖)

日下最新學期開講中  
 入會の最好期は今也!!  
 講義録見本つき會則  
 一 申込次第無料進呈す

大日本國民中學會あり!!

天下の諸君 意を強うし可也

諸君は學校風能の速より醒めなければならぬ、中等教育を受けるには必ずしも中學校に入るを要しない、諸君は居ながらにして中學校に學ぶことが出来るのである。大日本國民中學會の厚善をつくせる講義録は學校以上の學校、教師以上の教師として諸君に臨むであらう。

— 本會二十二年の試練と經驗とはこゝに次の如き 独自の特色を獲得せり。 —

- 講義の新しいこと……模範的通信教授法として推奨せらる。
- 會費の廉いこと……全科の學費一ヶ月分の遊學費にも達せず。
- 學制の正しいこと……正確に中學校令に從ひ全く中學校と同級也。
- 指導の良いこと……通信教授に永き經驗を有するを以て指導懇切を極む。
- 講師の善いこと……中等教育者として名のある實際家を選ぶ。
- 卒業の早いこと……僅か一ヶ年半の短日月にて卒業の榮冠を得らる。
- 基礎の固いこと……創立以來二十二年國家的事業として一般に認めらる。
- 成功の確なこと……本會の門より出でたる成功者の多きこと請ふを用ひず。

東京神田 駿河臺 大日本國民中學會  
 電話 東 京 四二〇〇番 電話神田 三〇〇四番 三〇〇三番  
 口座 名古屋 四二八〇番 特設牛込 五〇九五番



金の星  
八月號

西川勉新譯

# メテルリント童話集

(四六判三二〇頁装幀美、定價金壹圓五拾錢 送料拾錢)

素ばらしく面白い童話集が出来ました。世界に有名な童話は澤山ありますけれども、メテルリントの童話位、世界から歓迎されたものはありますまい。

その有名なお話の中から、殊に各國々の少年少女達によるこぼれる、(青い鳥)(尼の身替り)(犬)(青髯爺さん)、(十二人の盲人)等の本當に面白いものばかりを、皆様におなじみの最も深い西川先生が書かれたのです。各篇には澤山の繪を入れ、三色刷も添へてあり、それに色刷の箱入りですからそれはそれは奇麗な本であります。此の童話集は皆様に読んでいただきたい本です。

野口雨情先生  
時雨初音先生  
新著

## 民謡集 うり家札

野口雨情先生は本書に序して民謡復興運動の基調となる黎明期の烽火であると

新形美本  
拾錢送料  
八錢

發行所 東京東區神田錦町一丁目一ノ九  
米本書店

# 宮城野の萩

本居長世作曲

軽快 ♩

みやぎのの はーぎは すすーきの  
いもーげよ おうーまー すすーきの

かーげに らよつ びり さいた  
かーげを らよつ びり いまげ

おうーまが とほーるこ すすーきの  
みやぎのの はーぎは すすーきの

かーげで おうまを みてる  
かーげで おうまを みてる

# 宮城野の萩

(名所めぐり童謡の九)

野口雨情

宮城野の萩は

すすきの蔭に

ちよつびり咲いた

お馬が通ると

すすきの蔭で

お馬を見てる



急げよお馬

すすきの蔭に

ちよつびり急げ

宮城野の萩は

すすきの蔭で

お馬を見てる



(陸前國宮城野に萩の名所である)



## 殿御りむね

二 浩 野 宇

六

むかし、あるところに、大きな領地を持つた、立派な殿様がありました。そんな立派な殿様のことですから、何の不足もない身分でしたが、唯一つの悲みは、後つぎのお子様も、お姫様もないことでした。殿様は毎朝起きると國中の神様といふ神様の名をすつかり呼んで、どうぞ子供が出来ますようにと祈りました。ところが、その甲斐があつて、到頭一人の女の子が生まれました。殿様のよろこびはどんなだつたでせう。

さて、それから一年たちまして、その可愛らしいお姫様の誕生日のことでした。殿様は御殿にさかんな宴會を開いて、國中の少しでも身分のある人はいふ迄もなく、他所の國の殿様や家來

たちまでをも招きましたが、その時、このお姫様が生れるに就いて、お祈りをした神様たちもお呼びすることを忘れてしまいました。ところが、この殿様の國には、十三方の神様が住んで居られましたのに、どういふ手落ちだつたのか、殿様は十二方の神様をお呼びして、一方だけ洩らしてしまつたのです。

やがて、その日になると、十二方の神様は、勿論同じ御殿の宴會の席でも、特別の部屋に案内されました。十二方の神様は、その誕生祝ひのお姫様に、それぞれ神様らしい、珍しいお土産を持つて來られました。それはどんなものかといふと、たとへば智恵だとか、名譽だとか、繚綴だとか、優しい心だとか、さういつたものなのです。殿様は大變お喜びになつて、一々御自分で挨拶をして、可愛いお姫様のために、それ等のお土産をお受けしました。ところが、丁度十二方のうちの、十二番目の神様から、一番終ひのものを受取らうとしてゐた時でした。突然

七

戸の外に騒しい物音が聞えましたので、殿様はじめ家來のものたちが、何事が起つたのかと戸を開けて見ますと、それはお呼びしなかつた十三人目の神様がお見えになつたのだと知れました。殿様の顔は眞青になりました。が、それよりも、その十三人目の神様の顔は尙眞赤でした。十三人目の神様は、外の十二方の神様を呼んでおきながら、御自分だけ殿様が除け者にしたことを、ひどく怒つて居られたからなのです。

十三人目の神様は、外の呼ばれた神様たちのお土産をちらと洗し目に見ると、急に意地悪さうな笑ひ顔をして、「ふん、中々いろ／＼結構なお土産が並んでゐるなア。智恵に、名譽に、優しい心に、金持に……いろ／＼あるなア。よし、私も土産を持つて來たよ。私だけを除け者にしてくれた代りに、それ相應のお土産を持つて來たよ。」といひながら、青くなつて震へてゐる殿様を睨みつけて、

「私のはかういふんだ。」と十三人目の神様がいひました。「私のは——この姫が十五歳になつた時に、糸紡ぎの車で指に怪我するんだ。そしてそれと一緒に死んでしまふといふんだ。さア、さういふ土産だ。」かういつたかと思ふと、十三人目の神様は、來られた時と同じやうな、騒がしい音を立つて、そこへ歸つてしまひました。

殿様は氣が抜けたやうな顔をして、その後を見送りました。大勢のお附の家來の人たちも心配して、何とか殿様を慰めたいと思ふのですが、慰めやうがないので、やつぱりぼんやりしてゐました。その場の様子が變なので、何にも知らない、一歳の誕生日のお姫様までが、幼な心にも自分の身の上に恐ろしい事が振りかゝつたことを感じたやうに、急に悲しそうに泣き出しました。その時、殿様の一番近くに居られた十二番目の神様が口を開いて、「まア、さう力を落しても仕様がな、氣をしづめ

なさい。」と殿様を慰めていひました。「幸ひ、私はまだお土産をお渡ししてない。といつて、一度神様が贈つたものを、すっかり取消、やうなお土産を上げる譯には行かないが、幾らか災ひが軽くなるやうなものなら上げられる。」といひながら、考へて「お姫様が十五歳の時、糸紡ぎの車で指を怪我する、といふところまではそのまゝにして、死ぬことだけは免れるようにして上げよう。が、死ぬ代りに、私のは三百年間眠らなければなりませんぞ。——さア、私のお土産はかういふのだ。」

すると、それを聞いて、お姫様のお母様はわつと泣き出しました。そしていひますには「ありがたう存じます。けれども、折角でございますが、それでは姫が死ぬことを免れましても、三百年も眠られたのでは、死なれたのと同じことで、私たちは姫の眠つてゐるうちに、死んでしまはなければなりません。」

「それはもつともちや。」と二十二人目の神様がいはれますには、「その代り、姫が三百年眠る間、外の者も三百年眠つたら同じことだから、さういふことにして上げよう。」

けれども、親の殿様の心としては、何とかして可愛いお姫様の不仕合せな災ひを、出来るものなら防ぎ止めたいと思はれました。

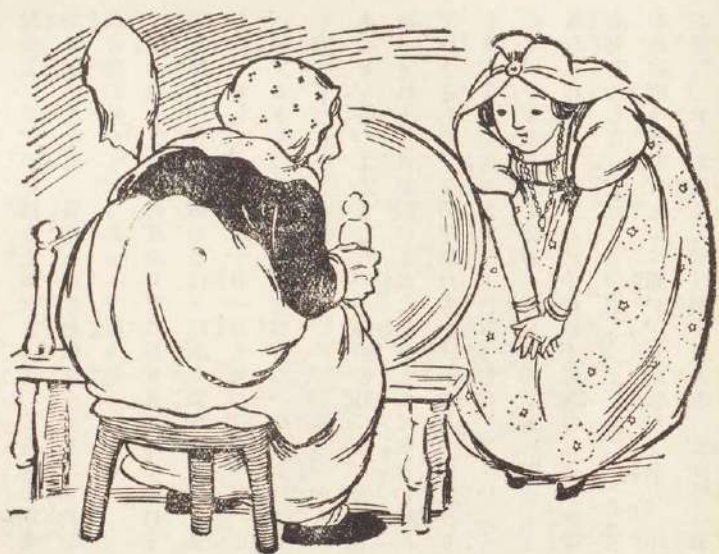
そこで、その宴會のあつた翌日、國中にふれを出して、糸紡ぎ車といふ糸紡ぎ車は、新しいのでも、古いのでも、役に立たないものでも、壊れかゝつたものでも、みんな焼き捨てしまへといふ言ひ渡しをしました。いふ迄もなく、殿様の命令ですから、それに叛いた



ら死刑にしなければなりません。だから、その日のうちに、この殿様の國中から、糸紡ぎ車は影を消してしまつた譯でした。

けれども、どんな殿様の力も神様には及ばなかつたと見えて、それが何にもならないことになりました。といふのは、やがて月日が経つて、愈々お姫様の十五歳の時が來ました。或日、お姫様は、どういふ隙間に家來の目を免れたのか、何かに取りつかれたやうに、ふら／＼と部屋を抜け出して、廣い御殿の中の、なるべく人のゐないと彼方此方とさ迷ひ歩いた末に、ふと穴倉のやうなところへ出ました。その穴倉の方へ下りて行く段々の上に立つた時、下の方から何ともいへぬ不思議な音が聞えて來ました。お姫様はそこでちよつと立止まりましたが、何と思つたのか、つか／＼と段々を下りて、その穴倉の部屋に這入つて行きました。

見ると、穴倉の中には一人の、年取つて、腰の曲



つたお婆さんが、何か妙な形をした車を廻してゐます。お姫様はその車が珍しくてなりませんので、傍へ寄つて行つて、

「お婆さん、その車は何といふものなの？」と尋ねました。

「これかね、これは糸紡ぎ車ですよ。」とお婆さんが答へました。このお婆さんといふのは、いつかの十三人目の神様が姿を變へてゐたものなのです。

「糸……糸、何といふの！ 糸つゝむぎ車？ 變なものね。私、初めてだわ。」とお姫様はその傍に立つて、不思議さうにお婆さんのすることを見てゐましたが、「そんなこと、私にだつて出来るわ。唯さうして手で廻さへしたらいゝんぢやないの。」

「え、え、出來ますとも、出來ますとも。」と意地悪の神様は優しい聲でいひました。「やつて御覽なさいませ。中々面白いのですよ。」

お姫様はそのお婆さんに惡いたくらみがあるとは

知りませんから、いはれるまゝに、喜んでその糸紡ぎ車の柄に手をかけたと思ふと、忽ちその車の端に指を引つかけてました。あッ！ と叫んで、お姫様はその場に倒れました。そして、そのまゝ、こん／＼と眠つてしまひました。

が、お姫様が穴倉の中で倒れたと同じ時に、廣い殿様の御殿中が一度にしんとしまひました。それは十二番目の神様のお土産のためなのです。だから、殿様は御殿の大廣間の中で、何かの會議の最中大勢の家來たちに取巻かれながら、その同じ時に突然眠つてしまひました。奥方は自分の部屋で、腰元と何か話をして居られたのですが矢張りそのまゝ眠つてしまひました。それは人間ばかりでなく、馬小屋の馬も、屋根の軒の鳩も、壁の上の蠅も、それから、竈の中の火まで眠つてしまひました。そればかりか、臺所のお魚の切身まで固くなつて縮み上つてしまひました。そこにゐた料理番は、小僧の頭を打



たうとして、手を振り上げたまま、ぐう／＼  
かき始めました。庭掃きは水を飲まうとして、杓を  
口の端に持つて行つたまゝで眠り込みました。

變つたことはそればかりではありません。それと  
同じ時に、突然御殿のまはりに茨の垣が生え出しま  
した。そして、それが一日一日と延びて行つて、二  
三年するうちには、日かげも射さないほどこんもり  
と繁つてしまひました。さうして、御殿の中の人た  
ちこそ、眠つておましたが、御殿の外にゐる人た  
ちは、それ／＼日が経つと共に年をとつて次々に死  
んで行きました。その子供たちが大人になり、又年を  
とり、そして次々と死んで行きました。さういふ中  
にも、その不思議な御殿の噂は誰から誰に傳はると  
もなしに傳はつて、あの中には十五歳になるお姫様  
を初めとして、大勢の人たちがすつかり眠つてゐる、  
あれは眠り御殿だといふ話が、日が経つと共に、不  
思議な、珍しい話となつて残りました。だから、誰

らう、といつて止めました。それでも、若殿様は聞  
き入れないで、

『いや、さういふ珍しい  
話は、話で聞いたことは  
あるが、實際目の前に見  
るのは初めてだ。是非と  
も私が行つて、そのお姫  
様を助け出したい。』とい  
ひ張りまし。『なアに、  
やり損なつたら、命を一  
つ捨てたらいゝんだか  
ら。』

ところが、何といふこ  
の若殿様は選のいゝ人だ  
つたのでせう。といふの  
は、その日があの御殿の人たちが眠り始めてから、  
恰度三百年目だつたのです。だから、若殿様が、御



も氣味悪がつて、その黒々と繁つた茨の生垣の傍へ  
近寄らうとする者がなくなつた位です。もつとも、  
時々強い土とか、武者修業の土などが、その謎  
を解かうと思つて、茨の垣を破つて這入らうとした  
ことがありましたが、一度その垣の中に這入ると、  
茨の刺に圍まれてしまつて、後にも先にも進めなく  
なるものだから、どんな強い人たちでも、みなそ  
の茨の中で殺されてしまふのです。

そのうちに、何年も、又何年もたちました。或日、  
隣の國の殿様の息子がそこを通りかゝつて、その不  
思議な御殿の噂を聞きました。その若殿様は中々勇  
氣のある人でしたから、それを聞くと、何とかして  
茨の垣をくぐり抜けて、眠つてゐるお姫様を助けて  
やりたいものだ、と決心しました。人々はそれを聞  
きますと、吃驚して、これ迄にもいろ／＼の人がさ  
ういふ考へで出かけて行つたが、一人として、無事  
に歸つた者がなから、お止めになつた方がいゝだ

殿のまはりの、例の眞黒な茨の垣の傍へ行つて、死  
の覺悟でそれに手をかけますと、譯もなく、待ちか

まへてゐたやうに  
垣は二つに割れま  
した。それと一緒  
に、一度に茨の木  
が何百とも知れの  
花を咲かしました  
その花の匂の中を  
若殿様はいそ／＼  
と進んで行しまし  
た。たんぼゝの花  
が、一筋に咲いて  
ゐるのを目的に、  
どん／＼進んで行  
きますと、間もな  
く御殿の入口に着

きました。あちらでもこちらでも、小鳥が楽しさうに囀つてゐます。それも皆、御殿の中の三百年の夢が醒めたのを祝ふやうに聞えました。

若殿様は、大廣間を通りました。そこには殿様初め大勢の家來が眠つてゐます。又奥方の部屋を通りました。そこには奥方と腰元たちが眠つてゐます。その外部屋から部屋と見廻つてゐるうちに、例のお姫様の眠つてゐる穴倉のところ迄やつて來ました。はつと思つて、そこで立止まつて、暫くの間、可愛らしいお姫様の寝姿に見とれてゐました。

その時に、丁度御殿中の人たちの長い夢が醒めたのです。殿様も奥方も、家來たちも、腰元たちも、馬小屋では、馬も醒めたと見えて、鳴く聲が聞えます。鳩も屋根の上でくらくくと鳴いてゐます。蠅が壁を離れて飛び出しました。竈の中でも火が突然目を醒まして、赤々と燃え始めました。裏所の魚の切り

身まで柔らかなになつて、伸びをしてゐる様子です。その代り、料理人はいきなり振り上げてゐた手を三百年振り下ろしたかと思ふと、小僧の頭をこつんと打ちました。小僧が泣き出しました。庭番はごくりと三百年間くはへてゐた杓の中から水を飲みました。そして、その外には何にも變つたことがありません。唯その間に三百年たつたといふだけの話なのです。いふ迄もなく、穴倉の中でも、お姫様は目を醒ました。そして、見ると、自分の前に立派な、見たこともない、若い殿様が立つてゐます。何は兎もあれ、その若殿様は、お姫様のために命を捨てるつもりでやつて來たのですから、お姫様はいふ迄もなく、殿様も、奥方も、それを聞くと大變喜びました。夢から醒めたやうな、——といふのは、かういふ場合に違ひありません。やがて、この若殿様がお姫様と結婚して、殿様の後をついだことに申す迄もないこととせう。(をほり)



# 武兵衛ちがひ

小島 政 二 郎

## 前 の 日

世間には、随分疎忽しい人がゐるものです。私の知つてゐる人で、マツチを羊羹と間違へて、ガヂリ噛んだ人がゐます。衣紋竹每着物を着て、外へ出た人もゐます。これは昔の話です。江戸の町に、太兵衛といふごく疎忽しい人がゐました。すると、その二階を借り

て、武兵衛といふ人が住んでゐましたが、これがまた大の疎忽者で、そのくせ、二人は兄弟のやうに仲よく暮してゐました。

或日のことでした。武兵衛が「太兵衛さん。今日は深川の八幡様のお祭だ。私は八幡様が信心だから、今日は商賣を休んでお詣をし來ますよ。」

すると、太兵衛が

「いや、神信心も結構だが、今年は八幡様の本祭で、大變な人出だと云ふから、危いから止しにしたらよからう。今日に限つたことではあるまい。お前は疎忽しいから、心配だ。」

「なあに、大丈夫だよ。幾ら人出が多いつたつて子供ちやあるまいし、まさか踏み潰されもしまい。」

「さうかい。それちやア行つて来るがい。よく氣を附けて早く歸つてお出でよ。」

「うん、急いで行つて来る。」

そこで、武兵衛は出て行きました。が、やがて永代橋の處まで来ると、大變な人出で、身動も出来ない位でした。

「押しちやいけませんよ。押しちやいけませんよ。」と、武兵衛さんは人波に揉まれながら呶鳴つてゐました。

すると、向うから人を掻き分けながら来た人があ



りましたが、いきなりドーンと武兵衛さんの胸に突き當りました。

「アイタタ。やい、氣を附けろ。——お、痛い。ひどいやつだな。俺の胸へ厭といふ程頭を打つけやがつて……。石頭の甲羅を経た奴だから堪らない。お痛かつた。ひどい奴があるもんだ。真中は危いから端の方へ行かう。又あんな奴に突き當たられると大變だ。」

武兵衛さんは、そんなことを呟きながら、懐へ手を入れましたが

「オヤツ。オヤツ、紙入がない。ハテナ、どうしたんだらう。畜生、今のは拘摸だつたんだな。どつちへ行つたらう。分らないな。この人だから追ひ掛けることも出来ない。太兵衛さんに留められたのに来たから、こんな目に逢つたのだ。忌々しいな。もうお祭へ行くのは止して家へ歸らう。紙入がなくつては仕方がない。俺の財産は残らずあの中へ這入つ

てゐるのだ。お金が七兩二分に、幾らか小錢も還入つてゐた筈だ。——ヤツ大變だ。あの中には手帳が入れてあつた。あれがないと、明日から商賣が出来ない。」

武兵衛さんは、夜の古着屋さんでした。——一、人頭垂れて考へ込んでゐると

「おい武兵衛さん。」と肩を叩いた者がありました。目を上げて見ると、古着問屋の山田屋の旦那でした。

「やあ、こりや山田屋さん。」

「何を武兵衛さん、考へ込んでゐるんだ。」

「いえ、今こゝで紙入を取られてしまつたのです。」

「何、紙入を？ またいつもの疎忽者で、家にも置き忘れて来たんだらう？」

「いえ、確かなんで。今ネ、向うから来た奴が、ドーンと打つかつて行つたかと思ふと、紙入がなくなつてゐたんです。」

「うん、そんなら拘摸に違ひない。そりやひどい目

に逢ひなすつた。どうです、このまゝ私の家へ来て一杯やりませんか。私の家はすぐ近所だから。」

「え、有り難う。ちやアお供しませう。」

これから、この山田屋さんの家へ行つて、御馳走になることになりました。お酒を飲んでゐるうちに、紙入を盗まれたことも忘れてしまつて、いゝ心持に酔つて、盃の遣り取りをしてゐると、俄に表の方で「わあッ、わあッ」といふ聲が起りました。山田屋の旦那が

「何だ何だ。小僧をちよつと見せにやれ。」

間もなく小僧が歸つて來ての話に

「旦那、大變です。お祭であんまり人が出たので、今、永代橋が落ちて大勢人死があつたさうです。」

「え、永代橋が落ちた？ そりやア大變なことだ。」

——武兵衛さん、早く歸つて來てお互に命拾ひをしたね。」

「桑原桑原、若しあのまゝ行つてゐれば、私は丁度

今頃永代橋へかゝつてゐた頃でせう。」

「さうさ。丁度さうかも知れない。」

「さうとすれば、私なんか疎忽しいから、まづ第一番に川へ落ち込んで、水を澤山飲んで土左衛門と名を變へてゐたでせう。」

「まあ、なんにしても命拾ひをしてお互に目出度い。紙入を取られた位には替へられない。」

「全く大難が小難で済んだ譯です。今になつて見れば、あの掏摸は、私にとつちや命の大恩人です。お掏摸様、お掏摸様。」

「あはは……。」

二人は大喜びで、また改めて御馳走を變へてお酒を飲み始めました。さうして二人ともグデン／＼に酔ッ拂つて、そのまゝ武兵衛は、そこへ寝てしまひました。

### 翌る日

その日太兵衛は、表で永代橋が落ちたといふ話を

聞いて、眞蒼になつて慌てて家へ歸つて來ました。しかし、幾ら待つても、武兵衛が歸つて來ません。

「こりや武兵衛も川へ落ちて死んだのかしら。」と心配しいしい、その夜はとう／＼眠らずに明かしてしまひました。

と、翌る日になると、大家さんが

「太兵衛さん、ユライ事が出來た。」と云つて駆け込んで來ました。

「武兵衛が永代橋から落ちて死んだとよ。今お役所から知らせが來て、早く死骸を引き取りに來いと云つて來た。」

「エーッ、本當ですか。」

「誰がこんなことで嘘を吐くものか。本當だ。」

「だから、私が留めたのに、聞かずに行くからこんな事になるんだ。大家さん、どうしませう。」

「何は兎も角、一刻も早く死骸を引き取りに行かなければイケない。私も一緒に行きたいが、急用があ

つて今一絡には行かれぬ。お前、この差紙（お役所から來た手紙）を持つて先へ行つておくれ。後から私もすぐ行くから。」

そこで太兵衛は急いで支度をして、根が疎忽者ですから、羽織を裏返しに着て、片方の足に草履を穿き、一方の足に足駄を穿いて、慌てくさつて家を飛び出しました。ドン／＼／＼夢中になつて駆けで行くと

「太兵衛さん、太兵衛さん。」と呼び留める者がありました。で、ヒヨイと目を上げると、武兵衛がホンノリとした顔色をして立つてゐるぢやありませんか。

「オヤ、お前武兵衛さんだな。」

「うん、武兵衛さんだ。」

「武兵衛さんもないもんだ。お前のお蔭で、俺はどんなに心配したか知れはしない。」

「どうして？」

『どうしてッて、お前は昨日永代橋から落つて死んだことを知らないのかい。』

『あゝ、さうだ。永代橋から落つた。』

『それで、お役所から、お前の死骸を引き取りに来いといふ差紙が来たんだ。で、俺はこれから駆け附けて行くんだが、こゝで逢つたのは幸ひだ、一緒に来てくれ。』

『よし、一緒に行かう。』

二人は裾を端折り息を切らして永代橋まで駆け附けました。見ると、河岸に假小屋が立つて、お役人が控へてゐる、その後の方には、死骸がもう棺に入

れてすつと並べてあります。

太兵衛は、役人の前へ進んで、差紙を出しました。

役人は暫くそれを讀んでゐましたが

『武兵衛といふ者の死骸を引き取りに来たんだな。

よし／＼。死骸は、棺に入れて名前が書き附けてあるから、間違へないやうに引き取つてまわれ。』

『何を云ふんだな。死ねば顔が變るんだよ。』

『幾ら變るたつて、こりや私ぢやない。』

『おい、武兵衛さん、冗談もいゝ加減に云つてくれ。本當にもう、俺はお前のことでどんなに心配をしたか知れない。おまけに、こゝまで死骸を引き取りに出て来て、俺でないとは何といふ云ひ草だ。よくもそんな事が云はれた義理だ。これがお前でなければ、俺はどうするんだ。』

『どうでも勝手にするさ。』

『どうでも勝手にしろとは何だ。お前のやうな分らない奴はありやしない。』

かう云つたかと思ふと、いきなり太兵衛は鞆固を拵へて、武兵衛の頭を打ちました。

『何をするんだ。』

『あんまり分らないから殴るんだ。』

『分らないと云つたつて、私はこんな顔ぢやないもの、仕方ないぢやないか。』

『へえ、有り難う存じます。——おい、武兵衛さん、こつちだ、こつちだ。ホーラ、こゝにあつた。昨日俺があんなに留めたのに聞かないから、お前こんな姿になつてしまつたんだぜ。』

『へえ。』

『分つたか。』

『分りました。』

『分つたら、一應死骸を検めろ。』

『へえ、只今検めます。——さあ、武兵衛さん、蓋を明けて見よう。』

ドッコイショと二人で蓋を明けて見て

『おや／＼、恐ろしい顔をしてゐるせ。御覽。』

『こりやア誰だらう。』

『誰だらうぢやない、お前だよ。』

『へえ。妙な顔だな。變だな。太兵衛さん、こりや私ぢやないよ。』

『おや、まだ云ふ氣か。』

すると、役人が

『これ／＼。』

『へえ。』

『何を大きな聲で云ひ合つてをる？ 早く死骸を引き取つて行け。』

『へえ。』

『お前の連れてゐるのは何だ。親類か。』

『いえ、親類どころではございません。本人でございます。』

『何？』

『これが、その本人で……。私は引き取らうと存じます。本人が、俺ではないと云つて強情を張つて困ります。どうぞお役人様から云ひ聞かして戴きたう有ります。』

『待て待て。その方はをかしな事を申すな。それは何か、武兵衛といふ同居人か。』

「へえ。」

「分らん。本人が死んで、本人が死骸を引き取りに来ると云ふのはどういふ譯だ。」

「成程。」

「成程ではない、どういふ譯だ。」

「私にはちつとも分りません。」

「うん、お前は餘程の疎忽者だな。」

「疎忽者にもなんにも。大關と横綱と揃つてをりますので。」

「これは何かの間違だ。——お前は確に武兵衛だな。」

「左様でございます。」

「こゝで役人は暫く考へてみましたか。」

「武兵衛、お前は何かなくしたものはないか。」

「何もございません。」

「いや、よく考へて見ろ。」

「あゝさうだ。ございます、ございます。紙入を拘ら

れました。」

「いつ拘られた？」

「昨日、永代橋の傍まで行きますと、私の胸に打つかった奴がございます。そのとたんに、紙入が無くなりました。」

「うん、さうか。それで漸く分つた。ちよつと待て。見せるものがあるから。」

かう云つて役人は、大きな箱の中から、一つの紙入を出して武兵衛に見せました。

「あ、こりや私の紙入だ。中に七兩二分と、小銭が這入つてゐます。——どうも貴方、冗談ちやございませぬ。人の胸へ打つかつて紙入を拘るなんて……。」

やくにん「馬鹿を云へ。私がそんなことをするものか——ハハハ……。お前は餘程疎忽者ぢやな。これはかう云ふ譯だ。死骸の懐中を檢めると、紙入の中から手帳が出た。それを見ると、太兵衛同居人武兵

衛といふ事が記してある。役所の方では、その處を便つてお前方の處へ知らせにやつたのだが、これは賊が死んだのぢや。妙な間違があるものだな。人は



いかん。悪い事をすれば、かう云ふ事になる。——誠に目出度い。」

「ぢやア私は死んだのではありませんか。」

悪い事をしてはならんと云ふのは此處の事だ。お前が賊のために紙入を取られなかつたら、お前が死ぬところだつた。つまり、賊がお前の身代りに立つたのだ。人といふものは、何事もよい事をしなければ

「馬鹿なことを云ひなさい。死んだ者がこゝへ來られるか來れないか、よく考へて見なさい。」

「成程、死んぢや來られません——太兵衛さん。」

「武兵衛さん。よかつたなあ。」(をばり)



ラム王の生

{5}

武井武雄

ラム王は、箱根丸がいやに機械づくめであり、妙に文明の匂ひがするので、いやになつて、金曜日の晩に、こつそりとデツキから、月夜の波の上にとびおりてしまつたのであります。

すると恰度その邊を黒潮が瀬を立てて流れて居りました。ラム王は黒潮に乗つて、浮いたり沈んだりボカリボカリと流れて居りましたが、一週間もたつと、何だか心細い氣がしてきました。こんな有様ではどうせ自分には一生人間にかへれる日は来まい。いつまでもゴム人形の姿で、太陽と月と星と、青白い魚と、それから夜光蟲とを友達として、かうしてあてもなく、ボカリボカリと流されてゐるのだらう。

……と思つたからであります。

ところが、恰度次の金曜日のひるすぎに、自分の體が急に、ビタリと止まりましたので、ふと氣がついてみると、綺麗な桃色の砂の上に打上げられてゐました。

濱邊には、小づくりの男が一人、しきりに石臼の様な道具で、鮑の貝殻をすりつぶしながら、わけのわからない鼻唄をうたつてゐました。ゴム人形のラム王が、チョコ〜と側へよつていつて、その男の前へ立つてひよいと一禮したのに、男はあひかはらずすましたもので、

チツク チツク チツク タツク。

チツク チツク チツク タツク。

と唄つてゐました。ラム王は妙な奴だなあと思つて、

「先生、その粉は何に使ふんだい。」

と、聞いてみました。その男は、いかにもたるさうな眼で、ちろりとラム王を見下して、

「とめ薬だよ。」

と云つたまゝ、又グヂリグヂリつぶしてゐました。そのうちに、天の向うの方で、いきなりバタ〜〜〜バタ〜〜と大きな音がはじめました。それは何か

しら機械のせんまいのほどけるやうな、素敵におそろしい雷に似た音でありました。

と、それと一緒に、今貝殻をつぶしてゐた男の白髪が、だん〜黒くなつてゆくのに驚いてゐると、男は音もたてないで、スウツと小さくなつていつて、見る／＼うちに子供になり、つゞいて赤ん坊になつて、コガアコガアと泣きだしてしまひました。すると、またそれが急に大きな大人になつて、同じやうに若返つてゆくのであります。一方側の撞木にとまつてゐた鸚鵡を見ると、恰度その時、雛になつたのが、バツト可愛い卵に變り、そこへ飛んできた一羽の雌のお尻の中へ、スポリとはひつてしまひました。この變化は、繰返し繰返しいつまでつゞくかわかりませんでした。暫くぼんやり見とれて居りますうちに、いつの間にか今まで自分の倚りかゝつてゐた、大きな夾竹桃の樹が可愛い双葉になつて、チクリと生えてゐました。けれどその双葉さへ、間もな

く土の中にもぐつてしまひました。

ラム王は、本當にびつくり仰天してしまひました。やがて逆に齡をとつてゆくその男のお爺さんが出た時に、急いで聞いてみました。

『お爺さん、この不思議は一體何のわけだい。』

『時といふものが昔の方へはどけて行くんだ。お前の様な奴が、この島へ来るからこそ、時の機械がさかさまに廻り出したんだ。お蔭でもうこの世の中にも用のない俺達までも、又引張り出されていく迷惑だ。早く止めておくれよう。ア、ウマウマホチイ、オギヤアオギヤア。』

喋りながらすん／＼赤ん坊になつてしまひました。恰度その時、夜明けから夜へ戻りかけたまだ明るい空に、三つの星が見えてきました。ラム王はふとさつきの止め薬のことを思ひ出したので、手に少しばかりつかんでゐた貝殻の粉を、プツと天の方へ向けて吹きあげてみました。すると今まで豊になる程鳴

つてゐた、時のほどける音が、バタリと止つてしまひました。それと一緒に、自分の前に居た男は、ピタリと若返るのを止めて、ア、ア、ア、ア、ア、ア、と、欠伸をしました。それから、ふと顔を見合せたところが、二人ともびつくりして、いきなり抱き合つてしまひました。

『お、ラム王様ちやアありませんか。どうしてこんなところでないところへ来ていらつしやるんです。』

『さうださうだ。お前はエツベ國で私のうちとお隣り同志の、時計屋のチツクタクだつたね。お前こそどうしてこんな島へ来てゐるんだ。』

『こゝは島ちやアありませんよ。どうしてなか／＼大陸の續きです。それは何百年かの後には島にならなとも限りますまいがね。私は、それ、時計にはめ込む寶石の仕入れに出かけて、恰度一年半になり

ます。随分方々旅行しましたよ。もうこゝを打ち切りにして國へ歸らうと思つてるところです。女房や子供が待つてゐますからね。』

『さうだ。こゝは行末、島になるんだよ。そして僕は君のすうつと末の子孫にも、たつた今逢つたばかりだよ。何しろ未來の國へふつと迷ひ出てしまつたのだからね。あゝさうだ、それでよく解つた。君は時計屋だつたね。成程ね君の十數代後の子孫はこの島で、時を止める薬をこさへてるよ。チツクタクなんて唄ひながらね。さういふ譯だから、君は多分エツベ國へはもう歸れずに、こゝで暮すことになるだらうよ。』



さう云へば何だか星座の具合が僕達の世紀にびつたり歸つた様だね。エ、ト待てよ、ウン解つた。僕がああゴールデンバット號から水萍草の國へ飛込んだから、海の底には夜も晝も、第一日の勘定といふものが無いので、あそこですつかり年がたつてしまつたんだね。五百年も六百年も、道理で浮び上つたら何だか妙ちきりんな船が動いてると思つた。蒸汽船だね、日本の箱根丸といふんだよ。ペンキ臭い船だつた。あゝ夢の様だ。元の時代にかへつて又みんなと逢へるんだね。』

『そんな狐につまゝれた様な話はどうでもいい。だが早くどつかへ行かないと、こゝはあゝないですよ。』



夜になるとライオンや、バクイタイや、毒蛇がすばらしい群をなして出てくるんだから。」  
この言葉の終るか終らないかに、暗い空にだしぬけに暴風の様な音が生じて、ラム王の姿は見えなくなつてしまひました。  
ラム王は、バクイタイといふ鷲の百倍もある、大きな蝙蝠にさらはれてしまつたのです。ラム王が一



二八  
生一遍の命がけの時が来たのであります。ラム王は軍艦の鐘の様な大きな爪の中で、素早く小さな青銅の鏡に身を變へてしまひました。バクイタイは、高い空を翔りながら、ふとその鏡の中をみると、自分とそっくりの顔をした奴が寫つてゐますので、さては仲間をつかんで来たのかと思つて、いきなりつかみかゝつて格闘をはじめました。物凄いい叫び聲をあげて、咬んだりひつかいたりしてゐるうちに、滑らかな鏡は、ツと爪の間をすべつて、大空から風を切つて落ちてゆきました。やがて岩角に當つた鏡は、チーンと谷間に響き渡つて砕けてしまひました。  
谷間は雑草の蕾に露をふくんで、本當に靜かに夜があけました。けれどラム王は、再びもとの人間に還ることは出来ませんでした。砕けた鏡は、そのまゝ寂しく草の上に散らばつてゐました。ラム王の命は、もうとても見込があるまいと思ひます。  
やがて、そこへ驢馬を曳いて通りかゝつた商人が



この質のいい青銅を見つけて、早速拾ひ集め、ボケツトへ收めて、町の方へやつてまゐりました。商人は、町の「飾り屋」を一軒一軒訪ねて、「この鏡を、きずのわからない様について貰へまいか。」と云つて歩きまゐりましたが、みんな斷られてしまひました。仕方なしに、その鏡のかけらを時々ボケツトから取出しては、自分の顔を寫し、質のいいのを自慢に楽しんでゐました。處が、いつも自分の顔が悲しうに寫つて、鏡が何だか小さな聲で、ウーンウーンと唸る様に聞えてなりませんので、商人は氣味が悪くなつて、とうとう山の手の洞穴に棲む、魔法使ひのところに持つて行つて、見て貰ふことにしました。  
魔法使ひは、この洞穴に町の人達の曾祖父の代から住んでゐる、すばらしく偉い奴なのであります。ですから、この砕けた鏡を一目みると、  
『お、ラム王がひどい姿になつてしまつたなア。』  
と、云つて嘆息しました。商人は何のことやら

まつぱり譯が解らず、口をワングリとあいたまゝ、魔法使ひの顔を覗き込んで、眼をバチクリバチクリやつてゐました。魔法使ひは、何やらブツ／＼口に呪文を唱へながら、その鏡を器用につき合せました。それからものゝ二時間程もグチャ／＼グチャ／＼、何か唱へてゐると、鏡は静かにラム王の姿に變つてきました。しかし、顔は青ざめて唇は紫色に、手も足も氷の様に冷めたく、もうすつかり硬くなり切つてゐました。この時、いきなりドツスン!!!といふ音がしました。商人がまつ青な顔をして、尻餅をついてしまつたのです。

『あゝ桑原桑原桑原、俺は、あゝいけない、縁喜がわるい。ししし死人をポケットの中へ入れて歩いてゐたのかい。あゝ鶴龜鶴龜。』  
腰を抜かした商人はブル／＼ふるへてゐました。魔法使ひもしばらく首をひねつてゐましたが、『もうとてもだめだ。』と、云つて眼をつぶりましたけれど體を順々に撫でてゆくうちに、踵のあたりへ

来た時、急に輝いた顔になつて、

『あゝ、踵の筋がまた一本いゝ様だ。』  
と云ひながら、魔法使ひは急いで水澤の國の老婆を呼よせました。老婆さんは、卵を育てる水を片手にさげて走つて來ました。そしてその水を、ラム王の額のところへ、ひつきりなしに垂らししました。一方魔法使ひは片手に踵の筋を揉みながら片手に脈を握つてゐました。蠟燭がチ／＼／＼云つて燃えてゐる外、静かな時がつゞきました。やがてラム王の唇には、かすかに薔薇いろがさして來た様に見えました。この時です、魔法使ひがいきなり、

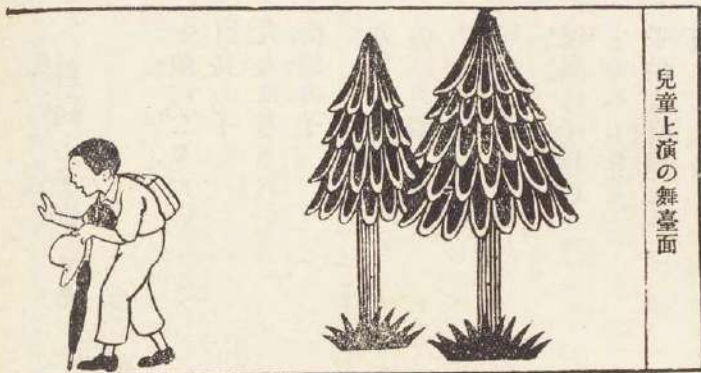
『脈が打つてきた。』  
と叫びました。老婆はラム王の耳に口をつけて、『ラム王様!!ラム王様!!しつかり遊ばせ。婆が昔のお禮にまゐつてをりますよ。』と、叫びつゞけました。ラム王は、この時はじめて、僅かに細く、腫を見開きました。そして唇には、いつの間にか微風の様な微笑が見えてきました。(つゞく)

目高と子供 (推薦)

三須英三

金魚になりたい  
目高の子  
大人になりたい  
街道の子  
水田に稲の  
のびる頃  
ひとりひとりと  
居なくなる  
目高は子供に  
とらへられ  
子供は町へと  
賞はれた



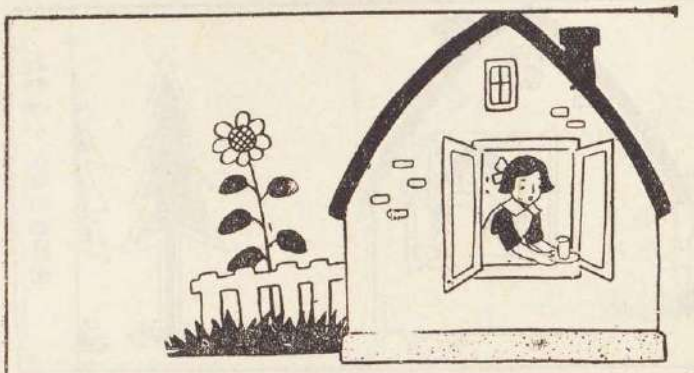


はじめに、此、芝居のやり方を  
教へてあげませう。まづ此の芝居  
には大きな道具がいります。西洋  
の山の中の百姓家と、それからで  
きるなら背の高い木が一本いりま  
す。然し簡単にこしらへることも  
できます。これは皆さんが自分で  
役者になつてする場合です。

らへて舞臺を作ります。人形も、  
ほんたうにこしらへて、三本の糸  
(頭、右手、左手) 或は五本の糸  
(このほかに兩足) で吊つてする  
のは複雑な方で、簡単にしよう  
と思へば、たゞ紙に人の形を描いて  
切りぬいて、何かで立たせるやう  
にして、手で動かしてもいいので  
す。それから「影繪」といふやり  
方で、切りぬいた紙の影を、白い  
紙なり、白い幕なりにうつして、  
手で動かしてやつてもできます。

# 山のふもと(兒童劇)

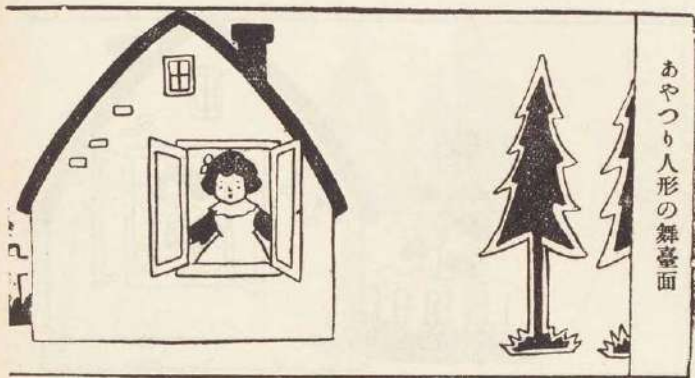
小寺融吉



此の時は幕のうしろに電氣がなく  
てはなりません。  
つまり皆さんが自分で役者にな  
つても、人形を使つてもできます。  
そしてその人形も、糸で操つても  
よし、紙で切りぬいて、手で動か  
しても、また影にうつしてもでき  
るわけです。もちろん、人形の時  
も、役々の言葉は皆さんが蔭で云  
はなければなりません。人形です  
と、いろいろな舞臺装置も畫學紙  
で小さくこしらへられるから樂で  
す。どうか、いろいろな風にやつ  
てみて下さい。

よんばり一軒立つてゐてもよし、  
また上手寄り(見物の方から見  
て右手)に、家の一部分だけを出し、  
あとの部分は、見物に見えないや  
うにしてもいいのです。上手寄り  
と云つたところで、舞臺のほゞま  
ん中まで家は来てゐます。(但しこ  
れは舞臺が小さい場合)  
木は一本でも二本でも、とにか  
く葉がこんもりとしてゐて、この  
所が山の麓だといふ心持が現はせ  
ればいいのです。木の位置は、家  
がまん中にある時は、その上手、  
家が上手寄りに一部分ある時は、  
まん中にきます。人物の出入りは、  
家が上手寄りの時は、そのうしろ、  
即ち上手おくから出なければなり

あやつり人形の舞臺面



ませんが、家がまん中にある時はいつもの通り、上手から出られま  
す。下手から出るのはいつもの通  
りです。

背景は黒幕を使つても、青い夜  
の空をかいてもいいのです。

煙突から煙を出す仕掛けは、紙  
で筒をこしらへて、大きな人にと  
のんで、煙草の煙を口の中でため  
ておいて、つゝと筒の中に吹きい  
れてもらふと、煙突から旨く出ま  
す。鼻の鳴聲などは皆さんが工夫  
して下さい。

次に、出てくる者ですが、狼や  
兎はお面を冠ります。あとは繪を  
見て考へて下さい。狼が屋根の  
上を歩くのは、人形でなく、皆さ

んが自分でする時は、家の道具の  
蔭にテールをおいて、娘がテ  
ールの上のつかり、首さへ見  
物に見せればいいのです。

さて、いよ／＼チリーンとベル  
を鳴らして芝居が始まります。幕  
があきました。舞臺は寂しい一軒  
家と、背の高い木がぬつと立つて  
ゐるだけです。時刻は日が暮れて  
間もない頃です。ピアノで何か夜  
の音楽を奏して幕をあげるのも面  
白。

クララといふ可愛い娘が木にもたれ  
てゐます。鼻の鳴聲が聞える。

クララ 山は日が暮れるのが早いこ  
と。夜になると急にさびしくな

クララ。こゝから町までは、一里近  
くあります。

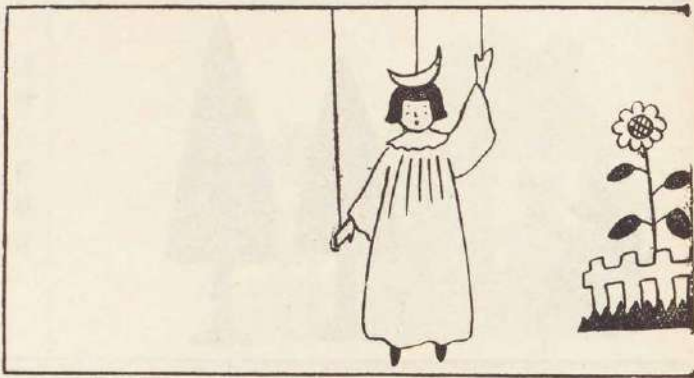
ジャン。一里近く……(ガツガツする)  
たいへんだなあ。弱つたなあ。

クララ。山を下りてゐらしたのでせ  
う？ くだびれました？

ジャン。へと／＼になりました。お  
嬢さん。此の山は道が悪いので  
すねえ。それに熊や狼がゐま  
すねえ。おつかなかつた。時々  
うなる聲が聞えました。こゝは  
もう麓になりますか。

クララ。えいさうです。

ジャン。やつと麓まで下りてきても  
まだ一里もあつちや、とても此  
のまゝ歩けない。腹がへつたん  
です。すみませんが、水を一杯



るわ。あゝ、お月様がお上りに  
なつた。(と嬉しうに向ふを見上げ  
る。早くこつちにゐらつしやれ  
ばいいのに。

クララは家へ入る。但し月口はあり  
ません。道具の袋に入るのです。す  
ると窓に明りが透れる。鼻はまだ鳴  
きつゞける。上手からジャンといふ  
若い男が旅人の姿で出て窓の所にき  
て。

ジャン。今晚は……今晚は……

クララ。(聲だけ聞える)どなたですか？

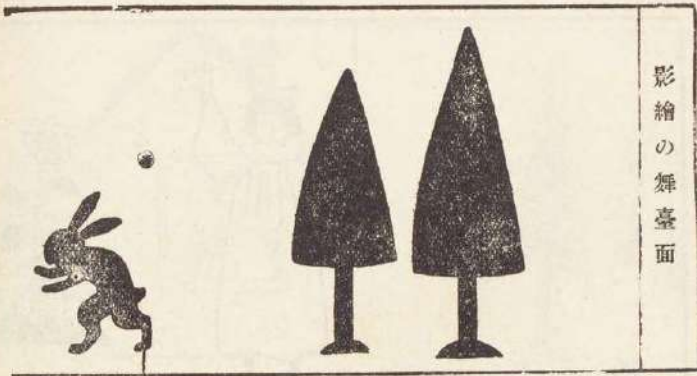
ジャン。旅の者なのですがね。一寸

おたづねしたいので。

クララ。はい、はい。(窓を開けて)な

んの御用ですか？

ジャン。あの、こゝから町へは、も  
うどれほどありませうか？



下さい。

クララ。それなら、お乳をあげませう。(窓から首を引つこめる。やがてコップに乳を入れたのを出してシヤンに渡す) シヤン。(驚きさうに受取つて) ほう、山羊の乳ですね。(ケツと呑みほす) あゝなんとも云へすおしい。 どうもありがたう。

クララ。(また窓からパンを皿にのせて出す) パンも少し残つてあります。 シヤン、パン? これはどうも(もらつてたべる)實に御親切にありがたうございました。おかげで勇氣が出ました。町には私の兄の店があるのです。私はここに行つて働くのです。ちや、おいとまします。(丁寧におじぎする)

クララ。氣をつけていらつしやい。(おじぎする) シヤン。さよなら。

シヤンは下手に入る。クララはあとを見送る、ここから音楽をいれてもよろしい。一寸の間。

クララ。(空を仰ぎ) あゝいつの間にかお月様が早くこつちに…… (と手招きする)

月が下手から出る。

月。クララさん。(とやさしく呼ぶ)

クララ。あら、お月さま。(窓から覗きさうに半身をのりだす)

月。今夜は歌を歌はないの?

クララ。(笑ひながら) 忘れてしまひましたの。だつて…… (と云ひかけ、心配さうに) そら、今、町の方へ人が一人行きましたでせう。道を



迷はなかつたかしら。

月。え、迷はないやうに、私がよく道を照してあげましたから。クララさんはほんとうに感心です。ねえ。よくパンと、お乳とをあげましたのねえ。あの人は大層喜んで行きましたよ。

クララ。お月さまは空にゐてごらんになつたの?

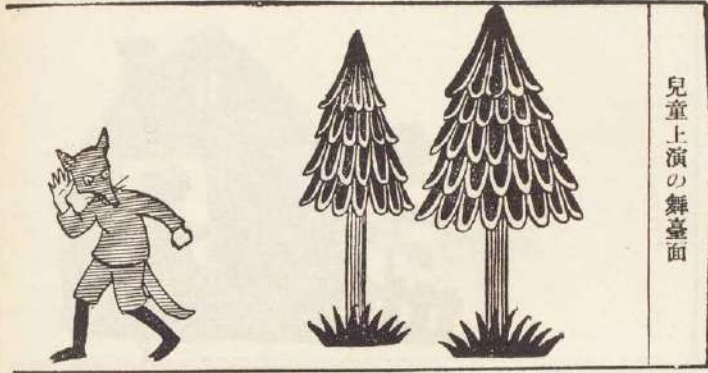
月。え、何でも見てゐますの。クララ。けど、わたし、あの人がきたので、歌を歌ふのを忘れましてのよ。

月。さうだつたの? あゝその代り、あの人が愉快さうに歌つてゆきましたよ。

クララ。まあ、ねえ、お月さまは、

どうしてこゝに永い間遊んでつて下さらないの? 町の方からゐらしたかと思ふと、すぐ山の方に行つておしまひになつて、つまらないわ。(とうらめしさうに云ふ)

月。(なぐさめてしづかに) だつて、それが私の役目ですもの。どこの村でも、どこの家でも、みんなクララさんのやうに、私を待つてゐるのですもの。だから夜になつてから朝になるまで、私は夜どほし東から西へ西へと、少しも休まないで、空を歩かなければなりません。空はみんなに廣いでせう。私の歩く道もずるずる長いのですよ。(クラクラなづくしお



月さまはクララの手をとりながら海の上を照らす時は、舟にのつてゐる人が、そりや喜びますよ。森の中を照らす時は、さつきのやうな旅人が、そりや喜びますよ。私を見ては、鐘を鳴らすことにきめてゐる山寺の坊さんもありますし、やつぱり、私を見るとき、忘れてゐた古い子守歌を思ひだして、赤ちやんを寝かす町のおかあさんもあります。ですから、みんながクララさんと同じやうに、待つてゐて下さるので、私も一つのところに永くゐられませぬの。(クララの頭をなでる)

クララ。大層お忙しいのですこと。

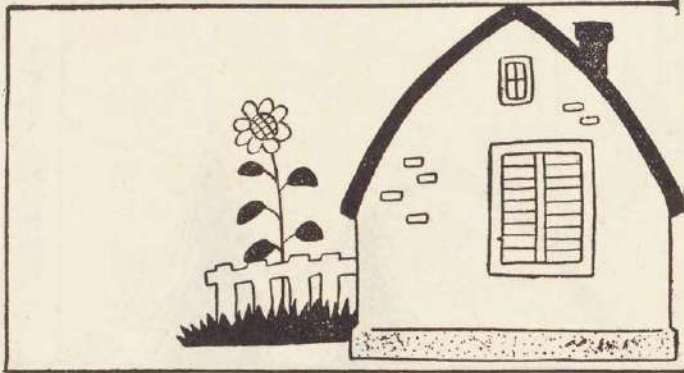
では、私がお月様の代りになりませうか？

月。(ふしぎさうに) 私の代りに？

クララ。だつて、あんまりお忙しいので、お氣の毒ですもの。そして私が代る間に、お月様はこの家にいらして、私の椅子に腰かけて休んでらつしやるといゝわ私、ごちそうたくさんこしらへておきますから。

月。けれど、クララさんが、どうして私に代れませう？

クララ。でも、よそのおぢさんやおばさんが、クララや、お前の目はお月さまのやうだよ。お月さまのやうに光つてゐるよと、よく云ふのですもの。だから、



私が代らうと思つて……(とあとけなく云ふ)

月。(笑つて) けれど、クララさんは空を歩くことができます？

クララ。あゝ(とびつくりする) 私はほんとうに……

月。(やさしく) クララさん。私は空の月で、あなたは人間の月になつてゐればいゝのです。私が空から海の上を照らして、船にのつてゐる人を喜ばしたり、山や森を照らして、旅人に道を教へたりする時に、クララさんは、さつきのやうに、おなかのすいた人にパンやお乳をあげたり、困つてゐる人にやさしくしてあげるといゝのです。分つて？ お月様

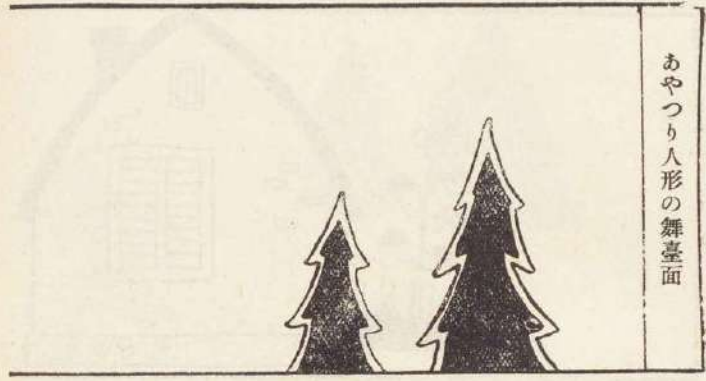
は空に一つあるばかりではありませぬのよ。あゝもう山の方へゆかなければ……さよなら、また明日の晩にね……(上手にゆきかかす)

クララ。一寸待つて。(月は振返る) あのほら、お月様はいつか私に約束して下さつたでせう。あの、私に妹を一人下さることを。

月。クララさんが、一人ボツチで淋しいから、かあい、妹を一人つれてきて下さい、といふお約束でしたねえ。

クララ。え、きつと……早くどこからかつれて来て、……明日はまだダメですか？

月。さうですなえ。まア待つてゐ



らつしやい。そのうち一人きま  
すよ。きつと。さよなら、おや  
すみなさい。

クララ。さよなら。

月上手に入る。クララを止める。  
明りを消す。狼のすごい鳴き聲が  
聞える。上手から兎が走ってくる。

兎。怒にすぎり 助けて下さいいい。

クララ。おや助けてつて。(と云ひな  
がら窓をあけ) まア、兎さんおやな  
いの。

兎。助けて下さいいい。

クララ。どうしたのよ。  
兎。狼が追つかけてきます、狼

が、

クララ。(大聲で) 狼! (早口に) さ、  
急いで家へお入り。こゝから、  
この窓から(と兎を中に抱いて入れる。

ヒツタリ窓をしめる。家の中で。黙つて  
ゐるのよ、だまつて……  
上手から 狼がくる。

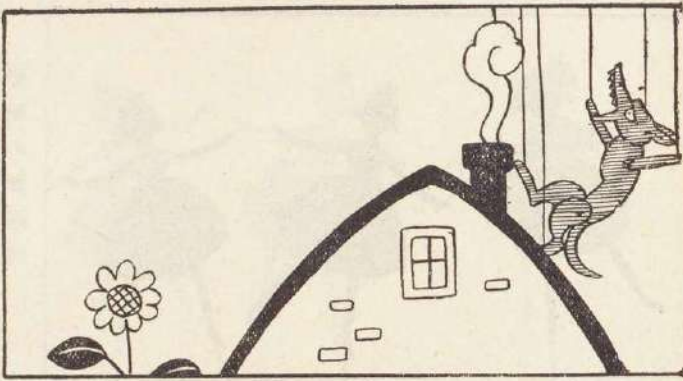
狼。小さいくせに足の早い奴だ。

ビヨン~~~~まるで地べ  
たに足がつかないやうに飛んで  
行つた。けれどもう逃すものか  
(そこらを見まはす) どこに行つたら  
う?

兎。(家の中で) こはい、こはい。

クララ。(家の中で) シツ、シツ、だま  
つてだまつて。

狼。(聞きつけて) や、は、あ、こゝ  
の家へ隠してもらつたな。しめ  
た。(わざと丁寧に) 今晚はく(返事  
がない、大聲で) お入すですか? だ  
アれもゐないのですか?(怒つて)



聞えてゐて返事をしないな。よ

オし(またわざと丁寧に) もしく

お家にある兎に用があるのです

一寸出して下さい。一寸……

(返事がない、怒つて、拳固で家を打つ)

お、痛いッ……

兎。(家の中で) 大丈夫ですか?

クララ。(家の中で) 大丈夫よ。狼なん

かちよつともこはかないわ。

狼。なんだと、狼なんかこはくな

いつて? この野郎。こゝのク

ララといふ生意氣な奴だな。お

れが前から食べてやらうと思つ

て覗つてゐるが、なか／＼油斷

をしない子供だな。よオし、今

夜は兎とクララと二人共たべて

しまふぞ。

兎。(家の中で) あんな事を云つてま  
すよ。

クララ。心配しなくともいゝよ。

狼。忌々しい奴だ。どうも頑固に

できてゐる家で、こはすことが

できない。どつかから入るとこ

ろが……しめた、屋根に登つて

あの煙突から中に入つてやれ。

兎。(家の中で) 屋根に登ると云ひま

すよ。

クララ。登れるものです、か、狼なん

ぞに。

狼。(クララの聲をまねして) 登れるも

のですか、狼なんぞに……(怒つ

て) いよく馬鹿にしやがつた。

さあ、どうするか見てゐる(家の  
後へ廻り、よちのぼる事を、手と首と

影繪の舞臺面



足を時々見物に見せるだけで示す  
鬼(家のなか)のおどくして) アレみし  
みしいつてゐますよ。登ります  
登りますよ。

クララ(家の中で)登つたつて平氣よ。  
私負けやしないから。

狼(屋根の上で半身を現はし)そーら見  
ろ、登つたらう。煙突はどこだ  
つたかしら。

鬼(家の中でフルへ扉)煙突に入りま  
すよ。

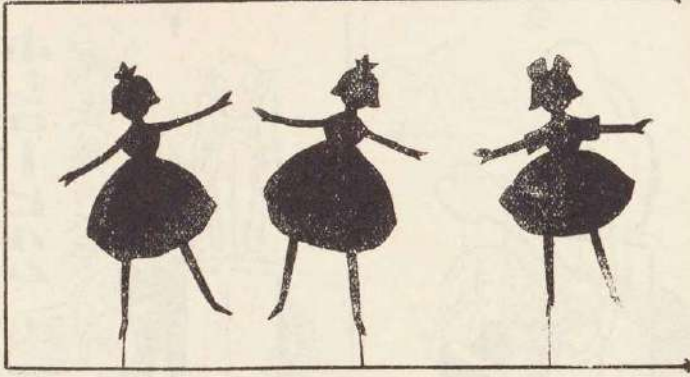
クララ(家の中でおちついて)シツ、シツ  
狼、おゝあそこだ。よしきた、あ  
の中へスーと下りてやらう。(煙  
突に手をかけて中を覗く、そのとたんに  
煙が出る、狼煙たいので閉口する、そ  
のうちに熱い火が出たと見えて、狼はヤ  
けどして悲鳴を上げて地べたに落ちる)

あゝ痛い、屋根から落つこつた。  
熱ッ、熱ッ、やけどした、やけど  
したんだ。ワア、ワア(泣きなが  
らピツコをひき、上手に入る)  
しつかにクララが家の外に出てくる。

クララ、あとを見送(り)行つてしまつ  
たわ。鬼出てくる)だから私が安心  
しておいでと云つたのよ。ねえ  
鬼さん。あなたね。いつまでも  
此のお家にゐないこと？ い  
や？

でも鬼は山の中に住むもので  
すもの。

クララ、あゝあのお月様が空にゐら  
つしやるやうに、私がこゝにあ  
るやうに、あなたは山にゐなけ  
れば……では又之から山に歸つ



てゆくのですか？ あの狼のゐ  
る山の中に。(鬼はクララにすがつて  
泣く)あゝ此の鬼さんが人間でそ  
して私の妹であつたなら……

とたんに美しい音楽が響いてくる。  
クララは鬼からはなれて木の下にゆ  
き後向きになつて泣く。下手から数  
人の星が出てきます。そして鬼を取  
りまいて鬼の面をぬがせ、着物をぬ  
がせます。するとおどろくではあり  
ませんが、鬼はかあいらしい女の子



星

にかへりました。

クララ(振返つてびつくり)まア、あな  
たは？

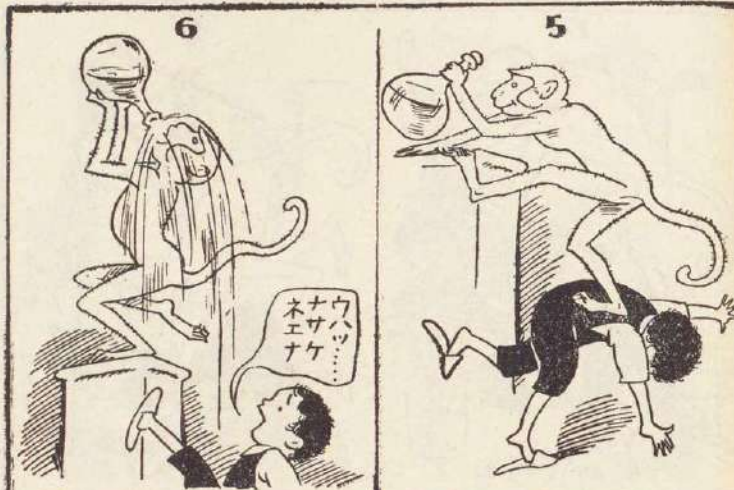
星一。今までの鬼さんですよ。

星二。クララさんの妹になつた  
のですよ。  
クララ(喜んで)あゝ。

音楽が始まる、クララと鬼と、数名  
の星は手を取りあつて踊る。

幕





6  
カア ニウツチゴ ナイワアイ (6)  
キタ ニキイトヒダダ ハチキ  
ニクトゴガムノ チヅミノ

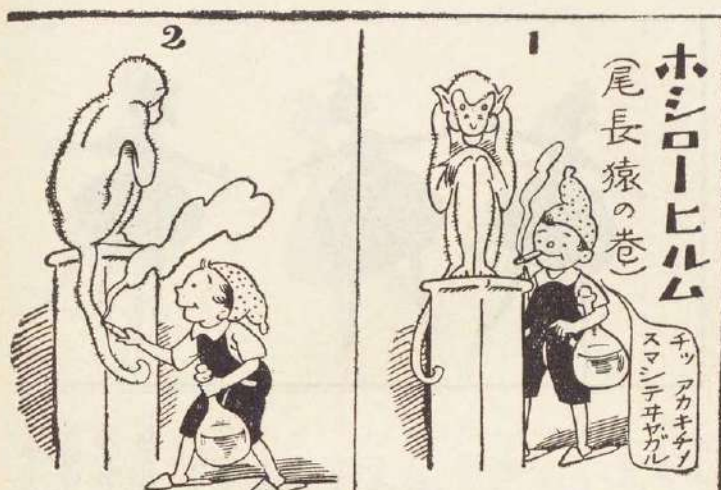
5  
バツイ ノエシードアイシイオ (5)  
マンマ チコスラフダツヒハイ  
ルダアキヒ テツバウト



8  
ラヒガチキカア ツバツイキキ (8)  
カイヤハガスワカチイタ トヨ  
チメコチラガチ トンウ



7  
ザガナオ ハーロシホイシヤク (7)  
チ ニリカバトマチキカアル  
イバツイラカ



ホシローヒルム  
(尾長猿の巻)

チツ  
アカキチノ  
スマ  
ニテヤガ  
ル

1  
ヒ カチキカア イカアノリシオ (1)  
ホ トルキテシ チコツボタナ  
ゲーロシホ ノイー

2  
タ トウロヤチシカドオツトヒ (2)  
ダ ナコバダキマ タキテヘラ  
テツトニ



4  
ヒ ハチキカアタツコオクカア (4)  
オ トゾキトノコムラウノロコ  
ザワヤハノルサ



3  
テウヤギリクツビ ハチキカア (3)  
ケチカノゴツシクヤヲ  
ン  
ルメトシ

14



ゾノチランチア ラカコスラフ (14)  
ヨシウホベシセ ーロシホク  
ヨケスンキマヌアゲハ

13



ルリルカ ケスニキ ーロシホ (13)  
ルカ モロシオイカア ルロマ  
ルリマルカ

10



ハチキカア タツカイニリカイ (10)  
テツカム ニケスンキハドシコ  
タキ

9



コ ガケスンキノリカガリホト (9)  
フ チキツテス ニマサリアノ  
ルスタダケス ゲアヲ

16



ハチキカアタツカニヒカヌタ (16)  
ツノメユノキツサ トウイウイ  
ルミチキブ

15



フルゲアキヒ トホヨシホヨシ (15)  
ロイカア ラカロシウ ノリタ  
タキテエコキ ガエゴイラ

12



ニンダウキツイダ ガケスンキ (12)  
アリシオチキカア バメコイウ  
ルケウトシツハ

11



ハウノツハケルシノケスンキ (11)  
チエサユガシオイカア ハデ  
ルンユ



## 甚兵衛の鼻

高田 哲

昔或村に、甚兵衛と云ふ爺さんが居りました。それはそれはひどい慾深でしたので、村の人々は慾兵衛・慾兵衛と呼びました。

近所の人々が、

「甚兵衛さんや、そんなに慾深では、死んでから浮かばれないよ。」と云ひますと、甚兵衛は、

「何、俺が慾深だからつて、お前達の税金が増す譯でもあるめえ。慾深は半へ入れると云ふ掟でもあるのか。大きに御世話だ。」と云つて、とりあひませんで

した。

或時甚兵衛は、こんな事を考へました。

「かうやつて、毎日十錢二十錢のお金を一つづつ貯めたつて、何時金持になるか解からない。一つこれに神様に願つて見よう。神様に、毎晩二錢のローンク一本づゝ上げるとしても、二十日でたつた四十錢。若しそれが十倍に酬いられると四圓だ。いや神様の事だから、十倍や百倍ではあるめえ。萬倍に酬いられると四千圓。つまりはその半分でも二千圓。

一寸悪くないな。これは神様に祈るにかぎる。」

その晩から甚兵衛は、神様にお祈りする事にしました。村で一番御利益があると云ふ三吉様の拜殿に

べつたり坐りこんで、

「神様、三吉様、今夜もお燈明を獻げます。どうか金持にして下さい。甚兵衛を死ぬ前に、たつた一度、金持にして下さい。これが甚兵衛一生の願です。神様、三吉様、三吉大明神様、お願ですく。」

と額の皮をすりむいて、一心にお祈りしました。

甚兵衛の熱心には、神様も動かされた事でせう。恰度満願の晩の事です。夢の中に神様のお告げがありました。それによると、これから四十里の森の中に、一つの古い祠がある。其中の寶を汝に授けようと云ふお告げでした。

夢から醒めた甚兵衛は、むつくり起き上がつて、大聲で云ひました。

「婆さんや、御利益があつた。漸く運がむいて來た

ぞ。」と雀躍りしながら、また夜の明けぬうちに、西の方めがけて出立しました。

もう十里位來たと思ふ頃、成程こんもり繁つた森がありました。うん此の森だな、と甚兵衛は探がし始めましたが、どうも見當りません。もう日も暮れて來ました。

「はて、これはおかしいぞ。ないわけがないはずだ。」と甚兵衛が頭をひねると、ふと木立の繁にちらつとそれらしい物が見當りました。

大急ぎで行つて見ると、やつぱり古い小さな祠でした。屋根には草が茫々と生え、柱や壁板は萎びて筋張つて、まるで年寄の手足の様です。

「やあこれに違ひない。随分草臥れた。神様がこんなに難儀させる所からすれば、きつとすばらしい寶が藏つてあるに違ひなからう。なんでも神様でえものは、大きな幸をお授けなさる前には、必ずうんと難儀させるものだ相だ。さて中の寶は何だらう。

もう俺のものだから、急ぐにや及ばぬ。」と、傍にあった木の切株にとつかり腰を下して、先づ煙草をぶか／＼やり出しました。

「ふうん、此の中に金貨や銀貨がざら／＼してあるんだな。そいつが皆な、此の俺様の懐の中に舞込めてえ話か。有難え／＼。悪くないこつた。」と甚兵衛は、慾深さうな顔を崩して、ニタ／＼笑ひました。

「どうれ。」と親爺は立上がつて、祠の戸に手をかけました。力をこめてガラツと開けて、ぬつと首を突込みました。そこに金銀がうづ高く積まれて、ピカピカする光に、親爺はクラ／＼眩暈がするだらうと思ひ設けましたが、案に違つて、祠の中はたゞ真暗。變な臭がむつと鼻を打つだけでした。螻のやうな甚兵衛の眼玉はギロリと光りました。

「なんだ。……あゝこりやあ、金貨でなく、紙幣かも知れない。その方が軽くて、却つて都合がいゝん

だ。」と、うなづきながら、甚兵衛はすうつとはひつて、手探りますと、何やら鼠の糞みたいな物が、指先に觸れるばかりです。蜘蛛の巣が、もちやもちやと氣味悪く顔にかゝります。

「はて、こりやアいけない。神様はよもや嘘はつくまい。金や紙幣よりもつといゝ物があるに違ひなからうが、さてかう暗くなつては仕様がな。夜が明けてか、探すしよう。」と甚兵衛は、着て来た褌の半分を敷いて、半分をかぶつて、祠の片隅に寝る事にしました。

真夜中頃。す。ガサ／＼と云ふ音で甚兵衛は、はつと眼を醒ました。何かの歩く音にちがひありません。はて何だらう、こんな真夜中に、こんな山の中に来るものは、熊か、狼か、それとも化物だらうかと思ふと、甚兵衛はわな／＼震へて来ました。

音はだん／＼近づいて来て、祠の前ではたり止まつたと思ふと、グワラ／＼と戸が開いて、ぬつと現



れたものは、一疋の毛むじやらの大天狗でした。その姿の恐ろしい事、甚兵衛は危くアツ！と叫ぶ所でした。天狗の顔には、馬の尾のやうな毛がバサ／＼亂れかゝつてゐます。その間からまるで真赤な、ほづきのやうな眼玉がギロリ／＼光つて、摺小木のやうな鼻がニューと突出てゐます。大きな遊園扇はばた／＼あふぎながら、

「やお酔ふた／＼。どりや一眠りしようか。」と齒の抜けたお婆さんのやうな口をもぐ／＼させて云つたかと思ふと、どたんといつくり返つて、ぐう／＼軒をかき始めました。

天狗の軒はまた格別です。小さな祠がクラ／＼揺れるかと思はれる程でした。甚兵衛はまるで猫みたいに襲にくるまつて、息を殺して縮上がつてゐました。何しろ大天狗が、小さい入口一ぱいに塞がつて居るものですから、逃げる事も出来ません。眼でも醒さうものなら、喰はれるばかりです。

「三吉様お救ひ下さい。お助け下さい。」と甚兵衛は、齒の根をがちとさせて、夜明けを待ちました。

そのうち夜がしらじらと明けて来ました。森の曉鳥がカアアと鳴くと、天狗はもくり起き上り「こりお寝過した。」と狼狽て、出て行きました。甚兵衛はほつと胸をなで下しました。

「神様からかつてはいけませんよ。こんなに難儀して、たゞ天狗に喰べられてはつまりません。さあどうか、實をお授け下さい。」と云ひながら、屋根裏から床の下、はては神棚のかけに到るまで、夢中で探がし廻りましたが、實の影も形もありません。こりや三吉様に一本擔がれたのかと思ふと、甚兵衛は惜しいやら、腹立たしいやら、悲しいやらで、がつかりして、どつかり腰をおろしますと、石ころのやうなものが、どさんと、お尻に突き當りました。

「あッ痛い。何だ、せつかく休まうとするに、いまいましい。たゞき付けてやれ。」と、むんづと其奴を

つかんで、ひよいと鼻先へ持つて来て見ると、それは一つの小さな鼓でした。

「何だ鼓だな。」

打つて見ると、ベン／＼と變な音を出します。はてをかしいぞ、と思ひながら尙もベンペンと打ち鳴らして居ますと、何だか鼻の先が急に虫でも爬つてゐるやうに、むづ／＼とすぐつたくなりました。ひよいと手をやつて見ると、驚きました。いつのまにやら、甚兵衛の鼻は、一尺ばかりニューツと延びて居るではありませんか。

「ひやアアどうしたもんだ。」と驚いてまた鼓をボンボン打つと、こんどは前と違つて、テ、ン、テンテテンと變な音をたて、鳴りました。するとまあどうでせう。こんどは不思議にも、甚兵衛の鼻はぐんぐん縮んで、たちまちベチャンコになつて、鼻の穴ばかり天上を向いて、ヌウ／＼やつてゐるではありませんか。こりやあ不思議だといつて鼓を調べて見

事でした。

翌日、子の甚藏と孫の甚太に「天狗から授かつた世にも珍らしい延鼻低鼻自在の術」と村中ふれ廻らせました。



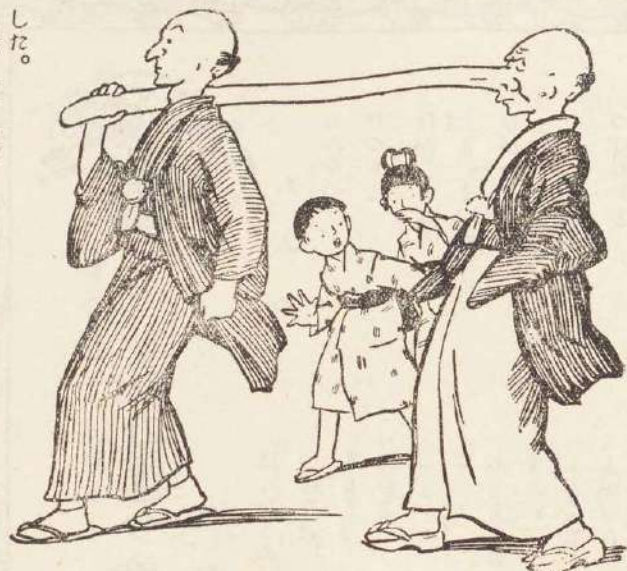
ると、鼓の表の皮の所に、「延鼻鼓」と書いてあります。裏の皮を見ると、「低鼻鼓」とかいてあります。「解つた、こりやあ、さつきの天狗が、忘れたものだらう。せつかく此處まで来て、空手で歸つては、婆アに濟まない。息子にもきまりが悪い。仕方が無い。これでも持つて歸らう。何しろ珍らしい物だ。金儲けの手藝にならぬともかぎらない。さつきの天狗がもどると命がない。」と、甚兵衛は大急ぎで森を駆け抜けました。

家へ歸つた甚兵衛は、うまい金儲けの方法はなからうかと、明け暮れ思索してゐますと、やつと妙案が生れました。それはこの鼓を種に、見世物をやる

本國中の金を皆なかき集めるには、譯もない。さすが三吉様の智慧は、偉いもんだ。」と雀躍して喜びました。

いよ／＼甚兵衛が舞臺に現れる事になりました。「え、皆さん、此の度私が森の中で、七日七晩苦行して……」などと、いかにももつともらしく嘘をとりませ、口上を述べますと、見物人の中から、「もし、嘘なら、貴様のその細首をもらふぞ。」となる者があります。甚兵衛はそれをうまく捕へて、「へえ／＼、もし嘘でありましたその時は、此の細首は無論の事、私の婆アめの鍬首も、さては子の甚藏、孫甚太の首まで、残りなくちよんざり下さつても神に誓つて恨み申しませぬ」と、ペラ／＼述べたので、見物人もすつかりつりこまれてしまひました。

いよ／＼鼻を延ばす事になりました。見物人は固唾をのんで、甚兵衛の鼻と不思議な鼓とを見つめま



した。  
鼻の先に煮湯がさぶりかゝつたからたまりませ

した。甚兵衛は先づもつたいぶつた手つきで鼓をとり上げ、エ、エーエーと掛聲を掛けて、ベペンペンと打ち始めました。するとどうでせう。甚兵衛の鼻はニョキ／＼と延び初めたではありませんか。見物人は總立ちになつて、やんやとはやし立てました。甚兵衛はもう有頂天です。ベペンペンと盛に打ち續けました。ニョキ／＼鼻は見物人の頭の上を通り越して、小屋の建壁を貫いて出ました。甚兵衛はもう天にでも上る程得意になつてしまつて、つひ鼻がどこまで延びたも忘れて、向も盛に打ち續けました。エーエーと掛聲と共にベペンペンと鳴りました。建壁を貫いた鼻は、ぐん／＼延びて隣りの家の窓障子を破つて、恰度隣の家のおさんどんが、お湯を沸かしてゐたその鼻先へ、赤い摺小木みたいな鼻がニユーと現れました。おさんどんは驚くまいことか、キヤツと云つて、煮立つてゐた鐵瓶を、鼻先目掛けて投げつけて、一散に外に飛び出ま

ん。おさんどんと一しよに舞臺では、甚兵衛がキヤツと云つて、尻餅をつきました。あわて、鼓の裏をバシヤ／＼と打ちつけました。が、あまり夢中で力まかせに打つたために、鼓はピリッつと破けて、それぎり用に立たなくなつてしまひました。どんな醫者も、甚兵衛の鼻を低くする事は出来ませんでした。切るには痛いし、曲げられないし、それに乾くとびり／＼痛むので、始終ぬらして居なければなりません。寝る時は天井につるすのです。路を歩く時は、孫の甚太を先に立たせて、擔がせなければなりません。さすがの甚兵衛も、すつかり弱つてしまひました。甚兵衛は、倉になつてゐるお金を見上げて、「やれ／＼、此のお金をすつかりやるから、誰か此の鼻をもと通りにしてくれまいものかなあ。」と吐息をつきました。(をばり)



(幼年詩)

# お宮の建つ音

(推薦)

海達公子

おみや

おみやの

たつおと

たんたんたん

大きいまつの木に

ひびいてる

つばなぬき

つばなかと

おもつたら

ちがふとつた

ほんたうの

つばなは

するする

ぬける

すみれ

あしもの

すみれ

ふまんて

よかつた

むぎ畠に

すずめ

ねこが

はいつたら

すずめが

とんでいつた

あさ

むぎ畠に

いへのかげが

なあがう

さしてゐる

まつぜみ

雨がやんで

まつぜみが

なき出した

## 雨

雨のふつて

ばらが下むいた

せりつみ

みんな

おいで

こつちに

うんとある

大きい

大きいせり

つつみ

あをい

おいけに

石なげた

じやぶんと

いつて

わになつた

ほぶら

ほぶら

ほぶら

さかさに

なつて

うんどうばを

はいておくれ

たけのこつり

おもさうに

雨の中を

竹の子

うつて

とほつた

ばら

ばらのつばみ

ふつくらふつくら

ゆふべ

ねたまに

べんつけた

ぐみ

ぐみの

ちやうらん

ひがついた

小人の

ちやうらん

べにちやうらん



## 鶴のフリカ

### 子房宅三

(このお話は、獨逸の「ハウフ」の作になったもので、原作は「カリフ・シュトルヒ」の語を採りました。或は「カリフ」本では、「カリフの鶴」といふ名で活動寫眞などで紹介され有名になつてゐます。)

アラビヤの沙漠を旅する商人の群がありました。商人たちは、夜露をしながら、この話をしました。或は「カリフ・シュトルヒ」といふ商人が、皆なに、次のやうな不思議な話をして聞きました。

—

バグダットの、回々教の一番偉い坊さんは、その國のカシツドと云ふ王様でありました。この王様は、大變氣むづかし屋でしたが、今日は餘程機嫌がいいと見えて、のんびりと安樂椅子に腰かけて、薔薇の木で作つた長い煙管で、煙草を吸つてゐました。そして、奴隷が注いで出すコーヒーを時々少しづつ、飲みながら、さもその味が気に入つたとばかりに、髭をしごきました。

この王様が、今日のやうに上機嫌であることはめつたにありませんから、こんな時に家來の者はお願のことや、話しかけたりするのをいつ

も狙つてゐるのでした。

宰相のマンゾルは、いつもこんな時を見計つては話しに來ます。今日もやつて來ました。が、いつもと打つて變つて、どうやら萎れてゐる様子です。

王様はパイプを口から離して、

「宰相、お前は どうしてそんな思案顔をしてゐるのだね。」と申しました。

すると宰相は、自分腕を胸の上に十字に組み合せて、敬々しくお叩頭をしてから、

「王様、私はそんなに思案顔をしてゐるやうに見えますか。自分ではちつとも氣がつきませんでした。兎に角このお城の下に、とても美事な珍しい品物を持つて來た商人が居ります。私はその美事な品物を見て、自分に思ふほどのお金がないのがじれつたのでございます。」と答へました。

王様は、何か宰相の喜ぶやうなことをしてやりたとい、常々考へてゐた所でしたから、早速奴隷をや

つてその商人を連れて來させました。商人と云ふのは小柄の肥つた男で、顔色はとす黒く、その上ポロポロの着物を着てゐましたから一層醜く見えました。

しかし、その姿の上等でないかはりに、持つて來た箱の中の品物は、眼も眩むばかりの上等な物ばかりでした。真珠や、指環や、美事に金で鏤めた盃や、美しい飾りのある櫛、そのほかいろいろの立派な品物ばかりを持つてゐました。

王様は、それらの品物を全部見てしまつてから、自分と宰相との爲めに二つの金の盃を買ひ、それから宰相の奥さんの爲めに、櫛を買つてやりました。

さて、商人は品物を片づけ、箱の蓋を閉めようと思つた。その時、王様は其の中の方に、一つの引出しのあるのを見つけた。そこで、

「商人、その小さな引出しの中にも何かあるのか。」と王様は訊ねました。

すると商人は、その小さな引出しを開けて、中か



ら黒い色の粉薬のはひつてゐる籠と、王様にも宰相にも讀むことの出来ない、不思議な文字の書いてある紙とを見せました。そして、

「私は暫く前、この二つの品物を、メツカの往來で拾つて來たと云ふ人から買ひ取つたのでございますが、さて、この品物がどれだけの値打ちのするものか、とんと分りませんが、若し御入用ならばお安くお譲りいたします。實の所、私がこの品物を持つてゐたからとて、どうすることも出来ないのでございます。」

カシツドと云ふ王様は大變物好きで、今迄にも珍らしい品物や、珍しい書き物は、例へ自分には分らなくとも、好んで集めてゐましたから、この商人の持つて來た不思議な粉薬と、不思議な文字の書いてある紙とを、早速買ひ取つてしまひました。

商人が歸つた後で、殿様はこの文字を讀むことの出来る人があるかと宰相に訊ねました。すると宰相

カシツドから渡された紙を手を持つて、ちつと見詰めてゐましたが、暫くすると、急に叫び聲を上げました。

「王様、これはラテン語でございます。若しさうでなかつたら、私を吊首になさつてもかまひません。」

「ラテン語か、してその意味は——申して見るがよい。」とカシツドは、膝を乗り出して云ひました。

「このラテン語は、かう云ふ意味でございます——これを見つけたものは、その幸せなことを神様に感謝しなければならぬ。この籠の中の粉薬を嗅いでから、「ムーターポール」と唱へる時は、思ふまゝの鳥や獸になることが出来る。そして鳥や獸の話を言葉も分るやうになる。もし、その人が再び人間の姿に戻らうと思ふなら、東を向いて三度禮拜し、前の言葉を云ふがよい。けれども鳥や獸に姿を變へてゐる間は、決して笑つてはならない。若し笑へば咒文の言葉を忘れてしまつて、いつまでも鳥や獸の姿で

は、  
「王様、それならあの大本山の近くに住んでゐる男が宜しうございます。あの男は學者のゼリムと世間から云はれてゐる位で、どんな言葉でも知つてゐることでございます。あの男をお呼びなさいませ。この不思議な文字も分ることでございます。」  
間もなく學者のゼリムは、カシツドの前に呼び出されました。

「ゼリム、世間ではお前のことを偉い學者だと評判してゐるさうだが、お前はこゝにある文字が讀めるかね。一寸覗いて見て呉れないか。お前に讀めたら俺の新しい禮服を一着褒美にやらう。然し、若し讀むことが出来なかつたら、世間に偽りの評判を立てさせた罰として、横面を二十度に、足裏を二十五度打つぞ。」と王様は申しました。

「承知いたしました。」  
ゼリムは、敬々しくお辭儀をしながらさう云つて

ゐるやうになる。」

かうゼリムが讀んだ時、王様のカシツドは大層満足しました。そしてゼリムには、褒美として立派な服をやり、決してこのことを人に話してはならぬと固く口止めして歸しました。

カシツドはもうほく／＼と大喜びです。

「マンゾル、わしは本當にいゝ買物をしたと云ふものだぞ。動物になる迄が楽しみでならぬわい。明日の朝早くわしの所へ來い。二人で一緒に野に出かけて、この粉薬の方で空の中や、水の中や、野や森で話してゐる動物達の話しを、立聞きしようではないか。」と、カシツドは申しました。

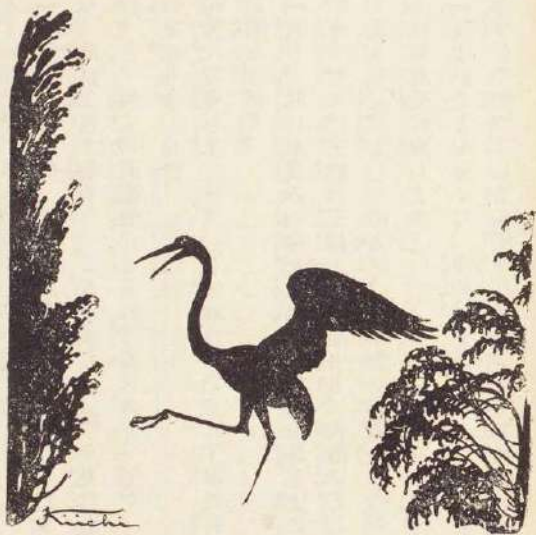
宰相のマンゾルも、これには大賛成でした。喜んでお供すると答へて、その日は明朝を楽しみながら、家に歸りました。

翌る日、王様のカシツドが朝飯を食べて、着物を着更へるか着換へぬうちに、宰相のマンゾルは、散歩のお供をしようとやつて参りました。そこで、カシツドもそこ〜に仕度をして、例の粉薬のはひつてゐる籠を、腰帯の間へはさんで、宰相とたつた二



人限りで出かけました。  
二人は始め宮殿の広い庭を通つて行きましたが、この魔法の薬が、ほんとに利目があるものか、どうかを早く試して見たいと思ひましたから、何か生き物を見つけて出して、そのやうに姿を變へて見たいと思ひました。二人は骨折つて探しました。けれどもその甲斐もなく、生き物を見付けることが出来ませんでした。  
「王様、どうもこの邊では駄目ですから、一つお池の方へ出掛けませう。今迄あのお池では、私は種々な動物を見ました。中でも白い綺麗な鶴を度々見ました。」

カシツドは早速、宰相の言葉に従つてお池の方へ出かけました。二人がお池の畔に着きますと、今しも一羽の鶴が、蛙でも探してゐるのか、時々獨りでガクガク嘴を鳴らし乍ら、眞面目な様子をしてあちこち歩いてゐました。そして、また外の一羽の



鶴が、遠い高い空の方から、こちらを目がけて飛んで来るのを見ました。

マンゾルは云ひました。

「王様、私は誓つて申します。この二羽の鶴達は

きつと、面白い話をするのでございませう。こゝで一番、私達が鶴になつてはどんなものでせう。」  
「うまいことを申したな」とカシツドは云つて、「然し、鳥になる前にどうして元の人間に還ることが出来るか、一つ習つて置かうではないか。若し忘れると大變だからな。さうさう、東に向つて三遍お辭儀をしてか、ムーターボールと云ふのちや、さうするとわしは王に、お前は宰相に戻れるんだつたな。だがマンゾル、どんなことがあつても笑つてはならぬぞ。笑つたら最後、我々はもう駄目ぢや。」  
カシツドがかう云つてゐる間に、はや遠い空に見えた鶴はお池の上に飛んで来て、ふうわり下りました。カシツドは手早く腰帯の間から例の籠を取り出して、一握みの粉薬を宰相にやり、二人はこの粉薬を嗅いでから、

「ムーターボール」と云ひました。

すると、忽ち二人の足はしばまつて、短く赤くな

りました。カシツドと宰相との美しい黄色の上靴は、  
いつの間にか不恰好な鳥の足と變り、腕は翼になり、  
首は肩からよる／＼と伸び出して、二尺あまりも  
長くなりました。髭も着物もいつの間にもやたら柔らか  
い白い毛と變つて、體全體を包みました。

「おや、宰相、お前は美しい嘴を持つてゐる  
な。俺は生れて初めて、こんな美しい嘴を見たわ  
い。と、暫くの間飽氣にとられてゐたカシツドが、  
口を切りました。

「謹んで申し上げます。」と宰相は、いやに丁寧に長  
い首を下げて、

「若し、私に本當の心持を申上げるのをお許し下さ  
いますなら、王様は王様としてよりも、大僧正とし  
てよりも、鶴としての方が、どうやらお似合ひのや  
うにお見受け申します。」

「ひどいことを云ふな、宰相。」と云つて、二人はも  
う少しで笑つてしまふ所でしたが、やつと我慢をい

たしました。

「さア、王様、私と一緒ににお出で下さいまし。本當  
に鶴達の話す言葉がわかるかどうか、一つ試して  
見ようではありませんか。」

二羽の鶴になつた王様のカシツドと宰相のマン  
ゾルとは、木蔭を忍びながら本物の鶴のゐる方に  
近づいて参りました。見ると、今しも空から飛んで  
來た若い鶴は、足で嘴を磨いたり、翼を二三度  
振つて見、きちんと形を直したりしてから、先刻  
からゐる鶴の方へ近づいて行きました。

二羽の偽の鶴も、その後からそつと隨いて行き  
ましたが、驚いたことには、本物の鶴達が、次の  
やうな話しをしてゐるのを聞いたのであります。

「お早う、長脚の奥さん。そんなに早く牧場へお出  
かけですか。」

「お早う、可愛い、カラカラ嘴さん。私はね、少  
しばかり朝飯を持つて來たのですが、お前さんは斬

場かぢの四ツ割りが好き。それとも蛙かまの小さな股またが  
好きかね。」

「御親切は有難うございますけれど、私は今朝はち  
つとも欲しかありません。私は食べ物のことより  
今朝は他の用で來たのですわ。今日ね、お父さまの  
ところへお客さまがお見えになるの。その前で私踊  
らなきアならないのよ。ですから私、こつそり少し  
習つて置きたいと思ひますの。」

かう云つて、若い鶴は妙な恰好をしてあちこち  
歩き出しました。偽の二羽の鶴は、これを見てど  
んなに珍らしく思つたことせう。そして、この若  
い鶴がまるで繪に描かれたやうに、一本足で立つ  
てさも嬉しうに羽叩きするのを見た時は、二人と  
もどうにも我慢が出来ないほど可笑しくなつて、思  
はず笑ひ聲を立て、しまひました。そしてお腹の皮  
もよちれるほど、笑つて笑つて笑ひ抜いて、やつと  
のことその笑ひが止まりました。あまりその聲が大き

かつたので、二羽の本物の鶴は、驚いて飛んで行  
つてしまひました。

「や、これは馬鹿を見たぞ。あんまり大笑ひをした  
爲めに、鶴達を追ひ飛ばしてしまつたわい。それ  
でなかつたら、あの鶴どもはきつと歌まで歌つた  
らうに。」と、カシツドは云ひました。

その時宰相は、笑ひを止められてゐたことに氣が  
付きましたから、急に泣きさうな聲になつて、

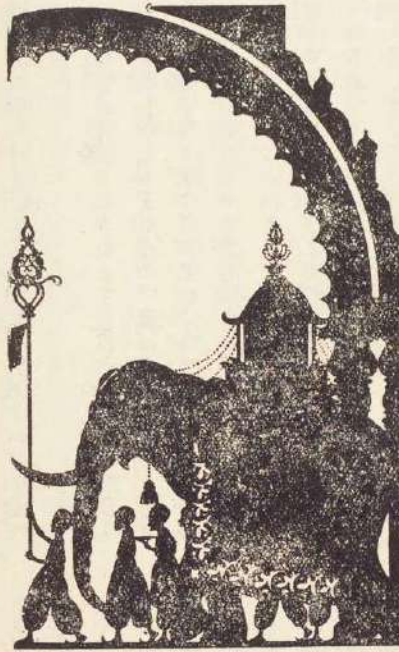
「王様、私達は笑つてはいけなかつたのですよ。」と  
云ひました。

「さうだつた。こりア大變なことになつてしまつた  
わい。わしが鶴になり切りなら、これこそ飛んで  
もない冗談事だつたぞ。宰相、お前はあの妙ちきり  
んな言葉を考へて見なさい。わしにはと思ひ出  
せん。」

「えい」と宰相は考へて、「私達は東に向つて三遍  
お辭儀をしなければなりません。それからムー、ム

「ムー。」

二人は東に向つてやたらにお辭儀ばかりしますので、その長い嘴は殆んど地に着くほどでした。然し悲しいことには、あのお呪ひの文句をすっかり忘れて了つて、どうしても思ひ出すことが出来ません。カシツドがいくらお辭儀をしても、マンヅルがいくら考へても「ムー、ムー、ムー」より思ひ出せま



六六  
せんで、可哀さうにこの二人の人間は、鶴の姿から人間の姿に還へることが出来ませんでした。  
三  
呪ひをかけられた二人は、悲しさに身の置き所もなく、野や森をさまよひました。二人はふとした冗談からこんな不幸な身になつたのを、どうしてよいやら全く途方に暮れて了ひました。二人はどうしても人間に成り變る事が出来ませんでしたから、また街の方へ飛で行つて、王と宰相が鶴になつてゐるのだと、人々に知らせようとしても、鳥の言葉を知らない人々には、それが分らう筈はありませんでした。考へて見ると、例へば人々がこの鶴がカシツドだと分つた所で、どうして一羽の鶴を大僧正様とか王様とか云つて敬ふことが出来ませう。



二人にとつてあのお呪ひの文句が思ひ出せない以上は、もう人間に還る望みはまつたくないと云ふものです。こんな譯で二人は、永い月日の間、慣れない鳥の暮しに大層な難澁をしながら、野から森へ、森から野へとさまよつてゐました。二人の食べ物と云ふのは、野や森で見つける果物位のもので、木の鶴のやうに蜥蜴や蛙は食べる氣になれませんでした。何故と云ふに、二人は若しこんな物を食べて

六七  
お腹でも悪くしたら大變だと、人間らしい考へ方をしてゐたからです。  
この情けない二人にとつても、空を飛べると云ふことは、只一つの楽しみでした。二人は街中に何か變つた事でもないかと、時々バグダットの街の屋根の上を飛びました。始めのうちは、街の往來では人々が大層悲しんでゐる様子を見ました。それは云はずと知れた自分達が急にゐなくなつたからのことです。然し、或日のこと、二人は宮殿の屋根の上に降りましたが、その下の往來に立派な行列が通るのを見ました。太鼓や角笛の音が明らかに響き渡つて、金の縫ひとりのしてゐる緋色のマントを着た一人の人が、これまたピカ／＼に着飾つた侍従達に取り巻かれて、飾り立てられた馬に跨つてゐました。バグダットの人民達はぞろ／＼とその後を續いてゆきました。そして口々に、

「バグダットの王ミヅラ萬歳！」と叫びました。

これを聞いて、宮殿の屋根の上におた二人は互に顔を見合せて、カシツドはほつと溜息をつきながら申しました。

「マンヅル、どうして我々が呪ひをかけられたか、お前に分つたか。あのミヅラと云ふのはわしの敵の大魔法師カシユールの子で、折さへあれば仕返しをしてやると云つてゐた奴だ。彼奴がたうとうわたし達をこんな姿にしてしまつたに違ひない。だが、わたしはまだ望みは捨てないぞ。わしがかこんな不幸になつても忠義な心のマンヅルよ、わしと一緒に來て呉れ。わし達はこれから尊い豫言者達の清い墓の方へ旅して、あそこでこの呪ひを解いて貰はう」

そこで二人の鶴は宮殿の屋根から飛び立つて、遙かにメジナの方へ向つて飛んでゆきました。けれども飛ぶことは本物の鶴のやうにうまくはゆきませんでした。と云ふのは、この二羽の鶴はまだ習

ひたてだつたからです。

「お、王様！」と云つて、宰相は二時間ばかり飛んでから、溜息をして云ひました。

「ほんとに申譯ありませんが、私はもうくたびれてこの先長く飛ぶことが出来ません。王様はあんまり早くお飛びになるものですから、私は骨が折れて仕方がありません。それにもう夕方ですから、今のうちに何處か宿るところを探さうではありませんか。」

カシツドは宰相の願ひを聞き入れました。そして下の谷の方に壊れかけたお城のあるのを見つけたから、これは今夜の隠れ場所にもつて來いの場所だと、すぐさまその方へ下りてゆきました。

二人が宿つたこの古いお城は、以前は立派なものらしく、もちろん人も住んでゐたでせうが、今はそんな様子もなく、荒れ果てたものでした。でもまだ立派な柱も立つてゐましたし、澤山のお部屋もさうひどくはならずに残つてゐました。しかし何處も此處

も雨漏りやら何やらで、じめ／＼と濕つてゐました

から、二人は何處か乾いた場所がないかと廊下を方方探し歩きました。

その時、マンヅルは急にびくつとして立ち止りました。そして聲を秘めて、

「幽霊を恐がるつてことは宰相たる者でも馬鹿氣なことぢやありませんね。まして一羽の鶴ぢや無理もありませんや。實は私は妙に薄氣味悪くなつて参りました。王様、あなた様にはお聞えになりませんか。この側の方で、呻いたり、溜息をしたりするやうな聲が。」

マンヅルはわざと滑稽らしく云ひましたけれどもどうやら本當に恐ろしいと見えて、幽かに身を慄はしてゐます。

カシツドも氣が付いて立止まつて耳を澄まして聞きますと、成程、宰相の云ふ通りでした。そして鳥や獸の聲と云ふよりは、どうやら人間らしい聲で聲

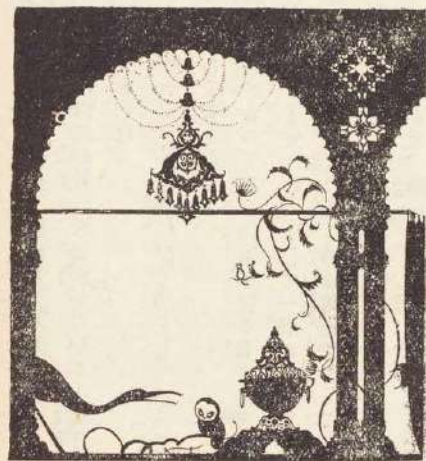
をひそめて泣いてゐるやうでもありました。

これは何か變つたことがあるに違ひないと思つたカシツドは、その聲のするらしい廊下の方へ進み入らうとしました。この時宰相は嘴でカシツドの翼を啣へて、氣味の悪い所へなぞ飛び込むのは危いと云つて止めました。しかし、まだ血の氣の多いカシツドは、鶴にこそ變つてゐましたが、その翼の下には勇ましい氣性がひそんでゐましたから、少しばかり羽の抜けるのもかまはずに、振り切つて暗い廊下の中へと進んで行きました。

間もなくカシツドはたゞ寄せかけてあるだけの戸の前に來ましたが、その戸の中からは例の呻るやうな泣くやうな聲をはつきりと聞くことが出來ましたそこで、カシツドは嘴に力を入れて、その戸をこち開けて、部屋の中へ這入りました。

一寸の間、カシツドは驚いて入口のところ立ち止まりました。この部屋には小さな格子窓が一つあ

る限りで、そこから僅かに月の光が差し込んでゐました。その月明りにすかして見ると、床の上に一羽の梟が坐つてゐました。  
 梟は眼から大粒の涙をぼろぼろとこぼして、皴枯れ聲で曲つた嘴を開いては泣聲を立てゝゐるのでした。



が私達の話しをお聞きになつたら、私達には、あなたをお助けする力がないことが、お分りになるでせう。」  
 と云つて、カシツドは溜息をもらしました。  
 そこで梟は、どうかその譯を話して下さいと云ひましたので、カシツドと宰相は代る／＼今迄のことを残らず話しました。  
 カシツドが身の上話しを終つた時に、梟は「よくお話し下さいました」といつて、「どうか私

その時宰相も後から忍び足でやつて來ましたが、梟はこの二羽の鶴の姿を見て急に嬉しさうな叫び聲を立てました。そして黄色斑の翼で、から流れ出る涙をそつと拭ひ、驚いたことには人間の言葉のアラビヤ語で話しました。  
 「貴方がた、鶴さん、貴方がたが來て下さつたのは私の助かる徴ですわ。と云ふのは、鶴が私に幸せを與へて下さると云ふことは、前から豫言されてゐたことなのですもの。」  
 梟から人間の言葉で話しかけられた時、カシツドは本當に驚いてしまひました。そしてやつと落付いて來てから、カシツドは長い首を下げて丁寧にお辭儀をし、その長い足をきちんと揃へて申しました。  
 「梟さん、あなたのお言葉によつて察しますと、あなたも私達と同じやうな不幸に落されてゐる御婦人らしく思はれます。しかし、あゝ、私達があなたをお助けするだらうと云ふお望みは駄目です。あなた

の身の上話しもお聞き下さい。そして私も、あなたに負けない程の不幸者であることを知つて下さいませ、私の父は印度の王でございます。私はそのたつた一人の娘で、名はルーザと申します。あなた方を呀にかけたといふ魔法使ひのカシヌールは、私も矢張り呪をかけて、このやうな姿にしてしまつたのでございます。あの男は或日私の父のところへ來まして、その息子のミヅラの嫁に私をくれと申しました。その時、父は腹を立て、あの男を階段から突き落しましたので、あの男はそれを大そう恨みに思つたのです。そして姿を變へて私の身近く忍んで來て、私へ花園で匂ひのいい花液を取らうと思つてゐました時に、奴隷の姿に化けて、飲物を私に持つて參りました。私は何の氣なしにそれを飲みますと、どうでせう、私、こんな情けない姿に變つてしまひました。私は驚きのあまり氣絶してゐるのを、あの男はそのまゝ此處へ連れて來ました。」(つゞく)



# 孫悟空と牛魔王

楠山正雄

一 (前號までの梗概は二一五頁にあります)

孫悟空と牛魔王はその後續いてもうそろそろ日暮れる時分まで減つてゐましたが、いつまでたつてもからだが疲れるばかりで、一向に勝負がつかせぬ、兩方とも少し退屈してどうこのをさまりをつけたいか、困りきつてゐますと、こちらは三藏法師や家來たちはいつでも悟空の歸りがないので心配でたまりません。そこで八戒を様子を見に出してやりました。八戒はそこかこゝかと行方をたづねながらやつて來ますと、向うに眞黒な雲がどびたどしく渦

を巻いた中に何重といふ人間の一度に開をつくつてゐるかと思ふやうに恐ろしい叫び聲が聞えてゐました。見ると一人は悟空で、もう一人大牛の化けたやうな話に聞いた牛魔王そのまゝの姿をした化物を相手に、雲を蹴ちらして喚き叫びながら眞黒になつて戦つてゐます。その時八戒はありつたけの大きな聲を出して、

「兄き見き、さあ八戒が加勢に來たぞ。」と叫びました。悟空は横目に八戒をちらりと見て、

「うん、お前來たのか。せつかく芭蕉扇を、こ

んどこそは間違ひなく手に入れたと思つたら、この悪化が八戒、貴の姿に化けてやつて來たものだから、ついだまされ取り返されてしまつたぞ。」

かういふ八戒は赤になつて、大きな嘴をとがらしながら、大熊手を振り、牛魔王に向つて飛びかかつて來ました。

「畜生々々。よくおれ様のお姿を盗んだな。」かういひながら突いてかゝります。さすがの牛魔王ももうまる一日大敵と戦つた上に、八戒が腹立ちまぎれにめちやくちやな勢でつつかゝつて來るのをあしらひかねて、だん／＼逃げ足になりました。すると悟空も八戒も得意になつて、

「さあもう一息だ、お、お。」といひながらどこまでもどこまでも追つかけて行きました。

二

牛魔王は雲を飛ばし風を起して一生懸命に逃げて行きます。悟空と八戒はどうしたつて逃がしてなる

ものかと、これも必死の勢で追ひかけます。山を越え峰を渡つて、もう谷一つ越えれば羅刹女のゐる翠雲山芭蕉洞と思ひ乍らも、後から追つて來る勢が急なので、洞の近くまで來ても入る事が出来ません。いよ／＼行くも歸るも出来なくなると牛魔王は忽ちぶる／＼と身ふるひを一つしました。と、忽ち一羽の雁になつて、大空を目掛けて舞ひ上がつて、見る／＼雲の中に見えなくなつてしまひました。

すると八戒は、今まで目の先に見えた牛魔王の姿がふいに吹き消したやうに消えてしまつたので、びっくりして悟空の顔を見ました。

「兄き、兄き。牛魔王が消えてしまつた。どうしたらう。どうしたらう。」といひながら、そこらをきまろ／＼探しまはりました。悟空は笑ひながら、

「おい八戒、あすこの雲の中に何だか飛んで行くな、あれや何だ。」といひました。

八戒は「どこだ／＼。」といひながらばかんと口を

あけて、悟空の指さすまゝに大空を仰いで見ますし、白い雲の中にぼつくり黒い點のやうに飛んでゐる鳥の姿が見えました。

「何だつまらない。あれや雁さ。」

かう八戒がいふと、悟空はおこつた聲で、

「阿呆、よく目をあいて見ろ。あれが牛魔王だぞ。」といひながら八戒の耳を強くひつぱりました。八戒は驚いて、

「やあ、さうか。大へん、大へん。見き、どうしよう。といひました。」

「まあ見てゐろ。」

かういふが早いか悟空は、ぶる／＼と一搖りからだを揺りますと、一羽の小さな鷹になりました。それと一緒に目にも止まらない早さで、一直線に空に向つて舞ひ上がつたと思ふと、見る／＼牛魔王の雁を追ひ越して、大空の雲の中に姿は見えなくなつてしまひました。と思ふと、間もなく大空のてつべんか

をうたうとしました。牛魔王は困つた顔もしないで、それを見るとすぐさまこんどは大獅子に化けて、一聲雷のやうにううと猛ると、小獅子の孫悟空をたゞ一つかみにする勢でうつつかかりました。すると孫悟空は何を思つたか、とう／＼一匹の大



きな象になりました。ところがその鼻といつては長い蛇がとぐろを巻いたやうですし牙はばかけてひよろ長い笄を並べたやうですし、さすがの牛魔王もそれを見て思はず／＼吹き出してしまひました。その拍子に、魔法が破れて本相を現してしまひまし

ら、今度は彈丸のやうに飛んで来て牛魔王の雁の頭の上に逆落しに飛んで来ました。牛魔王はびつくりして、さては悟空が化けたのだなと思ふ間もなく、自分は大きな鷹になつて悟空の小鷹をはらうとしました。悟空はす早くそれを見ると、そのうはてを越した立派な鳳凰の姿を變へて、大鷹をつかまへようとなりました。

鳳凰までになつては、鳥の王さまで、この上鳥としてどう變りやうもなくなつてしまつたので牛魔王も弱つて、そのまゝ下の谷間へ舞ひ下がると、つい一匹の羚羊に變生して、その谷川の岸に生えた青草を何氣なくたべてゐました。

悟空はこれにはちよつと面くらひましたが、てもなくそれと見込みをつげると、こんどは虎に化けていきなり羚羊に飛ひかゝつて行きました。牛魔王は大きに慌てて急に大きな豹に化けて虎を目がけて打つてかかりました。すると悟空も小獅子になつて豹

た。その本相といふのは繪にも書けず口にもいへないやうな恐しいものでした。まあ強ひて名をつければ大きな白牛で、頭は険しい峰を切つたてたやうで、目は稲光のやうに輝き、二本の角は九重の塔を二つ並べたやうでした。そして牙は併ぎすました劍を隠

「さあ惡猿め、これからどうする。」

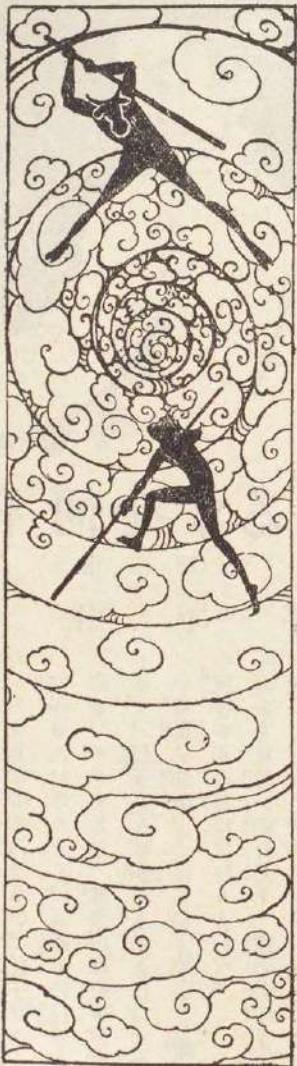
かういつて、もう手も足も出なからうといはない



ばかりに、からりと笑ひました。それを見て八戒は一縮みに縮み上がって、ほんたうに悟空見きは、どうするつもりだらうと、そつと様子を見ながら、小さくなつてふるへてゐました。

その時悟空は一聲「おゝ」と大空のてつべんから地獄の底まで突きぬけるかと思ふやうな大聲を出して叫んだと思ふと、これも負けずに本相を現しまた見るくからだが上にも下にも伸びて、背の高さが一萬丈、頭は泰山をそつくり持つて來てのせたかと思ふやうに大きく、兩方の目はお日さまとお月さまを並べたやうで眞赤な口は地獄の血の池をたくへたかと思ふやうでした。そして牙はといふと、大きな鐵門の扉を何十枚も隙間もなく並べたやうでした。この大化物が何千丈と知れない、飽くまで伸ばせば龍宮の底から天宮まで突き抜けるといふ大鐵棒を振りまはしながら打つてかゝつて行くのですから、なるほど山も崩れ海も湧き返る大騒ぎになつたのも不思議な事だと思つて羅刹女にたづねますと、

みんな、あゝせいしくした。」といひ、ひました。悟空はその時、とてもものに、この火焰山の火を二度と燃えないやうにして、この土地の潤ひにもなり、天竺へ行く往來の邪魔を長く除く工夫はないものかと思つて羅刹女にたづねますと、



「それにはつゞけて四十九度芭蕉扇で煽けば、もうそれで二度と火焰山に火が燃え出すことはありません。」と、をしへました。そこで悟空はよろこんで、さつそくつゞけざまに四十九度芭蕉扇で煽ぎますと、見るく雨がざんざ

思議はありません。

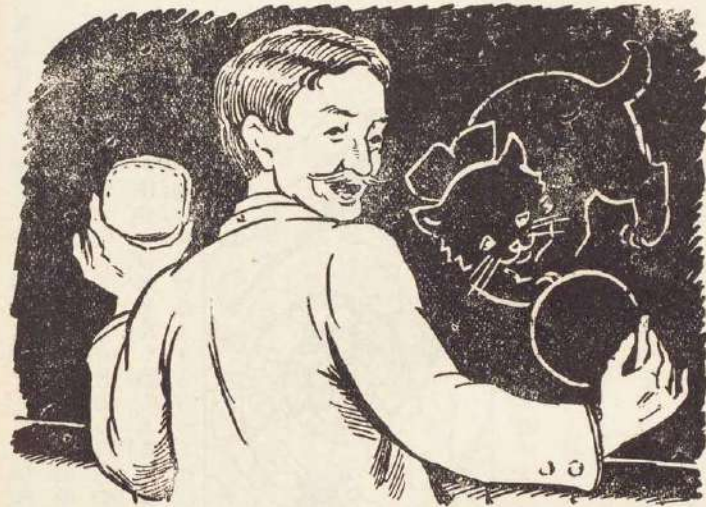
三

さてこのまゝにいつまでも孫悟空と牛魔王の決戦をつゞけさせておけば、そのために天地が覆り世界が闇になるやうな大亂にならなくてはをさまりがつくまいと思はれたものですから、戦ひ半ばに天宮から四大金剛や十二神將が大勢の天兵を率ゐて下つて來て、神火を吹きかけて牛魔王を焼き立てました。そしてひるむところを、照魔鏡にかけてもう二度と化けることが出来ないやうにした上、縛妖索といふ金の紐を鼻つらに通して天宮へ曳いて行きました。羅刹女は降参して芭蕉扇を渡しましたから、孫悟空はそれを持つて火焰山に近づいて、力一ぱい煽ぎました。一度煽ぐとばつくとさしもの猛火が消えました。二度煽ぐとすうと涼しい風が吹いて來ました。三度煽ぐとすうと小雨が降つて來て、暑さに閉ぢてゐたやうな人々の心持が急に開けて、

んざんん、降りだして來てさすがの火焰山も流れだすかと思ふ位の勢で一日一晚降りつゞけました。雨が止むと一緒に火焰山の火のものが全く消えて、もう二度と燃え出す氣遣ひはなくなりました。そして火焰山のまはり八百里の土地に住む百姓も、

その日から長く安心して、春も秋も耕作をすることが出来るやうになりました。

そのあくる日に三藏法師と、悟空、八戒、悟淨、三人の弟子たちは人民たちの歡びの聲に送られながらまた西天竺に向つて崖しもない旅に出て行きました。



## うせでるすを何夜は繪

(薦 准)

子 羊 井 坂

「まあ可愛い」  
 第一番にお清書を書き上げて、ふと黒板を見ながら、文子さんは思はず云ひました。先生が黒板に、可愛い、猫の繪をかいておらつしやるのです。  
 「一寸見ておらんさい。民子さん」  
 文子さんはさつそく、お隣の民子さんにさしやきました。書きかけの手をやすめて、民子さんは顔を上げました。小さい可愛い猫が、マリにじやれてゐる繪が、民子さんの目にはひりました。  
 「あら可愛い猫ねえー」猫の大好きな民子さんはもう夢中になつて了りました。もうお清書どころのさわぎでなくなつて了りました。  
 「可愛いわ。可愛いわ。なんて可愛い猫なんでせう……」民子さんは思はず大聲

をたてました。一生懸命にお清書をかいてゐた他の人達は、皆びつくりして民子さんの方を見ました。そして民子さんが指さしてゐる黒板の方を見ると、一齊に驚きの聲を立てました。

「あら……」

「まあ可愛い」

「可愛いわね」

「よく書けたわね」

「先生お上手ね」

「本當に可愛いわ」

皆なは口々に思ひ／＼の事を云ひました。

あんまりさわがしいので、先生は後をふりかへりました。

「静かにしなくつちやいけませんよ。そして早くお清書をおかきなさい」と先生はおつしやいました。「だつて見てゐたいんです」民子さんが云ひました。

「早く書き上げて了つてから見たいのでせう。その間に澤山かいといおげますから……」  
 先生は後ろをむいてまたかきかけました。皆はおとなしく下をむいて、又お清書を書きました。  
 文子さんは、もうすつかり書きをはつて了つたので先生の手つきを見ながら、だん／＼とかけて行く繪を楽しみに考へてゐました。

先生は犬が二疋でけんくわしてゐる處をかきました。そのとなりには、可愛い女の子をかきました。その子は、左手にチューリップの花たばをもつてゐました。

又その横には、近江八景をかきました。粟津の松原だの、石山寺だの、比良の高嶺だの、琵琶湖だの……。

と、文子さんは、去年の夏休みに、お父さまに連れられて見物に行つた事を思ひ出しました。石山寺で紫式部が、源氏物語をかいたお部屋にはひつて見

た事……三井寺の鐘と辨慶のお話をお父さまから伺った事……。そして……。そして……。文子さんはふと悲しくなつて来ました。あの橋の上から大車な……。お母さまのおかたみのハンケチを、うっかり湖の中に落して了つた事を思ひ出したのでした。

カラン／＼／＼とお遊びのかねがなりました。皆なお清書を出したり、筆を洗つたり、墨をすてたりして、すつかりかたづけて了ふと、一様に黒板を見ました。

『近江八景だわ』

誰かどさ／＼やきました。

『綺麗な景色ね』

『女の子が可愛いわ』

皆なは本當にたゞ／＼感心して見てゐたのでした。禮をすると、先生は黒板を消さうとしました。

『先生消さないで下さい！』皆はあわてゝたのみました。



『消しちゃいやです』

『さうやつといて下さい』

『書いたまゝにして下さい』

『だつてこんな繪なんか書いてあつちやじやまになつて、勉強する事が出来ないから、消して了はなかつちやいやしませんよ！』

先生は云ひました。けれども皆はきません。

『ちあ、今日は消さないでおきませう。けれどもあした始まる前に、きつと級長さん消して下さい。忘れちやいやしませんよ』

とう／＼先生はさう云ひました。

皆はやつと安心して、しばらく黒板の前に立つて見てゐた後、めい／＼家へかへつて了ひました。

世界中の人達がすつかり眠つて了つた時、繪は何をするでせう？ その晩の事でした。

皆が歸つて了つてから、小使さんがお掃除をして

窓をしめて、カーテンをかけて行つたので、電氣のついてないお教室の中は、まづ暗でした。チン／＼チン／＼とどこかで、十二時をうつ時計の音がかすかに聞えました。同時にカタ／＼と云ふ音が聞えて黒板の繪が動き始めました。

犬は二疋で喧嘩してゐるまゝ動き、女の子はチューリップの花をかきながらあるき出しました。景色は本當の近江八景になつて、お教室一パイにひろがりました。琵琶湖の上には、小波がたゞよひました。三井寺からゴンと鐘がなり始めました。白帆はすべり出しました。繪の女の子は、手を出して犬を呼びました。けれども、犬は喧嘩をやめませんでした。『まあお前達は本當に馬鹿ね。私達の命は三時間しかないつて云ふ事をわすれたの？ 馬鹿ね。その短い時間を、愉快に過ぎさうともしないで、喧嘩してゐるなんて』

云ひさせるとやうに女の子がさう云ふと、二疋の

犬はたちまち喧嘩をやめました。

猫はニヤア／＼と泣きながら、マリをはなれて、女の子の後に従ひました。

女の子はやさしく猫をだき上げました。

「さ、皆で近江八景を見物に行きませうよ」

女の子はさう云つて先に立ちました。犬も、猫も

マリも、その後からついて行きました。まあその時間、どんなに楽しい時間だったのでせう。

女の子は歌をうたひました。犬はうれしそうに、しつぽをふりながら駆けまはりました。猫はニヤア／＼泣きながら、女の子の胸にあたまをうづめました。

「あたし達は、もう見物をやめなければならぬわ。もうすぐ夜明よ。学校がはじまる時、あたし達は又繪のお國へ歸らなければならぬのよ。先生は私達を消してしまつておつしやつてたから」

女の子は淋しさに云ひました。犬も猫も、女の子



のそばへよつて來ました。

「ね、そして又いつ會へるか分らないでせう。あなたとお前たちに、お話ししてあげるわ!!」

そして女の子は話し出しました。

「あたしがこの前ゐた所は、それは／＼可愛らしいお嬢さんのお部屋だつたのよ。お嬢さんのお母さんは、もうすつと前になくなつて、お嬢さんはお母さんのおかたみだつて云つて、お部屋にあつた女の子の畫のかいてある額を、それは／＼大事にしてゐたのよ。そしてその額の畫に、私が這入つてゐたの。お嬢さんは毎日毎日、あたしの前に來て、いろいろな事を云つたわ。あたしはだん／＼お嬢さんが好きになつたの。お嬢さんは可哀さうな人だつたのよ。あたしはね、どうかしてそのお嬢さんをなぐさめてあげたいと思つて、いろ／＼考へたのよ。そしてね、或晩、お嬢さんが寝てから十二時になつた時、あたしは額からぬけ出して、お嬢さんの枕元へ行つて、

「お嬢さん／＼」つて呼んだの。お嬢さんは目をさまして「なあに？」つてきいたのよ。そして「あなたは誰あれ？」つて不思議さうな顔をしてゐたわ。それであたしは「お嬢さん、あたしは額の畫です。どうかしてお嬢さんを、幸福にして上げたいと思つて出て來ました」つて云つたの。お嬢さんはよろこんでゐたわ。あなたを繪のお國へお連れさせよう。繪のお國はそれは／＼楽しい所です。そこへ行けば、もうけつして悲しい事もなく、そして何んでも思ひ通りになるんです。あなたはお母さまにも會ふ事が出来ます」つて云つたのよ。お嬢さんはそりや行きがたつたのよ。だけど、繪の國には繪の中のものでなければいられないでせう。だからあたし、お嬢さんに肖像畫をかいでもらふやうに云つたの。そしてお嬢さんと約束したのよ。二三日たつたらお嬢さんは、一枚の繪をもつて來たの。それは、本當にお嬢さんによく似てかけたのよ。お嬢さんはそれを壁にかけた

わ。その晩からたつた三時間だけだつたけど、毎晩  
毎晩お嬢さんを繪のお國へ連れて行つたの。お嬢さ  
んはすむ分よろこんでゐたわ。だけど、不幸なお嬢  
さんは或晩の事大風がふいた日に、お嬢さんのお家  
のお風呂場から火が出て、お家は焼けて了つたのよ。  
そしてお嬢さんは、その時大怪我をして病院に入院  
してゐたけど、一週間ばかりたつたらなくなつて了つ  
たの。可哀さうなお嬢さんだつたわ。けれども今は  
キツト天國でお母さんと一緒に楽しい歌をうたつて  
ゐるでせう。その時私も、お嬢さんの繪も、やけて  
了つたの。だからあたしは繪に入つたお嬢さんのた  
ましひと一緒に、繪のお國に昨日までゐたのよ」  
女の子は話し終りました。

「さ、今度はお前の番よ。お前はいろんな事を知つ  
てゐさうね」と女の子が犬に云ひました。けれども  
恰度その時チン／＼と三時がなりましたので、  
女の子は犬のお話をきく事が出来ませんでした。そ

して繪はもとの通り、ちゃんど黒板に歸へつてゐま  
した。少し前まで動いてゐたとは思はれない本當の  
繪になつて了つてゐたのでした。

すつかり夜が明けて了ふと、生徒達はドヤ／＼學  
校へ出かけて來ました。そして昨日のまゝになつて  
る繪を見てよろこびました。  
やがて級長の文子さんが來ました。きのふ先生が  
おつしやつた通り、文子さんは繪を消さなければな  
りませんでした。そして文子さんは、黒板の所へ行  
きました。女の子の繪を消す時、何んか悲しさを  
感じました。文子さんを見つめてゐるやうな気がしました。  
そしてはつと、小さい溜息をついたやうに思は  
れました。すつかり消して了ふと、何んか可哀そ  
うな事をしたやうな気がしました。  
「繪の中の女の子は、皆が寝て了つてから、動き出  
すのかも知れない。繪だつて生きてゐるんだわ……」  
と文子さんは思ひました。(をばり)



# 傳 合歡の花

藤澤 衛彦

ある小沼の畔に、一本の合歡がありました。合歡の花は、今、  
真盛に咲いてゐました。半分は紅く、半分は白い、絲のやうなその  
花を、一人の少年は、一心に眺めてゐるのでした。  
少年は、先刻、里の方からやつて來て、この樹の蔭に荷物を下し  
たのでした。  
合歡の花は、ほんとうに美しい姿で、そよ風に揺ぐその風情は、

たとへやうもないほど人の美しい心をとらへるのでありましたが  
少年のやうにかうちつと眺めてゐると、何だか氣味悪くも思はれま  
す。それに、もう間もなく夕間もやつて來やうといふ時刻です。  
太陽は、最後の光を投げて、秩父の連山を薄紅く反射させました。  
間もなく、太陽は、向うの山間に沈むのでせう。  
しかし、少年は、さうしたことには一向興味もないやうで、たゞ、  
合歡の花ばかり眺めてゐるのでした。  
合歡の花に、何か特別の不思議でも発見したのでせうか、少年の  
眼は、合歡に向けられたまゝ、五分、十分、二十分と経ちました。  
このお話の頃にはまだ、時計といふものが發明されなかつたので、  
二十分、三十分と正確に時を計ることは出来ないのでしたが、少年  
は、たしかにその時の過ぎるのを知つてゐたやうでした。それは、  
少年が、  
「あゝ、もう直に日が沈む」  
と獨語したのでもわかります。  
「合歡の葉の眠る時刻も近づいた」  
と、少年は再びつぶやきました。  
合歡の花を眺めてゐるのだと思つた少年は、ほんたうは、合歡の  
葉を眺めてゐたのであります。  
いつの間にか、少年は、指を一本一本折りながら、ある短い時刻  
を算へてゐるのであります。  
二回羽根なした複葉の多くの小葉は、思ひなしか、段々に閉ぢて  
行くやうでした。

太陽は全く秋父の山間に落ちて、最後の光りの薄らいで行くと共に、小沼の時には夕暮がやって来て、合歡の小葉は不思議にも閉ぢられて行きました。

少年は、やがて、指を背開いて、

「ああ、お兵が来た。夜がやって来る。」

と勇まじげな聲で申しました。



と、農夫は、忽ち思ひあたつたその聲に怒りの聲を立てたのでした。

その農夫の聲に、少年はびくつきとしてふりかへりました時、農夫は、少年の眼のうちに、翳々と光る異様な影を見て、もう、疑ひもなくその少年が、確かにあの恐ろしい少年であるといふ意識を甦らしたのでありました。

その時、ふとこの合歡の柵蔭を通つた一人の農夫がありました。

農夫は、少年の聲に、思はず立止つてふるふる身ふるはしました。

農夫は、どうして身がふるふたのかわりませんが、どうも、その少年の聲を、聞き覚えがあるやうに思つたのでありました。

「おう、合歡は全く開んだ」と、その時少年が叫びました。

「ああ、あの聲だ！」

それで、小沼の方にやって来た時「おう、合歡は全く開んだ」といふ少年の叫びを耳にして、少年に對す。凄しい、驚しい思ひが湧き起りました。

「たうとう夜になつた、善い合歡の眠る時が来た」と同時に、少年の姿は消えて、まづと合歡がうらふるひました。

少年は、この小沼の時の合歡の善い精だつたのでありました。

二人の男がたまげてる時、向うの小山にぼつと立つた人影、それは、心なしか、やつぱり先刻の少年の影のやうに思はれました。

それは、小沼の時の合歡の悪い精だつたのでありました。

二人の男は、それでやつと合點して、各自の里と村へ駆けかへると、その話をしました。それで、善い精には氣の毒だけれど、小沼の合歡は斬り倒されることになつたのですが、どうして、善い精が里へ来て情をかけ、どうして悪い精が村へ行つて亂暴をしたのかは誰にも分りませんでした。

私も、むろん知りません。たゞ、今もある小沼のほとりに對つても、刈つても芽を出す合歡について、その地方の人達が、合歡をばや昔、怪しい行ひを出した合歡といふのは、何でも周囲三抱もある大木で、花の咲いた時は五里も先から見えたといふことですし、善い精は花になつても、白くなり、悪い精は紅くなるので、それで合歡の精は、紅と白とに映くのだといふことですが、ほんたにかうそだが、今では、それさへわがかりません。(をばり)

り急いで走つて来たのでした。

ところが、見ると、一人の農夫が鎌を振上げて、その少年を間打にしやうとしてゐるので、びくりして、商人は農夫に飛びついて行きました。そして、

「これどうしたんだ。この少年は人に怨まれるやうな方ではないが、さては物取りだな」と、商人が聲をかけた。

「いんやとめてくれるな。おれは此奴に怨みがあるんだ」と、農夫が言ひました。

「氣でも狂つたのか。藤十よ、わしだよ」と、商人がとめました。

「うん、さういふお前は種屋ぢやないか。何で此奴の味方をするんだ」と、農夫が尋ねました。

それで、種屋は、この少年が、里でも名高い孝行息子で、それに善行の数ある少年だといふことを話しました。

「いつかわしの子供が川にはまつた時、この方は、身をすて、助けて下さつたんだ。わしの子供の命の恩人だ」と、商人が答へました。

「そんな答はない。此奴は、或夜、わしの子供と一緒に夜道を來ると、突然此奴が現はれ出して、わしの子供を流へ投げ込みやあがつたんだ。すんでのこと危いところをやつと助かつたが、それから一月も病氣で困らせたのだ。そればかりぢやあない、此奴は夜々村方の田畑を荒し廻つて、農夫一統か、此奴の爲に難儀させられてるのだ」と、農夫が言ひました。

「いや、それは何かの誤りだ」「そんな筈はない」

二人が言ひ争つてゐるうちに、夜の闇がしんとこの小沼のあたりを閉んで來ました。何となく物凄氣が、あたりを漂ふやうに思はれて、二人は、争ひをやめてしまひました。その時、少年が言ひました。

「たうとう夜になつた、善い合歡の眠る時が来た」と同時に、少年の姿は消えて、まづと合歡がうらふるひました。

少年は、この小沼の時の合歡の善い精だつたのでありました。

二人の男がたまげてる時、向うの小山にぼつと立つた人影、それは、心なしか、やつぱり先刻の少年の影のやうに思はれました。

それは、小沼の時の合歡の悪い精だつたのでありました。

二人の男は、それでやつと合點して、各自の里と村へ駆けかへると、その話をしました。それで、善い精には氣の毒だけれど、小沼の合歡は斬り倒されることになつたのですが、どうして、善い精が里へ来て情をかけ、どうして悪い精が村へ行つて亂暴をしたのかは誰にも分りませんでした。

私も、むろん知りません。たゞ、今もある小沼のほとりに對つても、刈つても芽を出す合歡について、その地方の人達が、合歡をばや昔、怪しい行ひを出した合歡といふのは、何でも周囲三抱もある大木で、花の咲いた時は五里も先から見えたといふことですし、善い精は花になつても、白くなり、悪い精は紅くなるので、それで合歡の精は、紅と白とに映くのだといふことですが、ほんたにかうそだが、今では、それさへわがかりません。(をばり)

# ファトメを救ひに

藤森 淳三



ムスタフに云ひつけられて出掛けて行つた下僕は  
 ぢきに、四人の美々しく着飾つた奴隷といつしよに  
 戻つて來ました。奴隷どもはムスタフの馬の手綱を  
 とつて、城の廣庭へ導きました。それから廣い大理  
 石の階段を昇つて、主人のチウウリのところへ案内  
 しました。  
 年は取つても快活なチウウリは、快くムスタフ  
 を迎へ、自慢の料理番の腕限りの御馳走を出して彼  
 をもてなしました。  
 ムスタフはそろ／＼と話を新しい女の奴隷の方へ  
 と持つて行きました。

「え、それめ綺麗。ことは圖抜けて綺麗ですけれ  
 ど、どうも始終沈んでゐるんで閉口しますよ。然し  
 まあ、そのうちには落着いて、元氣も出て來ると思  
 つてをりますが。」

チウウリはそんなことを申しました。あまり一遍  
 に根掘り葉掘りたづねてはと思つたので、ムスタフ  
 もその晩はそれ位で切上げることになりました。非常  
 にもてなしもよかつたし、幸先よしとその晩は彼は  
 大元氣で寢床に入つたのです。

夜中に便所に起きたムスタフは、廊下を歩いてゐ  
 て、ふとある部屋のドアが三寸ばかり開いて、そこ  
 から光りが洩れてゐる前を通りかゝりますと、中か  
 らはひそ／＼と人の話聲が聞えます。

「はい、あの男は決して總督なぞではありません。  
 總督は盜賊のオルバーザンに捕まつたといふことで  
 す。彼奴は何か悪い奴に違ひありません。」  
 ムスタフはびつくりして、思はず立竦みました。

「さうです、面倒だから今夜寝てゐる間にやつつけ  
 てしまつた方がよございます。」

彼は今は猶豫してゐる場合でないと思ひました。  
 まご／＼しながら彼は窓に寄りそひました。

「この窓から飛出せるだらうか。」

月明りにすかして見ると、地面までは相當に距離  
 があります。他の側に目をやると、こつちは高い土  
 塀、それを乗越えなくては駄目です。思案に餘つて  
 ゐますと、早や大せいゝの者がどや／＼と彼の部屋の  
 方からやつて來るのが、手にとるやうに聞えます。

「これまでだ！」

いきなり彼は高い窓から身を躍らせました。でも  
 手足は少しも挫いたりはしません。それに元氣づい  
 て、彼は跳ね起ると、屋敷を廻つてゐる土塀のと  
 ころへ馳出しました。そして驚く追手を尻目につけ  
 て、その塀をよち上り、外へ出ました。ムスタフは  
 足に委せてどん／＼と逃げ出し、とある小さい森ま

で落ちのびました。

もう大丈夫と思ふと、急に疲れが出て、彼はその場へ打倒れました。倒れたままで、これから先きどうしたものかと考へてみました。然し、どう首をひねつても城へ残して来た馬と下僕とは救ひ出す方法が見つけません。彼はたうとうそれを思ひ切りました。でもお金だけは、帯にくるんでおいたためになくさないで済んだのは不幸中の幸でした。

賢い彼は、早速また妹を救ひ出す新しい方法を思ひつきました。ムスタフは森を抜けある町へ出て、馬を買ひました。それからお醫者の處へ行きました。彼はそのお醫者にどつさりお金をやつて、死んだやうに人を睡らせる魔睡薬と、見てゐるうちにその睡りから人を覺す解睡薬とを分けて貰ひました。薬が手に入ると、ムスタフは長い附髯や、黒い長衣や、そのほか手箱などを買つて、すつかり田舎醫者に化け、馬に乗つて再びチイウリの城へ出掛けた。

愛する妹に會へるのだと思ふと嬉しくて堪りません。ムスタフはチイウリと、立派な御殿へまゐりました。

「シヤカマンカブデバハ先生。」チイウリはムスタフに云ひました。「ほら、その壁のところ穴がありますね。その穴から女奴隷が順々に手を出しますから、さうしたらひとつ脈の具合がいいか、わるいか診て下さい。」

これにはムスタフも弱りました。どうかして顔を見たいと思ひますが、駄目です。

「ふだんの容子は私が銘々説明しますから、いいでせう。上手なお醫者なら、脈だけで容態がわからないつて法はありませんからね。」

チイウリ老人はさう云ひました。かうなつてはムスタフも、彼の云ふ通りにするより外ありません。チイウリは大きな聲で一人づつ奴隷の名前を呼びました。その度に、手が一本づつ壁の穴から差しの

のであります。

今度こそ大丈夫と彼は考へました。附髯をした恰好は、自分でさへも驚くほど彼の顔を変へてしまつたのです。

チイウリの處へまゐりますと、彼は、「私は醫者のシヤカマンカブデバハと申すものでございませう。」と云つて案内を乞ひました。彼の思惑は外れませんでした。この途方もなくむづかしい名前は、お人好しの老人をうまく騙しおはせました。

「どうぞこちらへ。」シヤカマンカブデバハ先生は奴隷につれられて、鷹揚にチイウリの前に出ました。一時間もたたぬうちに、チイウリは、

「いや、まつたくあなたは物識のお方です。どうでせう、先生ひとつ私の處の奴隷をみな診察して頂かうちやありませんか。」と言ひ出しました。「承知しました。では診察いたしませう。」

べられます。そしてその手をとつて、醫者のシヤカマンカブデバハが仔細らしく脈を見る風をしますので。間もなく六人の脈がしらべられ、みな「健康」と診断されたのでした。

「ファトメ！」

七人目にチイウリはまた大きな聲で呼びました。小さい白い手が壁の穴からそつと差しのべられました。嬉しさに身を慄はせながらムスタフはその手をつかみ、鹿爪らしい容子で、

「こりや大へんです。ひどい病氣です。重病です。」と告げました。

「何んですつて、重病？ そりや大へんだ。早くファトメに薬をやつて下さい。」

チイウリは心配さうにたのみました。お醫者のシヤカマンカブデバハ先生は部屋を出て、手早く一枚の紙切れに次、やうに書きました。

「ファトメ！ お前が二日の間死ぬる薬を飲むつも



りなら、私はお前を救けて上げる。私はちやんとお前を甦らせる薬を持つてゐる。お前がそのつもりなら、この水薬は利かないとだけおつしやい。それをお前が承知して合圖にするからね。」

ムスタフは間もなく老人の待つてゐる部屋に戻りました。彼は害のない水薬を持つて来て、今一度フアトメの處へ行つて、壁の穴から手早く紙切れと一しよに渡したのでした。

かうして萬事はもくろみ通り、うまく行きました。ムスタフは喜び勇んで魔睡劑を奴隸に渡し、またチイウリの處へ戻つて、

「私はこれから、まだ海邊に生えてゐる藥草を二種三種取つて来なくちやなりませんから、一寸出掛けて来ます。」と斷つて、大急ぎで門を脱け出しました。海岸は城からちきでした。彼は今までお醫者に化けるために着てゐた着物を脱いで、水の中へ投げ入れました。着物がふはりと水の上に浮ぶのを後にして、

彼は草の茂みのうちに身を隠し、夜になるのを待つて、チイウリの城の脇にあるお墓場に忍び込んだのです。

ムスタフが城を出て一時間ばかりたちますと、奴隸の一人が、

「旦那様！ フアトメが死にさうでございます。」とチイウリのところへ知らせました。

「急いで海岸へ行つて、あのお醫者を呼んで来い。急ぐんだぞ！」

彼は慌てて一人の奴隸を海岸に走らせました。けれども、やがて一人で戻つて来た使ひの者は、

「旦那様、どうもあのお醫者は海へ陥つて死んちまつたらしうございます。あの黒い長衣は水の中に浮んでゐましたし、またあの見事な髻は波の間に漂つてをりました。」と答へました。

「なに、醫者が海へ陥つて死んだつて！ ああ、どうしてもあのお奴隸は死ぬのか、ええ、どうともしろ。」

チイウリ

はとでも女を救けるわけに行かぬと氣づく  
と、おそろしい叫び聲をあげたり髪をかきむしつたり、揚句の果には、どたん／＼と頭を壁に打ちつけるのでした。彼はたくさんのお金を出して買ったのが、惜しくて堪らないのです。  
チイウリはいよ／＼女奴隸が



死んだといふことを聞くと、

『ちや急いで棺をこしらへろ。死んだ人間なんか城の内におけるわけのものぢやない。棺が出来たら、墓場へ死骸をさつさと運んぢまふんだぞ。』と自棄になつて命令しました。奴隷どもは主人の命令通りにしました。が、棺を擔いで行つた連中は、墓地の入口へ着くか着かぬうちに、棺を放り出して逃げ出したのでした。そこにおいてあつた別の棺の下から、ウーンといふ溜息がしたからなのです。

ムスタフは、棺桶の陰に身を潜めて、うまうまと棺を擔いで来た奴隷を脅して、追拂つてしまふと、のこくと棺の陰からあらはれ出でて、用意して来たランプに火をつけました。彼は解睡薬の瓶を取出して、それからフアトメの死骸の入つてある筈の棺の蓋を開けました。ランプの淡い光に照らされたその女の顔は、妹のフアトメと思ひきや、見も知らぬ女です！

ムスタフは思はず、あつと聲をあげた位びつくりしました。それでも彼は、瓶の口を開けて、たらたらと女の口に薬を流し込みました。

女は息を吹き返して、目を見開きました。いつた何處にあるんだらうといふ風で、しばらくは考へ込んでゐるやうでしたが、おしまひにすつかりの出来事を思ひ出し、彼女は棺から飛び出し、ムスタフの足許にひれ伏しました。

『わたしはどうお禮を申し上げてよいのでせう。』彼女は叫びました。『あなたさまは、ほんとに御親切に、私を恐ろしい處から救ひ出して下さつたのですね。』  
『まあ、そのお禮は後のことにし、下さい。』彼は女の言葉を遮つて申しました。『私は妹のフアトメを救ひ出すつもりだつたのに、いつたこれはどうしたつてことなんでせう』

彼女は驚いた容子で、しばらく彼の顔を見つめてゐましたが、

『あゝさうでございますか。どうも一向腑に落ちぬと思つてましたが、なるほどそれでわたしの救はれたわけがわかりました。わたしはあのお城の中だけで、特にフアトメつて呼ばれてゐたのでございませう。』

『ちや、私の妹のフアトメはどうしてゐるんでせうか。あすこにゐないんでせうかね。』

『いえ、おいでになりますよ。しかし、チイウリは誰にでも、あすこだけの名前を別につけるものですから、お妹さまもやはり、ミルツアつて呼ばれてゐるんでございませうよ。』

それから彼女は、ムスタフがひどくがっかりしてゐるのを見て、更に云ひました。

『まあ、あなたさま、そんなにがっかりなさるのはおよし遊ばせ。わたしが救けて頂いたお禮に、何んとかお妹さまをお救ひ申す御相談をいたさうぢやございませんか。』

『ちや、何かあなたにうまい考へでもおありなんですか。』彼は元氣づいてたづねました。

『え、そりやないことはありませんわ。わたしはチイウリの處へ奴隷になつてから、まだやつと五ヶ月位のものなんでございます。けれど、わたしは初めから逃げ出す工夫をしてゐたんでございますのよ。けれどたつた一人で逃げ出すのはむづかしいでございますわ。ところで、あなたも御覽になつたでせうが、あのお城の中庭に噴水がございませう。あれは十本の水管から噴き出してゐるんです。わたしの家にも、丁度あれと同じやうなのがあつて、水は一つの大きな水管から導かれてゐるんでございましたから、此處のも同じこしらへになつてゐるんぢやないかと氣づいたのでございます。それである日のこと、わたしは散々チイウリにあの噴水を賞め上げておいて、いつたこんな立派な噴水を誰方がおこしらへになつたんでせう？』と聞いてみました。わしがこ

しらへたんさー！チイウリは得意になつて答へるの  
でございませう。そして更に、その水管が人間の丈の  
高さ位もあることなぞと話し出すのです。これを聞  
いたわたしは、若し男のやうな力があるなら、あの  
噴水の傍の敷石を一枚はね上げて、勝手に何處へで  
も逃げて行かれるんだがと、幾度思つたか知れませ  
ん。ね、ムスタフ様、わたしが水管の在所を教へて  
上げませう。あの中を傳つて行けば、夜中にお城の  
中へ潜み込むことも出来れば、またお妹さまを救  
ひ出すことだつてわけないことでございます。もつ  
とも御殿には、奴隷がわづかばかり夜番をしてをり  
ますが、せめて別に男の方を二人位おつれになれば  
大丈夫と存じます。』彼女、かう話してくれました。  
『有難う。私はもうこれで二度もやり損つたが、今  
一度元氣を出して、あなたに教はつた通りやつてみ  
ることにします。どうか城の中へ潜み込む手引をし  
て下さい。さうすればまた、あなたが故郷にお歸り

の奴隷が六人床の上にごろ／＼と寝てゐました。か  
ら、一々そいつらを縛り上げ、フアトメの居間を白  
状させました。かうして、ムスタフの妹、フアトメ  
は、無事助け出すことが出来ました。オルバーザ  
ンはその時部下があたりの部屋にあつた寶物を奪は  
うとしたのを止めて云ひました。

『いけない、いけない。世間の人たちに、オルバー  
ザンが金を盗まうと思つて、夜中に他處の家へ忍び  
込んだなんて云はれるやうなことがあつてはならな  
い。』

それにしても、ムスタフ兄妹は、どんなにか喜ん  
だでせう。

『オルバーザン頭頭、本當に何んとお禮を申し上げた  
らよいのでせう。ムスタフ一人の力ではとても覺束  
ないのを、まつたくあなたがお加勢下さつたばつか  
りに、わたしのからだも救かつたのでございます。  
あなたはわたしの救ひ主、生命の親でございます。』

九六  
になる心配位は私の方でいたしませう。……ところ  
でと、二人が三人しつかりした人に手傳つて貰はな  
くらやならんが……』

首をひねつたムスタフは、すぐオルバーザンのく  
れた短刀のことを思ひ出しました。

『これだ、これだ。手傳ひの入る時は、飛んで行つ  
て救けてやらうと云つたつけ。さうだあの男に助け  
て貰はう。』

ムスタフは有金残らずはたいて馬を買ひ、使ひの  
者をやりました。オルバーザンは約束を違へませ  
んでした。ムスタフが五六日はかゝるだらうと思つて  
おましたのに、三日目の朝もうオルバーザンは屈強  
の部下三人をつれてやつて来てくれました。

その日の夜中頃でした。彼等は、ムスタフが救け  
た例の女の案内で、難なく水管の取付口から城へも  
ぐり込むことが出来ました。水管を通つて庭へ出、  
それから戸口へ近寄りました。ドアを開くと、黒人

水管の取付口に出たフアトメは、オルバーザンに  
とり縋つて泣きじやくりながらお禮を申述べるので  
した。然しオルバーザンは、

『そんなお禮はどうでもよろしい。ね、早くお逃げ  
なさい。チイウリの奴、きつと追手をかけて、あな  
たの後を探させるに違ひありませんからね。ちやお  
大事に。氣をつけて早くお父さんのところへお歸り  
なさいよ。左様なら。』と急立てました。深い思ひに  
胸がいつばいになつたムスタフと妹は、オルバー  
ザンのこの言葉を聞くと、ただもう咽がこまつて、

『さようなら！』

『さようなら！』とだけ云つて別れを告げたのであ  
ります。ほんとうに、彼等は義賊オルバーザンのこ  
とを生涯忘れることはないでせう。

ムスタフに救はれたかの女奴隷は、オルバーザン  
につれられて行つて、バルゾーラから故郷さして船  
に乗つたこととせう。(をばり)



# 十五少年漂流物語

(前編までの梗概は一五頁にあります)

霜田史光

## 一、遠征隊

一日毎に暖かになつて、もう家の外で夜を明してもさう寒くはないほどになりました。ある日、ゴルドンが云ひ出して、湖の東の方の探検に出かけることになりました。遠征隊はゴルドンが隊長で外にドノバン、カエツプ、バクスター、キルコクス、クロース、サーピスの七人でした。七人はいろいろ苦心をして川を渉り、森を抜けて砂漠を歩いて行きましたが、その間に面白かつたことをお話しすると、次のやうなものです。

始めの日、家族湖の岸に沿うて半里もゆくと、前へ進んで行つた犬のフアンが、急に吠え出したので、皆が近づいて見ると、穴があつて、かその中にあるやうです。鐵砲の意なドノバンは、すぐに鐵砲の口を穴の中に向けてました。

「ドノバン君待ちたまへ。火薬を使はないで、獸を追い出す工夫があるよ」とゴルドンが云つたので、その云ふ通りにして、皆で枯草を集めて火をつけ、その煙を穴の中へ追ひ込みました。二三分たつと、穴の中から兎が十何匹と云ふ程煙に面映つて跳出した。それッ、云ふので、サーピスマウエツプは、

鐵砲の薬尻や、斧で四五頭を殺しました。フアンも三頭程撃つて殺しました。かうして、意外な獲物があつたので、少年達は大喜びでした。その晩は初めて見た川のほとりに野營して、兎の肉を焼いて食べました。二日目の夕方、徒紅川の源に出ましたので、そこでまた野營することにりましたが、サーピスが晩食の仕度をしてある間に、ゴルドン、バクスターの二人は、近所を歩き廻つていろいろと調べて居ますと、森の中から静々と出て来た兎があり、バクスターは早くも見つけて、

「おや、山羊だよ。」

「ほんとに山羊に似てゐるよ。おい生捕りしようか。」

「よからう。」と云ふとすぐ、バクスターは手にしてゐた投げ弾を、ぐるんと飛ばしました。何しろ何十頭となく群れてゐる所へ投げ込んだのですから堪りません。その弾は一頭の足に絡みつきました。

山羊達は不意の出来事にすつかり驚いてしまつて、叫び聲をあげながら、ばらばらになつて、右や左の森の中へ駆け込んでしまひました。然し投げ弾の繩に絡みつかれて、逃げることが出来ないで、まご／＼してゐた一頭の山羊は、たうとう少年達に生捕られてしまひました。

捕へて見ると、それは山羊ではなくて、グイクンヤと云ふ動物で、捕へたものは母獸でした。然し可哀なものは二頭のグイクンヤの子が、母獸の傍から離れられないで、ぼんやりと立つてゐたことでした。

「そのグイクンヤに乳汁があるかい。」  
「あるよ。」  
「しめた。グイクンヤ萬歳。」

と少年達は喜び合ひました。

その夜一同、安らかに眠りましたが、夜明け近くなつた頃のこと、ドノバンは急に皆を起し廻りました。

「どうしたんだ、ドノバン君。」  
「あの聲を聞きたまへ。あの聲を。」  
なるほど、恐ろしい獸の聲がします。ゴルドンはちつとその聲を聞いて、

「ジャクワリ(あめりか虎)か、ターガルだらう。どちらにしても大して恐ろしい獸ぢやないが、しかし深山集つて来ると怖いね。焚火をして防ぐことにしよう。」と云つて、少年達は焚火を始めました。

そのうちに吠え叫ぶ聲は、だん／＼近づいて来ました。フアンは怒つてその聲の方へ飛び出さうとするのを、ゴルドンは一生懸命になつて引き止めてゐました。

すると、前の方十間ばかりの處に、青白い光が幾つも見え出しました。それは獸らの眼の光だつたのです。

「ずいぶん、ドノバンは我慢が出来ないで一發ぶつ放しました。すると獸らは急に怒つて、吠え叫ぶ聲は、前の三倍もひどくなりま

した。

七人の少年は、手に手に銃をとつて身構へました。そして、若し近寄つて来るなら、一度にぶつ放して呉れようとした。

その時バクスターは燃えてゐる一本の木片を獸の中へ投げ込みました。その光りで見ると、獸達は逃げまつてしまつたと見えて、ドノバンが打つた弾で殺された一頭が倒れてゐる外は、もう獸も見えませんでした。

「また来るだらうか。」

「なアに、もう来やしないよ。ただど油断することば出来ないね。」  
と云つて少年達は、それから誰も寝ずに焚火をしながら夜を明し、翌朝早く出發して歸り路についたのです。そしてお茶の木と土人達がよくそれから酒を作ると云ふ酒の本を見つけて歸りました。

## 二、兄の情

ゴルドン達が、遠征に出で行つて留守の間、洞の中ではアリアンが少年達の世話をしてゐました。いつもながらアリアンは、年下の少年達に親切を盡しますもので、少年達は

益々アリアンを尊敬するやうになりました。アリアンが獨り心配なのは弟のジャックの働き込んでゐることでした。或日アリアンはジャックを人のあない所へ呼んで、その理由を訊きました。しかし、

「別に理由なんかありません。」とジャックは答へるばかりでした。けれどもアリアンはどうしても解せないで、言葉やさしく、  
「ジャック、お前は屹度兄さんに隠してゐるに違ひない。僕はお前の兄さんぢやないか。僕にまで隠してゐないで話しておくれ。僕はお前が陰謀な顔をして沈んでゐるのを見て、心配でならないんだ。え、ジャック、何故そんなにお前は悲しんでゐるの。」  
「何故って……兄さん……あ、兄さんは僕の事を想つて下さいますね。だけど他の諸君は……」と云ひかけてジャックの聲は、啜り泣きに變つてしまひました。ご免なさい、兄さん、ご免なさい、兄さん」と云ふばかりでした。

アリアンの心配は前より深くなりました。ただ他の諸君は」と云つた言葉が氣掛りでならなかつたのです。ジャックは諸君に對

してどんな罪を犯したのか。アリアンは兄として弟のことをよく調べ、謝るものなら自分も諸君に謝らなければならぬ、と決心しました。

アリアンはゴールドンの歸るのを待つて、そしてジャックの事を話しました。

「然し君、強ひて云ひたくないことを云はせなくもいぢやないかね。ジャック君が僕達にすまないと云つてゐるのは、屹度いつもの悪戯からなんだらうよ。それを無理に責めて云はせたりすると、却つてジャック君が苦むやうになつて氣の毒だよ。それよりは自分から云ひ出すまで、放つて置く方がいいと思ふがね。」

流石、少年達の首長をつとめるゴールドンだけあつて、その心の廣いことば、まことに立派なものでした。そこでアリアンも、その意見に従ふことにしました。

そんなことが内輪にあつても、少年達は毎日、どん／＼と仕事をし出しました。湖の岸や森の中に、新たに陷阱を幾つも作つたり、先日遠征隊が生捕りにしてきた、グイクンヤやラマを入れる小舎を作つたりしました。

それからゴールドンは少年達にすゝめて、投げ弾を練習させました。一番早く上手になつたのは、バクスターとキルコクスでした。また鳥類を倒つて置く所も設けて、七面鳥や、野雁や、ほう／＼鳥や雉など、捕へる毎にその中に入れて倒つて置きましたので、年の下の少年達は大喜びでした。

料理番のモコーは、グイクンヤの乳がある上に、これらの卵がとれますのでこれも大悦びでした。しかし、卵をあまり使ふと砂糖が湖山入用なので、ゴールドンはモコーに砂糖を節約するやうに云ひました。で、それから日曜のほかは砂糖も餘り使へませんでした。しかし、或日のことでした。ゴールドンが五六人の少年達と陷阱の森を散歩してゐた時、一簇の砂糖の木を発見しましたことから、砂糖のなくなることも防がれました。

それでも野菜類の充分にないことは、少年達にとつてつらいものでした。

次に火薬もだん／＼と減つてきました。こればかりは、草や木を見つけて一寸作ると云ふわけにもゆきませんので、ゴールドンは火薬を節約するやうに申し渡しました。そこで、

### 三、盛んなクリスマス

十二月二十五日は本國にあれば、少年達にとつては一年中の楽しい時でした。お父さん達もお母さん達もゐないけれども、少年達はやはりこの島でクリスマスのお祝ひをすることに、洞の中はガネットとサーピスの備きで、綺麗に飾り立てられました。朝からお祝ひの爲めに打ち出す大砲の聲は、オイクランド岡を震はせました。少年達は互に手を握り合つてお祝ひの言葉をかけ合ひ、また年上のものは少年達に代つて、首長のゴールドンにお祝ひの言葉を述べたりしました。天氣がよかつたので、少年達は午前中湖岸の廣場に集つて、目隠しや、隠れんぼなどをして、楽しく遊びました。また大砲が鳴りました。それはお年の御飯の報知です。少年達は喜び喜んで湖の中へはひりました。中は英國々旗や、佛國々旗、または米國々旗などで飾り、大きな卓子には眞白な布がかけてあり、花瓶の中には小さいけれどもクリスマスツツの木もあつて、それには各國の旗が吊してありました。お料理は次の通り。

少年達には投げ弾の外に弓を作らせてそれを練習させ、弓矢で鳥などをとることを始めました。少年達はそんなことが、面白いので、ちきりに上手になつて、よく鳥を折ちとつて来るやうになりました。ところが困つたことが出来ました。と云ふのは毎晩狐がやつて来て、少年達が作つて置いた陷阱をこぼしたり、またそれで獲れた鳥などを持つて行つてしまひますので、少年達はいまい／＼して仕方がありませんでした。或日ドノバンは、どうしてもあの狐をやつつけてしまひたいからと云つて、火薬を出してくれとゴールドンに頼みました。ゴールドンも成程と思つて、發射して一包の火薬を出しましたので、ドノバン始め、アリアン、キルコクス、バクスター、ワエツア、クロース、サーピスなどはその晩から三晩もつづけて、陷阱の森や、湖の岸にかくれてゐて、まうとも知らずに出て来る狐を撃つて撃つて、撃ちまくつたので、三晩で五十幾頭かを殺しました。



それで、狐ももう出て来なくなり、その上狐の美しい皮五十幾枚かは、すぐ役に

味つけの、兎に似たアグーチ。  
 鹽漬の鳥肉、兎の炙りもの。  
 七面鳥の細工もの、總出の野菜も三種。  
 三角塔に盛ったアランチ。  
 他に葡萄酒やセリー酒、紅茶やコーヒー  
 これは皆モコーがサービースに手傳つて貰つ  
 く一週間はかり前から作つたものです。少年  
 達は久しぶりにこんな御馳走を食べるの、  
 嬉しくて堪らず、お料理が一品づゝ出る度に  
 手を打つて、その上手なや、味のいいこと  
 を讃めました。

アリアンは立つて、首長のゴールドンの今迄  
 の骨折りを感謝し、その健康を祈ると云ひま  
 した。次にゴールドンは立つて、この島で少年  
 達がよく働くを見て「だん／＼と榮えてゆく  
 ことを喜び、また本國の友達のことを思ふと  
 も云ひました。そして、かうして我々が力を合  
 せて暮してゐるうちには、屹度本國へ歸れる  
 やうな助け船が来るだらうとも云ひました。  
 ゴールドンが坐るとコスターが立ちました。  
 この年若の少年が何を云ひ出すのかと思つて  
 他少年達がその顔を見てゐると、  
 「僕達は年上の諸君のお世話に随分なりませ

が、其中でもアリアン君が機嫌の面倒よく  
 見て下さるの大いにお難く思つて居ります  
 僕、年下の少年達を代表して、アリアン君の  
 健康を祈ります。」と云つて、盃を上げました。  
 コスターの年に似合はぬ大出来は、皆の者  
 を驚かせ、そして悦ばせました。拍手喝采の  
 聲は、岩壁もふるはせる程起りました。  
 この時黙つて下ばかり見てゐたのはドンバ  
 ンです。ドンバンにとってはそれが餘りい  
 氣持ではなかつたのでせう。

四、三度目の東方探検

クリスマスが済んでから一週間目には、少  
 年達は千八百六十一年の新年を迎へました。  
 それは屹度東の真ん中でしたが、思へばこゝ  
 に流れてからもうだいぶ月日が経つてゐ  
 ました。  
 やがてまた寒い冬が来る！少年達はそれ  
 を思ふと心が暗くなるのでした。  
 或日アリアンは、ゴールドンに云ひました。  
 「君もさう思ふだらうけれど、僕達は一日も  
 早く本國へ歸る方法をやらなければならぬ  
 ね。いつまで助け船を待つてゐたところで、

それが本當に来るかどうか當てにならないん  
 だからね。」  
 「君の云ふ通りだ。もう一度東の方に探検隊  
 を出さうがつかないか、そしたら、若しかする  
 と、ホールドキンが発見なかつたやうな陸で  
 も見つかることがあるかも知れないね。」  
 「それがいいが、こゝで相談が出来て、今  
 度は湖の岸を廻つて行くのは遠いから、ポー  
 トで乗り切らうと云ふことになりました。そ  
 れには澤山の人は入らないからと云ふので舟  
 を採ることの上手なモコーと、弟のサツク  
 とを連れることになりました。

二月八日、朝の八時に、三人はポートに乗  
 つて出發しました。うまく風がありましたので、  
 帆を張つたポートはどん／＼走つてゆき  
 ました。しかし午後四時頃には風もなくなつ  
 て困りましたが、少年達の方でその夕方には  
 たうとう東の岸、丘の麓に着くことが出来ま  
 した。  
 そこでアリアン達は舟からあがつて、北へ  
 登りゆく、一筋の川に出合ひました。ポー  
 ルドキンの地圖にはこの川も書いてありまし  
 たが、少年達はこれに「東方川」と云ふ名を



つけました。  
 その夜はポートの近所に露宿をして、翌  
 日はその東方川にポートを乗り入れました。  
 その川は一番廣い所でも三十尺ばかりしか  
 いほどの狭いもので、流れも急でした。です  
 から、舟を岸に打ち當てないやうにしながら  
 下つてゆくには随分と骨が折れました。  
 川の兩岸は大抵松や柏の林で、また時々枝  
 の張り渡がつた木には、見慣れない果實がな  
 つてゐたりしました。それから、いろ／＼な  
 歌や、鹿鳥等が歩いてゐるのを幾度も見かけ  
 ました。  
 午近くになると、川は下り切つて目指す東  
 の海に出られました。其處はかなかな灣になつ  
 てゐて、澤山のゆめな形をした岩が見えます。  
 そして幾つかの洞穴さへ見えますので、美し  
 いスロー號がこの灣に流れ付いたのなら、あ  
 んなに苦心しなくともすんだものと思つた  
 位でした。  
 東を見れば、たゞこれ一面の水で、水平線  
 には雲より外に何物も見當りません。三人は  
 大岩の下に立つてそれを見ましたが、急  
 にモコーはアリアンの腕をひいて、

「おや、あれは何でせう。」と指さす方を見る  
 と、北東の水平線上に、ぼつちりと白い點が  
 見えました。  
 「雲だよ。」  
 とアリアンは初めは何の氣なしに云ひまし  
 たが、よくよく見るとどうも雲ではな  
 いらしい。動きもしなければ形が廻りもしない  
 のです。  
 「山でなければアんなに動かない筈もないが  
 山にしてはどうも變だね。」  
 と云つて、尙もよく見てゐましたが、この  
 時太陽は西の方へ傾いて、光りも薄くなりま  
 したので、その白い點も見えなくなつてしま  
 ひました。  
 そこで三人の間には、山らしいと云ふ者よ  
 何、太陽の光が海にばね返つたのだとも云ふ  
 者が出て、ぼつき、見當がつきませんでした。  
 三人は川口のポートの中へ歸つて、モコー  
 は夕飯の仕度を始めました。その間にアリア  
 ンと弟のサツクとは森の中へ入つてゆきま  
 したが、暫くすると、森の中から怒る聲と  
 泣く聲とが交つて聞えます。間違ひもなくそ  
 れは兄弟の聲です。

#### 四、ジャツクの大罪

モコーはどうしたことかと驚きながらその方へ行つて見ますと、前よりもつと吃驚しました。モコーの二間ばかり前に、ジャツクはアリアンの足下に身を投げ出して、咽び泣きに泣きながら、何か詫びてゐるではありませんか。

モコーは立竦んでしまひました。この時空は暗くなりましたが、まだ夕方の薄ら明りは二人の姿を照らしてゐます。モコーの近づいたことを二人は知らない様子なので、モコーは二人の内幕の話を聞いては悪いと思ひましたので、すぐ引き返さうとしましたが、もうそれは遅かつたのです。二人の言葉が聞えてしまひました。

「馬鹿奴！ いまかうして諸君が離れ小島に苦しんでゐるのも、もとはと云へば、お前が……お前が……」

アリアンの聲は荒々しく聞えました。

「兄さん、許して……許して……」とジャツクは、身を震はせて泣きながら、お詫びをなしてゐます。



のアリアン兄弟の機子に目をつけて、これは何か二人が話さない譯があるのだと思ひました。そして機を見て訊れて見ようと思ひまし

「お前がいつも諸君と都合するのを、どうやら怖れてゐるのも、その爲めだつたんだな。諸君は決してお前の罪を赦したくない。お前は どうしてその罪の埋め合せをするつもりだ。」とまたアリアンの聲がします。

モコーはそれだけ聞いてホトへ戻りましたが、ちきに兄弟も歸つて来ましたが、三人は三いろの思ひで胸一杯になりながら、空の星を眺め、ほつと嘆息をつきました。

やがてジャツクが用便に臨へあがつた時を見計らつてモコーはアリアンに、

「アリアンさん、私は思は中立開きをしてしまひました。さつきのお二人のお話を。」

「え？ あのおジャツクが僕に話したことを？」とアリアンは、驚いて叫び聲をあげました。

「はい、悪いことをいたしました。どうぞお許し下さいませ。」

「いや、許して下さいとはこちらから云ふ事だがね。……ねえ、モコー、他の諸君がジャツクの罪を赦して呉れるだらうか。」

「さ、それは何んとも私には申し上げられません。たゞの悪戯とは罪が違ひますからね。しかし、アリアンさん、それよりもこの事は

#### 六、環投げの喧嘩

少年達は毎日仕事と學問となしてゐましたが、その中絶時間は運動をすることになつてゐました。

四月二十五日の午後でした。少年達は二手に別れて、環投げの遊戯をしてゐました。

一方はドノパン、カエツプ、キルコクス、クロスの四人、一方はアリアン、バクスター、ガートネット、サービスの四人。

この環投げの遊戯は、地上に二條の鐵の針を立て、置いて、各々鐵の輪を二つつま持つてゐて、少し離れた所からそれを投げ、うまく輪が針に依れば二點、依らなくとも觸れば一點と云ふことにして組の勝負をきめるのです。

始めの一番は七點でアリアンの方が勝ち、次は六點でドノパンの方が勝つて、あとの一番は勝負の決まらぬ戦ひです。兩方の組の少年達は更なる一投をしまつて、今はアリアンとドノパンの手に一つづつの輪が残つてゐるばかりです。しかも兩方の組とも五點づつで

私達三人だけの事にして置かうではありませぬか。」

「お、有難うよ、モコー」

アリアンはさう云つてモコーの手を固く握りました。

やがてアリアン達は洞に歸りました。そして探検の仕末を残りに話しました。海の上に見えた白い點のことは、皆不思議に思つていろいろと想像する者もありました。

その翌る日から、少年達は冬ごりの用意の爲めに、皆一生懸命になつて働きました。

ところが、アリアンは探検から歸つてからは、前のやうに愉快に人と話をするのもなく、そればかりでなく、弟のジャツクと二人で友達を避けてゐる様子なので、皆不思議に思つてゐました。けれども、働く事にかけては前よりもつと働き、どんな骨折りの仕事でも危ないことでも自分でやつてのけてました。それと共にジャツクにもイキめて、いつも苦しい仕事や危い仕事をやらせてゐました。

ゴルドンは流石に考へ深いだけであつて、こ

したから、勝負は二人の腕前にかゝつて來ました。

ドノパンが先に投げる番でした。

「ドノパン君、しつかり頼むよ。」とカエツプは力をつけてました。

「なに、大丈夫だ。」と云つてドノパンは足を踏ん張り、狙ひを定めてやつと投げました。しかし、その環はもう一寸の所で針に依りかけ、たゞ觸つただけで落ちてしまひました。

今度はアリアンの番です。

「アリアン君、しつかりね、」とサービスが云ひました。

アリアンは合點だとはかりに狙ひを定めてやつと投げましたが、その環はうまくも鐵の針にすばりと依りつてしまひました。

「うまいッ。二點だ。合せて七點。萬歳ッ」と勝つたアリアン組は、喜びの聲をあげました。

「所がドノパンは、一寸待てくれ給へ、今の勝負は違つてゐる。」

「どうして違つてゐる。とバクスターは叫びました。

(次號をお待ち下さい)



# 盗賊を捕へて

## 叱られた話

久米 舷一

御維新になる一寸前、世の中が何となくざわつてゐた頃のお話です。茨城縣の片田舎に私の祖母は住んで居りましたが、その祖母の家の隣りには大きな百姓家があつて、お雪と云ふ十三になる娘がありました。

秋も終り近くなつた或晩の事、父親は商用で町へ出かけてしまひ、廣い母屋には、お雪と母親とたつた二人きりでした。留守居には下男が一八ゐたので

盗賊は這入つて来るなり、一人は刀を疊に突立つて見せ、一人は襖をブス／＼と突刺して見せました。お雪は、ひとりでに膝頭の處が、がた／＼と慄へました。

やがて背の高い方が母親の傍へ来て、ひくい聲で、「金を出せ？」と云ひました。

「お金はありません。」  
母親はきつぱりと答へました。

「ない筈は無い。隠すとひどいぞ。」  
背の高い男にかう云つて、刀を母親の鼻先へつきつけました。

「え、無いと云つたら無いのです。皆な今日町へ持つて行つたのです。」

母親は火鉢の引出しを開けて、何時も小鏡を入れて置く財布を出して、疊の上に置きました。これには一兩も這入つてゐなかつたのです。背の高い方は、一寸それを手に持つて見ましたが、直ぐ抛りだしま

すが、表の作男の所へ話しに行つたまゝ、其處へ泊り込んでしまつたのです。

夜中にフトお雪は誰れかに揺り起されたやうに思つて、眼を覺して見ますと、母親が薄闇から半分身體を乗り出してゐました。

「何？ お母さん。」  
母親は小さい聲で、

「今ね。盗賊が這入つたやうだから静かにしてゐらつしやい。ね、いゝですか。一言も物を云つちやいけませんよ。」と云ひました。

お雪は驚いて、聞耳をたてゝ居ますと、縁側との境の障子が静かに／＼開いて、顔をすつかり黒布で包んだ男が二人這入つて来ました。二人とも右手に拔身を提げて居ました。

お雪の母親は、随分落ついた人であつたと見え、起上つて帯を締め、長火鉢の前に坐つて、ゆつ／＼煙草を吸ひはじめました。

した。そして、もう一人の男とヒソ／＼囁き合つて、刀を手に持つたまゝ、箆笥の抽斗しを開けはじめました。

「いくらでも得心の行くまでお探さない。」

母親は、ゆるく煙草の煙りを吹いてゐます。

先程から胸をドキ／＼させて居たお雪は、母親の落つついた様子を見て、すつかり安心しました。そつと縁側の方を見ますと、兩戸が半分開いたまゝになつて、遠くの小屋の屋根が、月の光りに白く輝やいて居るのが見えました。

「あそこへ行けば藤爺やが居るんだ。」

と、お雪は考へました。藤爺やと云ふのは、作男の事です。

「さうだ。走つて行つて云ひ附けよう。」

盗賊は今、箆笥から帯やら着物やら引出して、目ぼしい物を集めてゐる處です。

お雪はソツと靴床を脱け出して、はだしのまゝ、



縁から飛下りようとし、其處にあつた心張棒に突かへつてしまひました。

ガタリ、大きな音がしました。

茶の間の盗賊はその物音に、ハットして眼を見合はしましたが、背の低い方が直ぐ縁側へ出て見ると、どうでせう。垣に添うて、女の児が一散に駆けて行きます。

「失敗つた。子供が逃げた。」

背の低い方はかう云つて縁から飛下りて追ひかけました。(あとで聞いた話ですが、母親は此時、身體中の肉が硬張つてしまつて、思はず佛様を念じたさうです。)

垣の所まで来てお雪が振り返つて見ますと、一人が追かけて来るので驚きました。とても小屋まで行く暇がありません。途中で捉へられるのは知れキツた事です。お雪は今更のやうに慌てだしました。

恰度其處に、百姓道具を入れて置く空蔵があつて、

戸が半分開いたまゝになつてゐました。お雪は夢中で其處へ走り込んで、右手に澤山積み重ねてあつた空俵をはねのけて潜り込みました。

「おい出ろッ。出ないとひどいぞ。」盗賊 入口に立つて嘸鳴りました。お雪はシツカリ空俵にしがみついて息を殺して居りました。

「出ろと云つたら出ないか！」盗賊は眞暗な中で其處等あたり掻き探して居りましたが、見當らないので、暫く考へて居る様子でしたが、やがてミシリ／＼と音をさせて、藏の二階へ上つて行きました。

「逃げるのは今だ！」お雪はかう思ひました。素早く跳ね起きて、夢中で十歩ばかり駆け出しましたが、フト振り返つて見ると、藏の戸が半分開いたまゝになつてゐるのが眼に入りました。

「あれを閉めたら？」と云ふ考が稻妻のやうにお雪の頭に閃きました。

お雪は大膽にも、元へ引返しました。そして、あ

りつたけの力を出して格子戸を引き、手早く釘を差してしまひました。さあ、もうしめたものです。

「藤爺や、早く来てー」お雪は金切聲を上げて、韋



駄天のやうに小屋へ走つて行きました。それから大騒ぎになつて、皆んなが起出して來ました。

「どうした。どうした。」盗賊が押込められたんだ。」

「何處に？ 一藏 中に」

母屋に残つた盗賊は騒ぎを聞きつけて逃げてしまひましたが、藏の中の賊はどうする事も出来ませんでした。集つて來た人々に向つて、

「早く出せ。出さないと藏に火を附けるぞ。」なんて脅してゐましたが、夜が明けて、役人が來る頃になると、到頭降参して、窓から刀を投出して、おとしく繩に就きました。

「お雪さんが強盗を捕へた。」と云ふ評判は忽ち村中に擴がつて、人々の眼を見張らせました。處が、父親がその翌日町から歸つて來て、この話を聞き、褒めると思ひの外、

「馬鹿者め。運よく逃げられたからいいやうなもの、普通なら殺される處だつた。これから決してこんな出しゃばつた事をしてはならぬ。」とひどく叱られたさうであります。(をばり)



王女にたつな人魚の話

(きょつ)

朗一川森

大勢の人がやつて来ました。  
「王女様は何處へいらしたのだから。」

「どうも二三日前から死んでしまひたいと云つて、泣いてゐらしたやうだから、ひよつとすると海へでも身を投げてしまつたかも知れぬ。」

「何しろ王様はじめお后様まで大層な御心配だ。何んとかしてお捜し申さなければならぬ。」

「さうだとも。」

こんな話をしながら、人々は人魚の娘の倒れてゐる所に近づいて來ました。

「おやッ、人が倒れてゐる。」と、一人の侍女らしいのが叫びました。

「む、王女様ではないか？」と誰か

が云ふと、どやどやと人魚の娘を取り巻いて抱き起しました。

「あッ、王女様だ。」

と云つて一人はすぐ様抱き上げましたが、

「おや、もういけない、冷たくなつてゐる。」

と云つてその手を離しましたので、人魚の娘はまた砂の上に倒れました。

「あ、お召物の濡れてゐる所から察すると、矢つ張り身投げをなさつたに違ひない。お可哀さうなことをした。ともう一人が云ひました。

人魚の娘は「しまつた。」と思ひました。そして姿は人間になつても、體が元のやうに冷めたいのを情なく思ひましたが、今はかうしてゐる場合ではないと思ひましたので、すつと立ち上りました。すると探しに來た人達は、一時に驚いて飛び退きました。「皆さん、私は死んではゐないのですよ。」と云ふ聲を聞いて、やつと安心したらしく、

「まあよかつた。」

「それで王さまも御安心なさるだらう。」

と口々に云つて、喜び勇んで王女を連れてお城にもどりました。

王様は王女が無事に歸つて來たと聞いて大層喜ばれ、王女になつてゐる人魚の娘をよんで、

「お前はどうして身投げなぞをしたのだ。それほど隣の國にお嫁にゆくのが厭なら、もう俺はたつて行けとは云はぬから、この後二度とあんなことはして呉れるな。お前に死なれては、俺はこの世に何の楽しみもなくなつてしまふ。」と王様は老いの眼に涙を浮べて申しました。人魚の娘は干女が身投げし、譯がやつと解りましたので、

「はい、もうこれからは決してお父さまに御心配はかけませぬ。」と申しました。

それで王様も大層喜ばれて、その後は楽しく暮すことが出來ました。

人魚の娘は人間——而も王女になつてどんなに嬉しかつたでせう。そして海の底で天國のやうに憧憬てゐた綺麗な着物や、美味しい食べ物、楽しい音楽、美しい景色を味はふことが出来て、その喜びは例へやうもありませんでした。

所がお后は王女にとつては後母さんでした。そしてお后の實の干女が一人おりましたので、人魚の娘には王女の役目が可成つらいものでした。後母さんは實の子の妹の王女ばかりを可愛がつて、人魚の娘の方は何につけてつらく當りますので、かうしたことを想像もしなかつた人魚の娘は、人間の暮しのむづかしいのに悲しくなりました。そして前の死んだ王女がしたやうに、時々御殿の大きな大理石の柱の蔭に来て、泣くやうな日が幾日もありました。そんな時は、海の底で何の苦勞もなく歌を歌つて楽しく泳ぎ廻つてゐたことが思ひ出されて、天國だと思つて来た人間の暮しが地獄で、今迄能々してゐた海の

底の暮しの方が、却つて天國のやうに思はれたりするものでした。

さうした心持の時は、どんなに楽しい音楽も刺のトゲのやうに感じられますし、どんな美味しい食物も砂を噛むやうに思はれるのでした。

人魚の娘は本當の人間ではなかつたのですから、お湯に入ることが出来ません。一日に一度水に入らなければどうも氣持が悪いので、王様にお願ひして泳ぎ場を造つて頂き、其處へ入つては水に浸り、泳ぎ廻りました。その時は、人魚の娘にとつて一日中一番楽しい時だつたのです。

かうした事は、後母さんや妹の王女に氣に入らう筈がありません。何の彼のと悪く云ひますので、王様も大層心配して、「娘や、お前はもう水に入らぬがよいぞ。」と申されました。

「はい。」と云ひましたけれども、人魚の娘はこの先

どうしたらよいかと案案暮れるのでした。それでも夜中にそつと起き出で、は水に入つて、やつと過して居りました。

人魚の娘が忘れてゐるうちにもう人間になつてか

ました。人魚の娘ははつとして身をすくめました。すると窓から後母さんの首がひよいと出て、「誰だい、今頃水の中でばらや〜してゐるのは。」と云ふ厳しい聲がしました。



ら一年目の日は間もく来るのでした。明日はその一年目の日に當ると云ふ前の晩、矢張りそつと起きて泳ぎ場の水に入つてゐますと、眼の前二階の窓の戸がゴトリと音がしてさつと左右に開きました。一時に室内の光が外に差して、人魚の娘の體を照し

人魚の娘は見つかつては一大事と胸の方に小さくなつてゐましたが、雪のやうに眞白な人魚の娘の體は、すぐに見つかつてしまひました。

「おや、お前は姫ではないか。まあ今頃水に入るなんて妙な娘だね。」

「云ふと、中から妹の王女がまた首を出して、

『お母さん姉さんには魔物がとりついてゐるのよ。』と悪口を云ひました。

『さうだよ、あの娘は魔物に違ひない。お、恐ろしい。』

と云つて、窓をびたりと閉めてしまひました。

人魚の娘は驚いてすぐに水から上り、着物を着て自分のお部屋に歸りましたけれども、後母さんと妹の王女に見られたことが、氣に掛つてどうしても寝

られませんでした。そしてふと考へ浮んだのは、明日は神様とお約束した一年目の日だつた事でした。

『さうだ、どうせ明日は海へ歸らなければならぬ日だから、夜が明けたらすぐにこのお城を抜け出さう。』

さう考へると、急にこの苦勞の多い人間の暮しが

厭になつて、楽しい海の底の暮しが頭に浮んで來ました。

「お父さん、お母さん、それから姉さん達は、どうしてゐられるだらう。私も早く歸つて、昔のやうに楽しく歌を歌ひながら、魚達とお友達になつて遊びたい。」

さう思つて人魚の娘は、夜が明けるのを待ち兼ねて、お城をそつと抜け出しました。

その日の夕方、人魚の娘は生れ故郷へ歸る楽しい心で、ざんぶと海の中に身を投げたのでした。

人魚の娘ははたして前の人魚になり返つて、海底の両親や姉さん達の所へ行く事が出來たでせうか？ いえ。

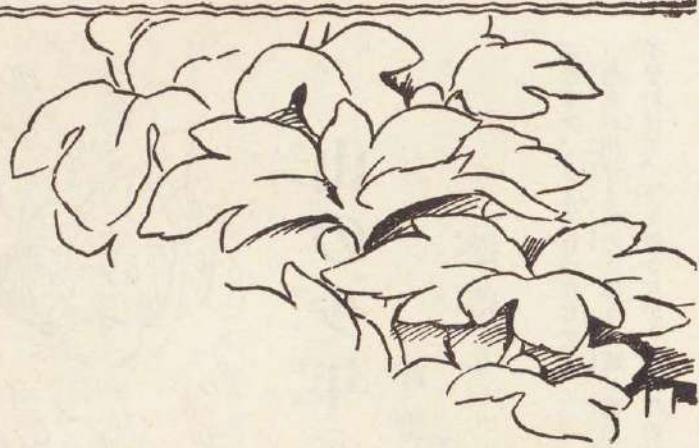
その又翌日、お城からは立派なお葬式が出來ました。それは王女の、いや人魚の娘の野邊送りだつたのです。(をばり)

概梗のでま號(前)篇(長)

十五少年漂流物語

テリス、フランス、ドイツ、アメリカなどの白人種に限られてゐて、しかも市中での地主や、銀行會社員や軍人の大きなお店の子ばかりでした。一千八百六十年一月十四日、待ちに待った二月の暑中休暇になりましたので、ドノバン、カロス、バグスマー、ウエツプ、カキルコクス、カーネット、サーゲキス、センキンス、イバウソン、ドール、ゴスター、ゴルドン、ドノバン、アリアン、ジャック達の十五人は、カーネットのお父さんの船のスローニに乗つて、ニューシランドを一周しようとして船に乗り込みましたが、嵐のために船が流されて、太平洋の中の無人島に着きました。仕方なく少年達は、こゝで助舟の來るまで待つことになつて、フランス人が住んでゐたところのある佛人洞をみつつけそこで暮すことになりました。それから大分経つて、サーゲキスが鷗島を掴まへましたので、馬の代りに使ふことになりました。少年達は佛人洞だけでは狭いので他の洞を方々探し廻りましたが、見當りませんでした。佛人洞を掘り抜いて見ることが出来ました。或日アリアンが洞の中で妙なうなり聲を聞きました。他の少年達も氣味を悪がり、仕事を停めて見ましたが、それはジャックカルと云ふ豺に似た獣で、犬のフンがかみ殺してしまひました。遂に少年達は洞を打抜いて、隣の洞とつゞけることが出來ました。仕事も一段落ついて、落つくことが出來ましたので、海、川、湖、岩壁、岡、森などにそれ／＼名を付け、この島をチエイマン島と呼ぶことになりました。そして首長を選ぶ時、アリアンがなりましたが、遂に、ゴルドンがなることになりました。そのうちに寒い冬が來ました。少年達は寂しいながらも、洞の中にあつて、出來る仕事をしながら、やつと冬を過しました。

孫悟空と牛魔王 悟空は三藏法師のお伴をして印度へ行く途中、火燭山の麓まで來ましたが、山中一面の細く通る道が出來ませんので、火を消す芭蕉扇を、羅刹女の所へ借りに行きました。ところが羅刹女の怒りにふれて芭蕉扇で大空高く吹き飛ばされてしまひましたが、しかし、漸くにして羅刹女を欺して芭蕉扇を手に入れることが出來ました。があひにくと、それがにせ物だつたのです。ですからそれで騙ぐと、火燭山の火は却つて大きくなりました。そこへ山の神が現れました。そして、大力王の所へ頼みに行けと教へてくれました。ところが大力王と云ふのは、牛魔王のことですから、悟空は仕方なく、牛魔王に逢ひに行くことになりました。牛魔王は悟空の顔を見ると、怒つて、二人は暫く戦ひましたが、間もなく牛魔王が友達から急によばれて行つたのを幸ひ、悟空は牛魔王に化けて、もう一度羅刹女の所へ行きました。さうして羅刹女はうまく欺して、本當の芭蕉扇を取上げて逃げ出しました。しかし、そのことを牛魔王が知つて、すぐ後を追ひかけて、八戒の姿に化けて、悟空から芭蕉扇を取かへしました。そこで悟空は、怒り剣を引抜いて、牛魔王に斬つてかゝりました。



あねむりあねむりこつくりさん

こつくりこつくりこつくり

あねむりあねむりこつくりさん

こつくりこつくりと落つこつた



あねむり

若山牧水

あねむりあねむりこつくりさん

お縁側えんがわに腰こしかけて

あねむりあねむりこつくりさん

お庭にわをぼんやり見てあたが



# 山の少年 (長篇)

沖野岩三郎

## 逆落し

「ひやア、うまく行つたなア。」  
信次が川岸まで迂り降りた時、樫の木の幹に右の手をかけて、下を覗きながら呼んだのは孫四郎でし



「面白かつたよ。眼が暈ふほど面白かつた。」

「よし！ 思ひ切つて迂るよ。なアに、おれも男ぢやー！」

孫四郎は手にもつてゐた棕櫚の葉を二枚重ねて、お尻の下に敷いて、馬に乗つたやうな調子で、「ひやア！」と一聲叫んだと思ふと、細い黒土の上を、する／＼と迂り出しました。

「寝をベツて、寝をベツて、頭を後へつけて……さうだ／＼、うまい／＼……」

信次は川原の大きな白い石の上から、頻りに手を拍きながら叫びました。

「ひやア、ひやア／＼……」

孫四郎は頓狂な聲を立てながら、急勾配な山腹を矢のやうに迂つて來ました。十間ばかり迂つた時、小豆粒程の小石が流れのやうに、ぞろ／＼と彼の後から轉がりました。二十間、三十間と迂つた時、孫

四郎は、棕櫚の莖をしっかと握つて、仰向けに寝をベツて「ひやア、ひやア／＼……」と呼びつゞけてゐましたが、やがて川原の砂の上に落つた時、巧みに起きあがつて、

「素敵滅法面白いなア！」と言つて、棕櫚の葉を、はら／＼と振りまはした。

「面白いぢやらう？ あの樫の木の所まで來た時、どしん／＼と二度ばかり、身體が跳ねあがつたらう。」

「うん、跳ねあがる。あそこで首から脊中へ小石がウンと入つたよ。」

孫四郎は妙な恰好に身體をゆすぶり乍ら、脊に入つてゐた小石を、ぞら／＼と足もとへ落しました。

「おうい、俺も迂るぞ！」

樫の木の所から呼んだのは善太でした。「えらい。善公も男ぢや！ 迂つて來い！」  
孫四郎は遙か上の方を見上げながら言ひました。

「身體を後へ寝かして、頭を土へ押つける位にするんぢやよ。」

信次は注意するやうに呼びました。けれども、も其時善太は棕櫚の葉を敷いて、這る用意をしてゐました。

「ほうーい、這るぞ……」

善太の聲が、かすかに聞えたと思ふと、可なり大きなボール位の小石が、彼より前にころ／＼と轉がつて來ました。それを見た信次は、身體を右の方に避けながら、

「もつと頭を後へ押しつけて……」と叫んだが、善太は何と思つたか、急に這るのを中止して踏止らうとするやうに、手に握つてゐた棕櫚の莖を離して、右手の方の藤葛に縋りつかうとしました。善太は勾配の急なのに恐つづいたのです。

「あ、あぶない！」と孫四郎が叫んだ時、もう善太の身體は、毯のやうにころ／＼と二三間下の方へ轉

んでゐました。

「大變ぢや！」と叫んだ信次は、岩を飛び降りて、川原の方へ走りました。孫四郎は大手を擴げて、頻りに大聲で叫びました。

最初毯のやうに轉げてゐた善太の身體は、モンドリ打つて、獸の駆けるやうに轉がつて來て、どしん！と川原の砂の上に投げつけられました。

「おうい、しつかりせい！」

孫四郎は善太を抱き起しながら、其の脊を平手で

二つ三つたゝきました。

「水々々……」と言つて、信次は兩手で水を掬つて來て善太に飲ませました。

眞青になつてゐた善太は、物と息を吐いて、不思議さうに二人の顔を眺めました。

「しつかりするんぢや。怪我も何もない。砂の上を轉んだだけぢや！」

孫四郎の聲に元氣づいた善太は、眼をばち／＼と

せ乍ら、

「ああ、俺はもう死んだと思つた。」と言つて、ふら／＼と立ち上りました。

「何を言ふんぢやい。たつた四十回や五十回轉かり落つたつて、死ぬるもんか。九郎判官義經は、一の谷の鶴越を逆落し、跳び降りたんぢやないか。おゝ、善公！し、かりしみイ。」

孫四郎、又た手平で善太の背を一つ打きました。

「臍玉が引つくり返つたんぢや。水を浴びたら癒る。さア、水を浴びよう。」

信次はいきなり裸體になつて、流れの方へ走つて行きました。

「さうぢや、泳いだ。元氣づく、さア泳がう。」

孫四郎は無理に善太の手を引張つて、水際までつれて來ました。

「さア、一の二の三つで、とび込まう。」

信次は善太の右の手を取りました。



「さうぢや、一の二の三つで…」と言ひながら孫四郎は善太の左の手を握りました。「うん。」と善太は自信の無いやうな返事をしました。

「さア、一緒に…」の二の三つ…」

信次と孫四郎の聲は高かつたが、善太は其の聲に調子を合せて、手を動かしたただけでした。けれどもさんぶと水煙の立つた時、三つの小さい身体は岩の上から、ひら／＼と深い淵の中に落ちました。そして一たんだ深く沈んだが、間もなく三つの頭は水面に浮び出て来て、三方へ分れました。

信次が西の岸に泳ぎついた時、もう孫四郎は東の岸の岩の上に這ひ上つて、掌で顔を拭つてゐました。けれども善太は、身體を藻掻きながら、ごぶり／＼と東の岸の方へ泳いでゐました。

「えらい、善公、泳ぎが上手になつたなア。さうぢや、もう一息泳げ。そしたら背が立つ。もう二間こ

ちらまで来い。」

孫四郎は善太が苦しさに泳いでゐるのを見ながら、頻りに元氣づけてゐました。

善太は最う苦しくつて苦し／＼と堪らなかつたのですが、もう二間泳げば足が砂に届くのだと思つても必死に泳いでゐました。そして、もう此所まで立つてもいゝだらうと思つて、泳ぎを止めて立つてみましたが、其所はまだ善太の背の二倍もあるさだつたので、見る／＼善太は、ぶる／＼と水面に小さいを残り置いて底深く沈んでしまひました。

「おうい、もう一間こつちまで来なきやア駄目ぢやよ。」

孫四郎が岩の上から叫んだ時、善太の身體は深い水底で横になつてゐました。

「信さん、善公が溺れた。来てくれ／＼…」

孫四郎は岩の上で踊るやうにして急を告げました砂の上に仰向けに寝轉んでゐた信次は、びつくりし



て撥ね起しましたが、二三間向ふに、樫の枯枝が一本、白い肌を見せ乍ら横はつてゐるのを見つけたので、いきなりそれを川の向ふまで投げました。

孫四郎は、さんぶと水に跳り込んで、其の枯枝を掴んで岸に泳ぎついた時、善太は両手を高くあげ乍ら水の上に浮き上つて來ました。それは彼が必死にしがいたからです。

善公、これへ掴まれ！」

孫四郎は狂氣のやうに叫び乍ら、樫の枝を善太の顔の所へ突きつけたので、善太は夢中でそれをつかみました。

「よし、しめたぞ！」

言ひながら孫四郎は、善太を岸の方へ引寄せました。そしてやつと脊の立ちさうな所まで來た時、孫四郎は樫の枝を投げ捨て、さんぶと水に跳り込みました。

信次も向ふ岸から泳ぎ渡つて來て、二人は一緒に



善太を川原へ引きあげました。そして水を吐かせたり、耳へ小石を當てがつて、水を出してやつたりしました。  
暫くするうちに、善太も少し元氣づいて来て、砂の上で起き上つて、ちつと自分の腕を見つめてみました。



二  
「おうーい、其所に居ては危いぞ。早くこつちへ来た。」  
川上の樁の根元から呼んだのは、與兵衛爺さんでした。

「どうしたんだい？」  
信次は驚いたやうに訊きました。  
「猪が来る。今に其所へ猪が来るから、早く此所へ来い……」

與兵衛爺さんは、頻りに招いてゐます。猪と聞いた三人は、手々に着物を抱へたまゝ、一目散に樁の樹の方へ走りました。そしてぶる／＼慄へながら着物を着てゐると、山の上の方で、ワン、ワン、と二聲犬の鳴聲が聞えました。

「静にして、其所へ疎んでるんぢやよ。動いちやいけなぞ！」  
與兵衛爺さんは叱るやうに言つて、火繩に火をつ

から石が三つ四つ轉がつて来ました。

「来たぞ！」と與兵衛爺さんは咬き乍ら、鐵砲の臺尻を右の頬に引きあてました。三人は息を殺して、川原の方を見てゐました。

更に四つ五つの石ころが轉がつて来たと思ふと、大きな獸の姿がちらりと見えました。其の後には真白い犬が、殆んど一體のやうになつて續いてゐました。

ワン！と犬が一聲吠えた時、猪はくるりと振り返つて、犬の方に突進して行きました。犬は敏捷く身をかはして、猪をやり過したと思ふと、後から跳りかゝりました。

犬が跳りかゝると、猪はくるりと振向いて、犬の方へ突きかゝつて来ます。さうして二三回挑み合つてゐるうちに、狙ひを定めた與兵衛爺さんの鐵砲は火蓋を切つて、どうん！と鳴りました。山と山との間に強い響を與へたので、山彦は谷から峯へ、



けて、静に鐵砲を構へました。  
ワン、ワン、と又た二聲犬の聲が聞えました。と同時に、今しがた三人が棕櫚の葉を敷いてゐた所

峯から丘へと同じ響きを傳へました。

「しめた！」と與兵衛爺さんが叫んだ時、犬と猪とは一つになつて砂の上に轉びました。

「うまく行つたなア！」と言ひ乍ら、川向ふから出て来たのは、新之丞といふ獵夫でありました。彼は與兵衛爺さんが失敗したなら、其所から射とめるつもりで、川向ふに待伏せをしてゐたのでした。

「猪を射止めた、行つて見ろ、行つて見ろ！」

信次は先づ走りました。孫四郎も善太も續いて走りました。與兵衛爺さんは、嬉しうな顔をしながら、鐵砲を肩げて、ひよこ／＼と川原へ降りて來ました。そして、ひゆ、ひゆと口笛を吹いて、犬の頭を撫でました。犬はさも自分の手柄を誇るやうに、尾を掉りながら與兵衛爺さんに縋りつくやうにしました。

「何東かい？」

川向ふから新之丞は問うた。

「六東ちやよ。大六東ちや。」

與兵衛爺さんは、嬉しうに言ひました。

「さうかい、私は五東位ちやと思つた。」

新之丞がさう言つた時、孫四郎は與兵衛爺さんの方を見ながら、

「仁田の四郎が捕つたのは何東だつたのです？」と訊きました。

「富士の巻狩に……仁田の四郎が捕つたのは十六東の大猪ぢや。これの二倍半あつたといふ話ぢや。」

與兵衛爺さんは、さう言ひ乍ら、腰の山庖丁をきらりと引抜いて、猪の舌を斬つて、それを犬に與りました。犬は大きな褒美でも貰つたやうに、それを銜へて石の上に駆け上りました。

### 三

流れの上手の方の淺瀬を、ちやぶ／＼と涉つて來た新之丞は、樫の幹にまさつてゐた葛蔓を斬つて、それで猪の四足を一緒に縛りました。其の間に與

兵衛爺さんは、樫の枝で一間ばかりの天秤棒を作つて、新之丞と二人で差擔ひにしながら、信次の方を振向いて、

「おい、其の鐵砲を持つて行け！」と言つたので、

信次と孫四郎は、嬉しうに二人の鐵砲を一挺づゝ肩げて、猪のあとに續きました。そして一町ばかり來た時、信次は善太の方を振向いて、

「善さん、これから猪山ごつこをして遊ばうぢやないか。」と言つたが、善太ははつきりした返事をしませんでした。

「善公、あなたを一番偉い犬にしてやるから、猪山ごつこをしようぢやないか。」

孫四郎も振返りながら言つたが、善太はやつぱり黙つてゐました。

與兵衛爺さんと新之丞は、畑の畔の大きな柿の樹に猪を吊して置いて、麥門冬の生えた傾斜面に腹を卸しました。

三人は鐵砲と火道具を二人の傍に置いて、葛の葉の白く齧つてゐる小高い丘の方へ走つて行つて、猪山ごつこの相談をしてゐますと、草野の細路を丘の方へ上つて來たのは、善太の妹のお鈴でした。

「兄さん、お母アさんが早くお歸りつて、待つてゐるよ。」

お鈴は三人の方を氣の毒さうに眺めました。それは、三人が面白く遊ばうとしてゐる相談を打毀すことを恐れたからでした。

「もう暫く遊んでからでも善いちやらう。」

孫四郎はお鈴の方へ近寄りながら言ひました。

「お父さんも歸つてるんぢやよ。明日から兄さんを川合山へ連れて行くんだつて。」

「えエ、川合山へ？」

善太は非常に驚いたやうな顔色を見せました。

「川合山へ？ 善さん、川合山へ何をしに行くんです？」

信次は不安らしく問ひました。善太は悲しうに項垂れて、

『お父さんは、俺に木挽になれと云ふんちや。俺は明日から川合山の奥へ行かねばならん……』

善太はもうホロ／＼と涙を流してゐました。

『川合山へ行つても、直ぐ歸つて来るでせう？』

信次は慰めるやうに訊きました。善太はシクシクと涙を潑り乍ら、

『明日山へ入つたら、秋祭りまでは出て来られないかも知れない……俺はもう、あんな等とかうして面白く遊ばれないんちや。』と言つて、袖を顔に押當てました。

『なアに、時々出て来る用事があるサ。度々會はれるよ。』

孫四郎が、さう言つた時、丘の下の方から上つて来たのは、孫四郎のお父さんの伊平でした。

伊平は綴々の襦袢を着て、繩の帯を腰に巻きつけ

てゐました。

『おい、孫四郎、又た悪戯をしをつたなア。其の着物はどうした事ぢや。』

伊平は口を歪めて孫四郎の着物の裾を眺めました

『猪が出、来た時、びつくりして逃げたので……』

と云ふ言葉の終らないうちに、伊平は大きな聲で、

『嘘を言ふな。あの淵の上の材木を落す所を……』と叱るやうに言ひました。

孫四郎の着てゐた着物は、随分綴の當つた襦袢でしたが、其のぼろが三ヶ所四ヶ所に大きな穴を見せてゐました。信次の着物にもべつたりと土がこびりついてゐました。善太の両袖も落ちさうになつてゐました。

『善い加減にして置け！』

伊平は拳固で、孫四郎の頭を、こつりと強く撲つて置いて、山を上の方に登つて行きました。

孫四郎は兩手で頭を抱へ乍ら、少しく舌を出して

笑ふまねをしました。

『痛かつたらう、え、痛かつたらう。』

信次は慰めるやうに孫四郎の頭を軽く撫でました。孫四郎は元氣らしく。

『なアに、蚊に螫された程も、痛い事はないよ。俺の頭は拳骨に馴れてるから……』と言つて、頭を抱へたまゝ妙な足つきで踊るまねをしたので、信次も

善太もお鈴も、思はず一度に笑ひました。

『お鈴、何をしてるんだい。』

櫻林の所から出て来ながら言つたのは、善太の母のお松でした。お松は脊に大きな袋を負つてゐました。

『これから見さんと一緒に歸る所ぢやよ。』

お鈴は言譯をするやうに言ひました。お松は善太の姿を見ると直ぐ、

『さア、其の着物はどうしたのかい。いたづらをするにも程があるよ。』と言つて、眼に角を立てゝゐま

した。

今度は自分の番だと言ふやうに、善太は孫四郎の顔を見ると、孫四郎は左の手の親指を銜へて、にたにた笑つてゐました。

お松は脊の袋を一寸動かして、信次と孫四郎の顔を等分に見ながら、

『信さん、孫さん、毎日善く遊んでやつてお呉れたネ。けれども善太は明日から、木挽の弟子になつて川合山へ行くんちやから、今日はゆつくり一緒に遊んでやつてお呉れ』と云つて、お松はさつさと丘を降りて行きました。

『さア、これで遊び納めぢや。遊ばう遊ばう、思ひ切つて遊ばう……』

善太は元氣らしく言つて、いきなり孫四郎に獅咬みついたので、孫四郎は不意を襲はれて、葛の葉の上に仰向けに轉びました。



謡 童

野口雨情選

(大人篇)

南へ行く雲

東京府 北千住 吉田 正三

南へ行く雲父さんに  
私は無事で御奉公  
勉めてゐると云つとくれ  
大きな聲で云つとくれ  
南へ行く雲母さんに

脊中の坊ちやん泣く時に

どうすりやいしかと

さいとくれ

小さな聲でさいとくれ

まいまいつぶろ

佐賀縣 久間校 齋藤 利治

まいまい、つぶろよ

まいつぶろ

も一度あとより

見て、ござれ、

あれは、ほんさん

つくぼんさん

よんべ、お花の

水くみに

一人で、來らした

もんですばい

虹の橋

群馬縣 粕川村 青柳 花明

雨があがつた

虹が出た

虹の橋 大橋

大鼓橋

渡るは お空の

風ばかり

雨があがつた

虹が出た

虹の橋 渡りに

行く風か

今ここ そよりと

吹いてつた

お山の嵐

秋田市 川反 木下 孝

お山が荒れるぞ

笹箆がさく

熊の子にげた

山なりするぞ

草藪ざわく

鬼もにげた

雨

雨

石川縣 岩城村 安島 雨晶

さらさら雨よ

木の葉をぬらせ

木の葉は光る

さらさら雨は

燕にはねられ  
はねられ降るぞ

螢

山梨縣 小淵澤 田中 富重

螢の飛ぶ夜は

涼風さらさら

提灯ともして

ついつい飛んだ

螢の行く道

甘い水どどん

小びしやく手に手に

くみくみ飛んだ

ねむり草

大阪府 平野町 恩地 淳

ねむれねむれよ

ねむり草

ねむれ

子供がさあれば

ちよつぶり

ねむる

金の唄、銀の唄

東京府 下戸塚 田尻 燕子花

坊やねんねよ

離れ島

金と銀との

燈臺に

金と銀との

灯がついた

千鳥が

銀の唄うたふ

母ちやん

金の唄うたふ

麥の丘

愛媛縣 生石村 仙波しげる

ひばりが空で

ないてゐる

小麥の丘の

おひるころ

郵便さんは

とぼとぼと

隣りの村へ

行きました

お通路さんは

鉦ならし

私の村へ  
着きました

小麥の丘の

おひるころ

深山時雨

静岡県 草深町 賤機 多味男

深山時雨が啼く頃は

涼風小風吹く時分

池にはあやめ咲き出して

ビチビチ鯉がはねる頃

深山時雨が啼き出せば

蛙の卵が解へる頃

露がそろそろ眠むる頃

田舎は忙し茶摘み頃



童 謠

野口雨情選

(子供篇)

鳥のこをとろ

千葉縣 堀切 友雄

こをとろこ

鳥のことろ

松のテツペンの

鳥のことろ

父うさん鳥は

お仕事に

母さん鳥はお使ひに

こをとろこ

鳥のことろ

親鳥來の間に

鳥のことろ

月の顔

香川縣 木村 カネ

月のお家は丸い窓

うさがもちつき

してぬます

とび上りとび上り

ついてます

たれがおよめに

行のだらう

藤の花

京都府立 岡本しな子

焼けた学校の

藤の花

今年もやつぱり

咲きました。

ブランコ、スベリコ

皆やけて、

ほんとに淋しい

運動場、

藤の花だけ

美しく

むらさき色に

咲いてます

夕暮

山梨縣小 齋藤 長信

一三二

雀雀もう日が暮れた

真赤にもえた夕焼も

だんだんうすく

さえて行く

風にそよいだ

河原のほぶら

をどりをどつて

夕焼小焼

札幌市 齋藤 久夫

どこから來たのか

雨小僧

トントントン

戸口をたゝいて

「なんか織物

ありやせんか」

トントントンバタバタ

雨小僧

静かな晩に

一生懸命

トントントンバタと

機を織る

暮れた港

廣島市 岡田 治郎

ギツコラ港に

舟が入る

暮れた港は

忙がしい

大舟小舟も

皆かへる

ギツコラ漕いで

皆かへる

暮れた港は

賑やかだ

ギツチリ舟で

賑やかだ

眞赤いとんぼ

旭北市 宮尾イエ子

まつかい

とんぼ

まだねてる

はすの葉の

つゆで

顔あろた

まつかい

とんぼ

おはよさん

螢の提灯

香川縣 福宜 清香

ついたりきえたり

飛んで來る

一人ぼつちで

何處へ行く

灯提つけて何處へ行く

燕のさくわん

熊本縣 渡邊 徹之

今日は燕の

家つくり

燕のさくわんは

壁塗だ

あんまさん

岡山市山 今城 泰夫

按摩さんが

笛をビービー

鳴らしてとほる

夕ぐれとほる

夕ぐれの空を

鳥が一羽

とう／＼なかに

とんでつた

一三三



幼年詩 若山牧水選

か (賞)

山梨縣北巨摩郡小淵澤村 田中すみみ (十二)

雨が降つたものですかにかにがもちがつて

お庭にはひつて来ました。

評 オ、オ、かほい、壺子さん(牧水)

お天気 (賞)

岐阜縣加茂郡古井校尋五 渡邊 純

今日は朝から

お天気だ

青い青い桑畑に

母さん白い

シャツ干した。

評、いかにも日本晴らしい。(牧水)

つばめ (賞)

東京府下日 伊藤 駿二 (十四)

米屋ののきに

つばめが巣くつた

雀がうらやましさに

見えた。

評、燕も可愛い、雀も可愛い、な(牧水)

しとく雨

山梨縣甲府市 豊島 泰

しとくしとくとふる雨は

麥や野菜ののびる雨

しとくしとくとふる雨は

茶の芽桑の芽のびる雨

しとくしとくとふる雨よ

ふつたら天気になつてくれ

評、その雨の様に調子のいゝ歌。(牧水)

馬

熊本縣阿蘇郡宮地町 渡邊 徹之 (十四)

雨がふるのに

綴方

齋藤佐次郎選

遠足 (賞)

山梨縣大月町 設樂 ハル

朝とびおきてねぼけた目で時計を見たら、まだ早かつた。顔を洗ひながら表へ出て見ると四方の山がきりで見えなかつた。母が「これではとてもよい天気にはなれないかもしれないよ」と言つた。學校へ行くともう皆来てわあ、さわいで居た。鐘がなつて門を出る時は、お母さんが来て私を見て行つた。皆はおもたい程かをカバンへつめて居た。停車場の向ふのホームへ行つた。汽車が来たので皆はわあ、言つて乗つた。あまり乗つたので乗りきれなくて、は

じの方に二三人で乗つた。大月を汽車が発車した。見る物は皆西へとんでつた。十二のトンネルを通つて四方津へついた。山道をのぼつて行つて大野の學校へついたら、生徒ががやがやして何か言つてたやうだ。又山道を行つた。見たくて見たくて仕方ない貯水が目の前に見えた時、私はこれが太平洋かと思つた。青い水が深くなつて、それに見どりの山がうつつて居た。遠くの方は銀のなみのやうだつた。其所でゆつくり芝の上にしをかけておべんたうをたべた。つばなをぬいた。こんどは鐵かんに水が流れて居る所も見えた。歸りに加藤先生が「道をまちがつてしまつた あ、もうだめだ」とおつしやつた。私は「行けるだけ行かう」と、先頭に立つて歩き出

した。もうほんたうにだめだと思つて歸らうと思つて吾ると、家のしやうじがあいておかみさんが「行けますよ、大通りへ」と言つたので、勇気を起して行くと大きな道へ出た。つばなを取つてさんざんまつて居たが、やつとこととみんなが来た。坂道を下つて停車場へ行つた。又汽車に乗つて、大月まで来て停車場でならんでわかれ

夜とぼし (賞)

千葉縣山武郡 齋藤 賢

た。母がむかひに来て居た。おみやげはつばなだけであつた。

「お母さんおら今夜夜とぼしに行くよ」と云つたらお母さんが「仲間はあるか」と聞いた。私は「仲間五人あるさ」と云つた。お母さんが「カンテラに油を入れてあるか、なければ明るい



山友 (畫) 千葉縣山武郡 齋藤 賢

内に入れておけ」と云つてると、わきの方で「賢ちやーん行かないかい」とよんだのは啓司さんであつた。それから大急ぎで仕度をして、カンテラ、ざる、どせうたたきなどをもつて

自分一人かき被つて  
馬はまるのれ  
どこまで行く  
評「何處迄行く」に心持が籠つてる(牧水)

車

千葉縣山武郡 鶴田 正穂  
東金校尋五

山にも車が通るよだ  
ざちがた／＼通るよだ  
しんとしたばんはよくひびく  
評「ざちがた／＼」がよくきいた(牧水)

東金の學校

千葉縣山武郡 高知尾正明  
東金校尋五

私の學校  
すぐわかる  
山見てわかる  
東金學校  
よくわかる  
評、歌の上手な學校ですぐわかる。(牧水)

ほこり

千葉縣山武郡 植松 正棟  
東金校尋五

ほこりがたつたら  
蝶がほこりに飛ばされて  
遠くの方へ飛んで行く  
評、その景色がよく見えます(牧水)

ぼぶら

千葉縣山武郡 植松 正棟  
東金校尋五

ぼぶらがゆれる  
でんせんもゆれる  
學校のうんどう場は  
ひろびろしてる  
評、歌も大きく廣々してる(牧水)

小川

香川縣木田郡 井上 清  
水田校尋六

夕日が西のお山へ  
しづむころ  
内の前の小川に  
小さな小さな  
かへるの子が  
びよんびよんびよんと  
流れて来た



東 京 府 東 葛 西 郡 三 木 町 向 日 氏 由 子 氏 由 子 氏 由 子

家を出た。もうそろそろあたりは  
くらくらなりかゝつた。「さあ行く  
べ」と云つて二人が一緒に出かけ  
た。そこへ三人来た。それは仲間  
の仁三郎さんと正雄さんとそれか  
ら恒さんであつた。カンテラの光  
りは若葉にうつて、木のうらまで  
あかるい。下の田では田つぼがこ  
ろころとないてゐる。ふと恒さん  
がすべつてころんだ。おーいた

くねらひを定めて「ビシヤ」とた  
たくと、水がはねてどせうがたた  
きにささつたから、あわてゝざる  
にとん／＼とはたいだ。何匹も何  
匹もどせうがゐるので夢中になつ  
て、たたいてゐると、正雄さんが  
「やあくつちやめ(まむし)が居た  
からきて見るやい」とよんだから、  
私はいそいで行つて見ると、くろ  
のまん中にたぐるを巻いてゐた。

たたきでたたいてカンテラの火で  
あぶると、たたきからまつてく  
るしさうにする分あばれたが、し  
まひにはとう／＼死んぢやつたと  
見えて動かなくなつた。ああい  
きびした。これにくつつかれると  
たまらなかつたつけ」と云つた。  
又どせうをねちつてたたく度に水  
の音がする。私は足もとを見ない  
で餘り田の方ばかり見てゐたら、

足がしべつて田の中へかばりと片  
足をおとしたがすぐはひ上つた。  
餘りけつべたがいたむからカンテ  
ラでよく見ると田のくろに杭が出  
てゐたのであつた。それから間も  
なく家へもどつてお湯に入つた。  
お湯から上つてもさつきのとこ  
ろがまだいたかつた。めしをたべて  
すぐねてしまつた。



香 川 縣 木 田 郡 水 田 校 尋 六 氏 由 子 氏 由 子 氏 由 子

にはとりを  
つゝた事  
香川縣木田郡米上校高一  
高橋 徳義  
昨日兄さんは田中の  
方へ魚つりにいつ  
た。僕は内で仕事を  
してゐた。すると  
う日は山より高くな  
かつた。僕はもう日

評、ヤレ〜何處までゆくのか鮎子さん。  
(秋水)

### 立話

香川縣木田郡 高重 たみ  
水上校尋五  
おかさんとおばアさんの立話  
お日様の方へ向いて話してた  
手をあげてまばゆさう

### ある夜

金澤市大 新山 憲造 (十二)  
豆田町  
雨のはれた晩  
薄暗い町を  
僕がひとり通つた時  
若い男がしばられて  
巡査と一緒に歩いてた

### 學校

茨城縣眞壁郡 箱守 政雄  
波ノ江校尋六  
學校の中が  
やかましいな  
自分はだまつて  
童謡をつくり

### 虫

千葉縣山武郡 鈴木 繁泰  
東金校尋五  
まつくらな夜  
虫のこゑが  
風と一しよに  
きこえる

### さじ

香川縣木田郡 田井 竹一  
水田校尋六  
山のおくでさじがなく  
りよしが  
みつけて  
うちました

### 燕

福井縣高 堀川 増雄  
濱校高二  
燕よ燕よ  
お前はよい巢を  
見つけたな  
燕の子供よぬくかろー  
のぞいて  
下へ落ちるなよ



「どなにしようたん」と云ひながら  
ひよこをつかまへた。つかまへて  
のけてやらうと思つてもなか〜  
のかない。兄さんやお母さんのか

石川縣喜 景 (畫由自)  
余村下 郡島鹿 高 澤 忠 平

て内へ入つた。僕がひよこをた  
して餌をしてゐると、弟が竹を  
もつてかへつて來た。すると僕  
が「ひよこが走つたらゆかんか  
ら、おうたらゆかんぞ」と云ふ  
と、弟はわざとひよこを竿でし  
いしいとおつた。するとひよこ  
はおほけて走つてしまつた。そ  
の中でも一匹はとり屋根の上へ  
飛上つた。するとそこにゐた弟  
が、ひよこがつれた〜と、走  
りまはつてゐる。僕が「ひよこが  
つれたとかあ」と走つていつて  
見ると、はやつて屋根の上で  
ビイビイとないて走りまはつて  
ゐる。僕が弟に「なにしようが  
つたん」と云ふと、弟は「ふん」  
といつて走つていつた。僕が「お  
母さんや皆はよきまへ」と云ふ  
と、みなとんできた。兄さんが



山梨縣 津 利 田 晃 (畫由自)  
山梨縣 津 利 田 晃 (畫由自)  
山梨縣 津 利 田 晃 (畫由自)

ほ色はまつさをであつた。兄さん  
がとうとうとつたので、皆なよろ  
こんだが、ひよこは目をつぶつて  
くびをくにやとしてゐる。お母  
さんが「もうこれ死ぬわ」と云ふと  
兄さんが「つひしたがらざれとる  
かわからん、しぬやら分らん」僕  
がひよこのそばへ行くとひよこは  
丈夫になつたのかゑをつゝいてゐ  
た。僕が丈夫になつたのでよろこ  
んで箱にいれてゐると、弟がわら  
ひもつてかへつてゐる。僕がおこ  
つておまへのために兄さんがしか  
られたんじやといひながらおわへ  
ると、竹をふりながらにげてしま  
つた。ひよこはそれから丈夫にな  
つた。弟は父にその夜しかられた。  
大工さん

香川縣木田郡 鍛治 繁雄  
水上校高一  
一三九



山路

千葉縣東葛飾郡手賀校高二 松本 眞砂

私が山路通たら  
炭焼きがまから  
煙が細々と出てた

小鳥

山梨縣北都留郡深松校尋六 飯島かつ子

今朝みたら  
私がおるた植木場を  
小さな小鳥が  
ながめてた

藤の花

千葉縣八榮第一校尋六 仲村 貞治

藤の花は  
私は好きです  
しめつばい朝  
庭をあるくと  
自然 藤の所で  
足がとまります

竹の子

千葉縣八榮第一校尋五 齋藤よねゑ

竹の子がやつと  
一本でた  
地べたがもち上つてる  
も一ツ出るだらう

電氣

北海道中湧別校尋四 竹浪 秀明

電氣電氣  
さえるなよ  
きえたら坊やが  
泣き出すよ

うらの竹林

福井縣大飯郡高濱校尋五 松尾金四郎

うらの竹林  
風が吹くたびに  
ごう／＼  
時々雀が  
鳴いて居る



藤後 藤次 新島縣新島郡下百村九十番地

「エー雨の十日もよー」と變な聲で歌ひながら内の長屋を建てゝゐる。大工さんは、眼鏡をかけて根氣よくコツチン／＼と木をけづつて居る。何時か僕が大工さんの側へ行つ

て、大工さんに「もろだの木はかたいだらうな」と云ふと「へえ此のもろだは、かしくて居るから非常にかたくて、仕事がかどらんよ」と云つて、なほもコツチン／＼つづけて居る。叔母さんに「あの大工さんは根氣がよいの——」と聞くと、「あの大工さんは、年は六十餘りにもなる年寄だが、若い大工さんよりは、仕事は丁寧にし——早いからよくはやつて方々へ雇はれて行くじや」と仰しやつた。大工さんは長い黒いも／＼ひきをはいていかにも顔のひきしまつたすげな人だが、本當にやさしい人で、皆にすかれさうな人だ。僕はは大工さんのふんばつてゐる趾の方を見て居るとふと親指の爪がないので、「大工さん其の足の爪はどうしたのな——」と聞

くと、「これは木をまくらして行く」と、まはねがやつて其の拍子に足に來て親指をやられたんだ。そしてこんな病んだ上、此のやうにかたわになつたのさ——と小聲で言つた。私は其の趾を見て居ると、爪が二分ばかり見えて左の足の指より三分ぐらゐ短かい。だが話をしながらも、一寸も手を止めない。本當によ／＼働く人だと感じた。私はうつかり仕事を見て居たが、西のもみじの方を見ると、日は土塀の瓦を照らしてキラ／＼光つて居た。

こつけない車掌

東京府荏原郡目黒九七四 伊藤 駿二

すつと前、學校から歸る時のことだ。電車がなか／＼こなかつたので、これちやあきつとこんでる

だらうと思つてゐたら、案の如く向うから來た電車は鈴なりである。けれど大分おりのたので、二人や三人ぐらゐは乗れるやうになつた。僕は急いで乗つた後から後からどんどん乗つてくる。けれど待つてゐた人はすつかりは乗れずに二三人おもてにぶらさがつてゐた。電車ははしり出した。おもてにぶらさがつてゐる人もうでがくたびれたと見えて、「おい車掌、もつとつめてもらつてくれ。まん中の方はすゐふんすいてるぢやないか。」と言ふと車掌は、「どこもすいては居りません。すいて居りますのはみなさんの頭の上だけです。」と言つた。乗つてゐる人は一度にどつと笑つた。ぶらさがつてゐる人もにが笑ひをして、横をむいてしまつた。



信 通

自由畫選評

山 本 鼎

△後藤三次君の「ミットとグローブ」しつかり描けて居て、バックの調子がいいけな。筆が粗暴なばかりでなく、色が濃すぎる。むしろパツクをかきない方がよかつた。△津田利晃君の「村」色が少しきつた。黄色の用ひ方がわるい。△高津忠平君の風景の畫、それ／＼の木の性質によつて、自然に筆つきが異つていつた處に面白味がある。中央の家屋がまづい、色も悪く、調子も悪い。△石丸滿行君の「十河先生」風つきや韻など感じがばつさり出て居るだらうと思ふ。手の描き方が弱すぎるのが惜しい。やはり顔のやう

にはつきりしたテッサンで欲しかつた。△日向も「顔」落つて見、慎重に描寫してある。顔ばかり明瞭にかけて居るのに、衣服のあたりが影のやうに弱くなつて居るので、顔の處まで、印象が鈍くされちまつた。△吉屋かれ子さんの「友達」達者な鉛筆畫、描寫に力があつて、深みが足りない。つまり感じる深さより、描く力の方が進んで居るためです。

幼年詩選評

若 山 牧 水

▼今度はいへんによく出来てゐました。こゝに熊本縣玉名郡荒尾北尋常小學校第二學年生の海邊公子さんからそれは、佳い歌をたくさん送つて来てあります。とでもその中から一篇や二篇だけとつて残りを捨てるに忍びませぬのでこの人の分だけ別の頁に出して貰ふ様に編輯部の方にお願ひしました。よく見て下さい。一篇々がまことに子供らしくて、上品できれいで、そしてちゃんと歌になる中心をつかんで歌つてあります。悪くもせられないので、このまゝすん／＼伸びて行かれるだらうと思はれます。▼個人々々に送つて来てあつた分の中で本欄に載せられなかつた佳作の作者をば選外として名前を出しておきましたが、各學校から送

つて来た分をば餘りが多いので、一々名前を出さずにおきました。香川縣の水田校は平常より少し落ちて選外僅かに四人、同縣氷上校からは同九人。千葉縣東金校はたいした成績で本欄にも澤山入選しましたが選外にも十二人からあります。一時たいへん盛んであつた福井縣の高濱校が最近また復活して来たのは嬉しい。同選外佳作七人。新たに目についた千葉縣八榮第一校も出来榮よろしく、同四人、これと同じく新進である山梨縣澤松校からも同じく四人あつた。その他にもなほぼつくと眼について来たのがありました。

童謠の選後に

野 口 雨 情

童謠と童心藝術。童謠を單に兒童の歌、單に兒童の詩とのみ考へることの誤りであることは、これまで屢々私が説いたところでありました。それについて簡単に述べてみます。童謠は「童心藝術」なのです。この童心藝術と云ふ言葉は私が初めて唱へて来た言葉であるから、その意味が判りにならぬ方もあつたらうと思はれます。先づ皆さん方が併人「茶の俳句」を讀んで、一茶の俳句の内容が、私達の主張してゐる童謠の内容と一致點のあることをお心つきにならせう。内容に一致點があるからと云つて

編輯室より

一茶の俳句を童謠だとは云はれません。又、それと同じやうに、童謠の内容が一茶の俳句と一致點があるからとて、童謠を俳句だと云ふことも出来ません。俳句は俳句だと云ふあり童謠は童謠、童謠は童謠であります。ただ内容に一致點、即ち歌はんとする世界が同一世界であること云ふにすぎないのです。同一世界と云ふことは、同じ境地である。物の見方が同じやうな見方であると云ふことなのです。同じやうな見方と云ふことは主観的のことであるからです。と云ふと、兒童の歌なり、詩なりが、なぜ童謠になるかと云ふと、往々「童心藝術」の境地に觸れた作品と云ふからであります。要するに、兒童の歌や詩が直に童謠でなく、この「童心藝術」の境地に觸れて初めて童謠と名づけられるのであります。童謠は全く「童心藝術」でありますから、童謠を單に兒童の歌、兒童の詩とのみ考へることの出来ない理由もお判りになるだらうと思はれます。又、童謠が

『金の星』誌友募集

「金の星」の誌友を募集いたします。誌友にはいろいろの特典と便宜とがありますから、御希望の方は本社宛に規則書をお申込み下さい。今度より三ヶ月分以上の直接購讀者に對しては、誌友のお取扱ひをする事となりました。

客観的のことではありません。主観的であるから、対象物なり物の生活なりが時代につれて移りかばつて来て、移りかばつて来れば、移りかばつて来たその儘の姿を、眞直な見方をすればよろしい譯なのです。そこに一茶の俳句の内容と、童謠のもつ内容と一致點が見出されるのであります。何故に一致點があるかと云ふと、一茶の俳句も私達の主張する童謠も、共に「童心藝術」

▽梅雨となつてから、毎日曇つた、陰気な日がつまみすが皆様にばお變りませう。するとすぐんか、ぢきに梅雨は止れませう。するとすぐ／＼と暑い／＼夏が来て、震災後の東京はさぞ／＼つらいこと／＼今から思ひやられます。▽さて、今月の編輯だよりで皆様にお知らせいたしたことは、長い間のおなじみとして、皆さんから深い親しみをもつて迎へられてをりました岡本鏡一先生がまた金の星のために、毎號お得意の畫を寄せて下さることになったことです。岡本先生は創刊號以来「金の星」のために努力して下さつた方で、この一年間ばかり御都合があつて、お休みになつてなりましたが、今月號からまた再び御苦心の作を發表して下さる事になりました。▽九月號には面白い讀物が澤山皆さんを持つてなりました。今月號には載せ切れなないために興味深い讀物が大方に次號に廻つたことゝ残念に思ひます。▽最後に一つおことわりして置きたいことは西條八十先生の「決死の使者」は岡先生が中途で急にフランスへ留學されることになつた爲め、途中の港から送つて来るべき巻の續きが届かないので、止むなく一時お話をあれで打ち切ります。▽暑い夏が來ます。皆様お身體をお大切に。

自由畫掲載外佳作

- 淺野 三郎(新潟)
- 小源 ミツ(千葉)
- 石丸 滿行(香川)
- 七種 周緒(長崎)
- 大村 一夫(福岡)
- 神谷 彰(奈良)
- 後藤順四郎(新潟)
- 中坂 藻舟(東京)
- 鈴木 昭世(朝鮮)
- 高松 豊子(千葉)
- 内田 治子(千葉)
- 横井 修吉(京都)
- 小宮 武信(山梨)
- 橋爪 謙吾(東京)
- 七種 シノ(長崎)
- 竹淵 啓代春(長野)
- 清水 力(石川)
- 岡本 幸好(山梨)
- 杉本 正子(東京)
- 井關 正子(東京)
- 松尾金四郎(福井)
- 山本 嵐造(北海道)
- 清水 力(石川)
- 黒田 一三(愛知)
- 柳田 英二(青森)
- 内田 薫(石川)
- 千ヶ崎英三(山梨)
- 浅見松三郎(埼玉)
- 山本 光夫(山梨)
- 金子 多代(横濱)
- 和賀峰四郎(東京)
- 内山 義昭(東京)
- 若林 義時(長野)
- 熊野 高義(香川)
- 豊島 泰(山梨)
- 神谷 彰(奈良)
- 西村 眞長(長野)
- 宮崎 嘉矩(長野)
- 塚原 明子(廣島)
- 竹村 忠一(高知)
- 村上 博(東京)
- 坂井 麗子(東京)
- 渡邊 吾朗(長野)
- 黒田 一三(愛知)
- 上原 義矩(埼玉)
- 和泉 幸(青森)
- 中川 正二(不明)
- 松村 くに子(愛知)
- 横井 淳子(愛知)
- 石田 勳男(千葉)
- 福宜 清香(香川)
- 竹淵 啓代春(長野)
- 渡邊 徹之(熊本)
- 松島 孝(東京)
- 木下 力(石川)
- 西川 昇(神奈川)
- 七種 カネヲ(長野)
- 宇野 修二(愛知)
- 稲村 謙一(鳥取)
- 宮崎 明夫(東京)
- 高尾 進(東京)
- 渡邊 武(東京)
- 北澤 三郎(新潟)
- 藤田 勢水(戸)
- 齋藤 利治(佐賀)
- 原 勝利(東京)
- 三國 菊枝(新潟)
- 飯村 恵(東京)
- 増田 三郎(香川)
- 水尾 隆彦(愛知)
- 北田 タミ(新潟)
- 黒田 一三(愛知)
- 比島 トシ(東京)
- 清水よしを(山口)
- 竹浪 秀明(北海道)
- 末野 啓次郎(福岡)
- 霜村 貞夫(茨城)
- 有野 明(山梨)
- 松本 眞砂(千葉)
- 高久 忠(東京)

幼年詩掲載外佳作

- 中戸 勇(山梨)
- 三浦 忠行(山梨)
- 岩崎 ヒサコ(山口)
- 廣永 才樹(山口)
- 岩岡 亮(茨城)
- 石川 延男(山梨)
- 松本 眞砂(千葉)
- 北島 琴子(東京)
- 伊達 正信(大宮)
- 木村 まり子(東京)
- 小俣 正治(山梨)
- 酒井 辰雄(栃木)
- 伊藤 駿二(東京)
- 武部 敏男(鳥取)
- 桑原 政市(北海道)
- 畠田 二郎(京都)
- 斎藤 久夫(札幌)
- 松島 孝(東京)
- 中坂 藻舟(東京)
- 伊藤 直作(千葉)
- 辻村 喜美(京都)
- 大北 忠雄(香川)
- 横井 淳子(名古屋)
- 中島邦太郎(埼玉)
- 木村 ノブ子(青森)
- 海途 公子(熊本)
- 水野 光雄(高知)
- 白洲 之子(兵庫)
- 山村 加枝子(熊本)
- 伊藤 駿二(東京)
- 金丸 正則(山梨)
- 澤山 芳彦(東京)
- 木崎 隆太郎(山梨)
- 南方 當子(大津)
- 島田 研一(大阪)
- 柳田 一夫(山口)
- 今井 銀三(大阪)
- 早川 トミ子(長野)
- 西村 丹一郎(東京)
- 堀内 義太郎(岡山)
- 奥澤 福松(新潟)
- 橋本 勝一(栃木)
- 川島 糸子(門司)
- 依川 春風(新潟)
- 田所 久馬(朝鮮)
- 田中 文天(東京)
- 相馬 恭二(茨城)
- 文雄(茨城)
- 榎平 清一(和歌山)
- 羽田 敬和(高知)
- 木場 實藏(長崎)
- 奥村 正夫(新潟)
- 小川 漢三(岐阜)
- 小野 健二(新潟)
- 金野 健二(岩手)
- 青柳 徳太郎(群馬)
- 庄司 ハル子(朝鮮)
- 山崎 ノリヲ(廣島)
- 井上 環(兵庫)
- 池田 武太(東京)
- 花岡 次夫(山梨)
- 大石 菊松(大阪)
- 奥谷 字之吉(廣島)
- 北田 英一(東京)
- 中村 秀太郎(福岡)
- 中村 信長(岐阜)
- 鈴木 秀山(形)
- 永井 良子(青森)
- 菅 三造(福岡)
- 長島 大郎(埼玉)
- 平林 春子(鹿島)
- 橋村 林太郎(盛岡)
- 宮井 ミツ高(知)

金の星誌友名簿

- 野坂 治(福岡)
- 長谷川好延(東京)
- 島本 光二(名古屋)
- 大空 夏子(名古屋)
- 安田 政夫(臺北)
- 福田 ハツ子(横濱)
- 松川 重雄(東京)
- 河口 みつを(豊橋)
- 森 知雄(福岡)
- 瀨川 旬朗(大阪)
- 三瀬 眞弓(埼玉)
- 羽田 敬和(高知)
- 丸茂 五郎(甲府)
- 阪野 潤大(大阪)
- 高橋 興吉(盛岡)
- 山下 亮(山梨)
- 小澤 ける(名古屋)
- 木村 英夫(熊本)
- 増田 龜一(静岡)
- 伊藤 一雅(京都)
- 神田 晴治(長野)
- 名方 まさる(大野)
- 久米 龍一(茨城)
- 野路 丘青(朝鮮)
- 牛島 宇紗美(福岡)
- 山本 貞廣(滋賀)
- 櫻塚 きよ子(埼玉)
- 石川 延男(山梨)
- 松本 眞砂(千葉)
- 北島 琴子(東京)
- 伊達 正信(大宮)
- 木村 まり子(東京)
- 小俣 正治(山梨)
- 酒井 辰雄(栃木)
- 伊藤 駿二(東京)
- 武部 敏男(鳥取)
- 桑原 政市(北海道)
- 畠田 二郎(京都)
- 斎藤 久夫(札幌)
- 松島 孝(東京)
- 中坂 藻舟(東京)
- 伊藤 直作(千葉)
- 辻村 喜美(京都)
- 大北 忠雄(香川)
- 横井 淳子(名古屋)
- 中島邦太郎(埼玉)
- 木村 ノブ子(青森)
- 海途 公子(熊本)
- 水野 光雄(高知)
- 白洲 之子(兵庫)
- 山村 加枝子(熊本)
- 伊藤 駿二(東京)
- 金丸 正則(山梨)
- 澤山 芳彦(東京)
- 木崎 隆太郎(山梨)
- 南方 當子(大津)
- 島田 研一(大阪)
- 柳田 一夫(山口)
- 今井 銀三(大阪)
- 早川 トミ子(長野)
- 西村 丹一郎(東京)
- 堀内 義太郎(岡山)
- 奥澤 福松(新潟)
- 橋本 勝一(栃木)
- 川島 糸子(門司)
- 依川 春風(新潟)
- 田所 久馬(朝鮮)
- 田中 文天(東京)
- 相馬 恭二(茨城)
- 文雄(茨城)
- 榎平 清一(和歌山)
- 羽田 敬和(高知)
- 木場 實藏(長崎)
- 奥村 正夫(新潟)
- 小川 漢三(岐阜)
- 小野 健二(新潟)
- 金野 健二(岩手)
- 青柳 徳太郎(群馬)
- 庄司 ハル子(朝鮮)
- 山崎 ノリヲ(廣島)
- 井上 環(兵庫)
- 池田 武太(東京)
- 花岡 次夫(山梨)
- 大石 菊松(大阪)
- 奥谷 字之吉(廣島)
- 北田 英一(東京)
- 中村 秀太郎(福岡)
- 中村 信長(岐阜)
- 鈴木 秀山(形)
- 永井 良子(青森)
- 菅 三造(福岡)
- 長島 大郎(埼玉)
- 平林 春子(鹿島)
- 橋村 林太郎(盛岡)
- 宮井 ミツ高(知)

綴方掲載外佳作

- 石田 勳男(千葉)
- 福宜 清香(香川)
- 竹淵 啓代春(長野)
- 渡邊 徹之(熊本)
- 松島 孝(東京)
- 木下 力(石川)
- 西川 昇(神奈川)
- 七種 カネヲ(長野)
- 宇野 修二(愛知)
- 稲村 謙一(鳥取)
- 宮崎 明夫(東京)
- 高尾 進(東京)
- 渡邊 武(東京)
- 北澤 三郎(新潟)
- 藤田 勢水(戸)
- 齋藤 利治(佐賀)
- 原 勝利(東京)
- 三國 菊枝(新潟)
- 飯村 恵(東京)
- 増田 三郎(香川)
- 水尾 隆彦(愛知)
- 北田 タミ(新潟)
- 黒田 一三(愛知)
- 比島 トシ(東京)
- 清水よしを(山口)
- 竹浪 秀明(北海道)
- 末野 啓次郎(福岡)

童謡掲載外佳作

- 玉真誠太郎(大卒田)
- 砂山 勝二郎(山梨)
- 黒田 包三郎(埼玉)
- 河口 裕子(山梨)
- 折原 光顯(山梨)
- 穴戸 功夫(朝鮮)
- 木下 昂(神奈川)
- 澤井 啓代志(東京)
- 如野 彌生(大阪)

新しく出た本

◇民謡と童謡の作りやう (野口雨情先生著) この書は野口先生が、大阪から訪れて来た一青年にお話になった筆記を本にしたものです。内容は問答體になつてゐる。民謡とはどんなものか、から「國民性と民謡童謡」まで九章に分れて、誰にも分るやうに民謡の作り方が説かれてゐる良書です。民謡童謡に心ざしてゐる諸君の必讀すべき本です。そして表紙は巖谷紅兒先生の手になつた羽二重表紙の美麗なものです。(菊半截三一〇頁。定價一圓五十錢。東京神田區通神保町六黒潮社發行 振替二五四〇〇番)

◇童謡第二輯 (篠原徳太郎 栗原登兩氏共著) この輯には學校でも家庭でも直ぐ上演出来る童謡劇、「お人形さ人の夢」或る日の花咲翁、「浦島の最後」等九篇あつてゐる。舞臺面の寫眞が十数葉入つてゐる。劇中の歌詞には一々曲譜がついてゐるので、學藝會などでたやすく出来ます。(四六判二〇〇頁。定價八十錢。東京牛込區新小川町二丁目四三共出版發行振替東京五三三三三〇番)

◇童謡第一集 (東郷善佳氏著) 野口先生の童謡「もしもし畑」の外六つの童謡に著者が踊りの振付をして、誰が見ても直ぐに踊れるやうに一々寫眞を入れて説明してあります。

金の星誌友名簿

す。そして一つの童謡毎に別冊になつてゐるそれが一つの秩に入つてゐるので非常に都合のよいもので、各刊行入 定價一圓三十錢。香川縣琴平町二二三二都村有爲堂 振替大阪一五七二番)

◇ロビンソン漂流記 (金の星誌編) 世界少年少女名著大系の第一篇として本社から出版されたものです。原作者はダニエル・デフォーと云ふ今から百八十年程前に死んだイギリスの文學者で、ロビンソンの三十年間の無人島生活が書かれてあります。この忍耐強い艱難辛苦する生活から受ける感銘はきつと何物かを胸底に残さずにはおかないでせう。(四六版 一四六頁 定價九十錢)

◇ドン・キホーテ(金の星誌編) これも名著大系の第三篇です。スペインのセルゲアンテスの原作で、ドン・キホーテの滑稽で、痛快な騎士談です。世界の名著でありながら、これまで少年少女のためにあまり日本に紹介されてゐません。お話しに變化のあることとして、又、冒険談でもあるので、讀めば讀むほど面白味が出ます。此本が出た時、スペインでは非常な評判でした。王様が都城から外を御覽になつた時、青年が Kristus 笑ひ乍ら本を讀んでゐるのを見て、「あれはきつとドン・キホーテをみて居るのだらう」と仰つたさうです。譯がよいので、すらすらと面白く讀めます。名著大系は是非學校に安插に備へべきものです。(四六判一七七頁 定價九十錢)

講演だより

廣島より

沖野岩三郎

一四六  
に聴いて呉れ  
ました。若柳小學の「蝙蝠の唄」を最後に紹介しました

五月廿一日夜、十時五十三分に廣島驛へ着きました。組合教會の八太牧師、東醫學士を始め青年會の方々が構内に待つてゐて下さったのは嬉しかったです。

廿二日は廣島で有名な、泉邸といふ私園を見たり、市内に居る舊友を訪問したりしました。

廿三日の午後八時から高等工業學校の講堂で、講演をしました。七百人の入場者は十一時まで静肅

時、満場は破れんばかりに拍手して喜んで呉れました。

廿四日は八太氏一家族と共に、日本三景の一である嚴島へ行つて一日ゆつくり休養しました。雨の降る中を新緑を縫ひながら歩いた時は、心が洗はれたやうに愉快でした。廿五日は組合教會で二回お話をいたしました。

廿六日は森本泉二氏の發起で、童話研究者の人々二拾餘名と、明

治堂の三階に會合して十二時近くまで、意見の交換をしました。夫れを機會に、森本氏方へ「金の星支社」を設けました。森本氏は同地のエスベラント研究會長であり、兒童愛護の熱心家です。金の星は善いお友達を得ました。  
廿七日は同市の黒船社の誌友會で、お話をして、夜半の一時五十分の汽車で神戸に向ひました。  
廿九日午後八時から、西須磨の別荘學校で大人の爲の講演會を開きました。山上の氣持のいい講堂に一杯聴衆があつて、十一時十分にお話を終りました。  
三十日の午前は須磨小學校で一干の子供さん達にお話をしました

私のお話の前に水谷央さんが面白いお歌を五つ歌つて下さいました。六月一日は、宇治の花屋敷で、一日静に休みました。宇治川の水嵩は可なり高まつてゐましたが、お友達五六人と一緒にお舟に乗つて五六町水上までのぼつてみました。佐々木高綱や梶原源太のお話

が盛んでした。六月二日の午後五時前に、岐阜縣の阪下町へ着きました。同地の小川渙三氏は途中まで迎へに来て下さいました。

私は廣島から電報で、「土産おけたい子供の數知らせよ。」といふ電報を打ちました。夫れは小學校の生徒さん達に、金の星社からのお

土産を差上げる都合があつたからでした。所が小川さんは、御自分のお子さんに、土産 呉れるのだと思つて、「一男二女あり」といふ電報を打ちに郵便局まで行つて、ふ、氣づいて、「大人三百、子供七百」と打つたさうです。

前年弘田龍太郎先生が廣島へ行つた時「舞臺券取消たのむ」といふ電報を打つて、「死んだ、行けん、取消頼む」と間違つて讀まれた事を話して大笑ひをしました。

二日の午後八時から、同地の劇場で、三時間のお話を致しました。遠く長野縣から來聴された人の多かつたのは恐縮の至りでした。三日の午後一時から小學校の講

堂で、八百人の生徒さん達にお話をいたしました。そして四時半から加藤、石垣、小原、安江、小川の五氏と一緒に寢覺の床を見に行きました。汽車の中で八九才の可愛らしい嬢ちゃん、其の弟さんらしい二人の坊っちゃん、青い眼のお人形」を歌つてゐました。あまり可愛らしいので、私は持つてゐた「笹舟小舟」の譜をあげました。嬢ちゃんやんは佐藤光子さんといつて、満洲の撫順からお父さまやお母アさんと一緒に長い旅をして來たのだといふ事でした。  
寢覺の床の臨川寺に、面白い小僧さんがゐて、浦島太郎と乙姫様のお話をして呉れました。



讀者だより

▽小馬が眠つてしまつて淋しい。『教育界の童話』と區別する程その童話にせんない様です。上手な事が絶對良い事と考へてゐる人がゐるやうです。先生方の手を放した大低能児(所謂)がよくしらぬかなで「エキノアサ、シナガフツタヨニエキガフツチキマス」とか「エントツカボカントタツテイルノチミテカトオカシタツタス」アスとかかくのを見るよき私の心はいらだちます。(義憤?)よゝ素質を見出されず「お前は馬鹿だ」ときめつけられて絶望する者がたくさんゐます。藝術のなんたるを知らぬ人や「ナナ」聯想する人の多いのも悲しい事です。混沌の世へ偉大なる太き線をひけ! 光あらしめよ……生かしめよ! (山口 伊藤三)

(岡山 廣島太郎)

▽先生方お變りも御座いませんか僕で都合にて、出石三雄といふ變名で投書さし三頂さす故、どうぞ宜しく、さて私の一月號に當選だ参りませんが如何致したものでせう。門司 南須原静也)
▽賞品を早くお送りしなければならぬのですが、今新しく作つて参りますので少しお待ちを願ひます。(記者)
▽金の星のあいどく者にしてください。毎月投書し、す。和歌山 西岡英次)
▽私は本誌第六卷第一號より第六號迄の童話大人篇得獎表を作つてみました。推薦十點佳作五點掲載外佳作三點として計算しました。十點の以上の方々です。
京都 三須英三 大阪 名方まさる 大阪 恩地 淳 神戸 安田とし昌 横濱 佐藤義美 熊本 田尻ゆきを 新潟 廣田庸人 東京 伊藤 邦夫 立井信夫 岡本しな子 河私は中山一男名方邦郎名方美佐男の名で發表されて居ます。終りに童話を愛する方の御文通をお願ひ致します。(大阪市西區市岡町八

千夫)

▽興味ある神野先生のお話に夢に打たれたやうな皆さんは一聲に拍手した。美しく、かざられた花の日、私達にとつて最もよろこぶべき日であつた。段一ぱいにかざられた花の中、喜の中に皆さんはかこまれてたのしみの今日を祝した。ほつと息をしながらすすり行つた。空にキラキラと光り出した大空にくつきりとした教會の十字架が空をつきさすやうにそびえた。空には私たちがたのしみを祝すやうに明星はまいた。ああ、イエスキリストはこのたのしいゆふべに安らかに安らかに寝りゆくのであらう。

(東京 竹川久子)

▽輝かしい音楽の頃となりました先生方は御元氣でございますか。六月號の美しき本當にうつとりがたまりました。寺内先生ほんとにありがとうございました。七月號もまたあのやうに美しく書いて下さいませ。本居先生も無事にお歸りになり、亦前の様に爽やかな作曲をお載せ下さるのも嬉しい事です。童話も皆面白うございました。病める私は言葉の中にハンモツタを釣

九〇彦原方小國民會 名方勝)
▽一つとや人々金の星を大切に日増しに愛讀者)
二つとや二つ雜誌がゐるなれば金の星がためになる)
三つとや皆で盛に投書して世界の果てまで輝かせ)
四つとや善き雜誌は金の星閣下の台覽仰ぎます)
五つとやいつでも體を大切に仰げや高き金の星)
六つとやむくいまつらん金の星外に雜誌は二つない)
七つとや七度轉んでも起き上り金の星をなすまい)
八つとや八千代の末迄續いても大和心の愛讀者)
九つとや心はかならず廣くもろくもや進ませうこの雜誌)
十つとや進ませうこの雜誌)
十一つとや進ませうこの雜誌)
十二つとや進ませうこの雜誌)
十三つとや進ませうこの雜誌)
十四つとや進ませうこの雜誌)
十五つとや進ませうこの雜誌)
十六つとや進ませうこの雜誌)
十七つとや進ませうこの雜誌)
十八つとや進ませうこの雜誌)
十九つとや進ませうこの雜誌)
二十つとや進ませうこの雜誌)

つて涼しい風に吹かれつゝ金の星を見るのが何よりの楽しみで、幼い子供心にかへつてうっとりとする時は恐い病の事も忘れて居ります。終に一すお尋ねしたい事があります。誌上でお答へ下さいませ。童話、その他の投書は毎月投書すると發表は毎月號になるのです。また童話の選外佳作は名前だけしか出ませんのでいつ投書した時ほどれがよかつたのか、或は何篇も出した時ほどれがよかつたのか解らなくて困ります。題も出して頂けませんか。先生方の御健康を祈ります。(大空夏子)
▽投書の發表は二月後になります(記者)
▽大へん暑くなりましたが皆様御健闘の程何より御めでたうございます。拙い童話を入選さしていただいてありがたうございます。今後も一層勉強してみようつもりで居ります。きれいなエマガキも取りがたうございました。早速教室へ飾つて子供をよろこばせてやります。(静岡 松井多門)
▽日に月に發展して行く本誌を祝願いたします。今度童話誌「まどろみ」を發行いたします。世の童話

一四八

愛好の皆様御援助と、世の先生方の御指導の程ないのりです。末筆乍ら野口若山齋藤の諸先生の御健康を祈ります。福井縣小濱町切戸 法本芳泉)
▽野口雨情先生。先生の童話や民話を愛讀してゐるものでございませ。金の星の生長と共に大きくなつてまゐりました。いくら青年になつても幼い日の夢は忘れることができません。眞實に何の虚飾なしに子供になつて笑つたり歌つたりしてゐます。五月號に對馬で作つたものを送つて下さい。又つたらだけ解らなかつたでせう。又つたらおのれを書きました。どうぞ笑つて御覽下さいませ。(榮次)
▽記者様七月號本日つきました。六、七月號ともに表紙の美しくなつたこと、今後ともこのやうな繪をお願ひ下さい。又美しいエマガキをお送り下さいませ。厚くお禮申し上げます。いやな梅雨が参りました。益々ご自愛の程を先にお願ひさすやうなら(恩地淳)
▽六月號後の感想を申し上げます。面白い話ば「どる坊学校」「三太郎の箱」「さやこやツツ物語」「ラム玉の一生」「耳無し法市」などでした

(九州 片山せめ)

も誌友にして頂けませんでせうか(九州 片山せめ)
▽御無沙汰致しました。御社の皆皆御變りも御座いませんか。暫く留守で御座いまして三月號を買ひませんでした。本月初めて買つてみましたところ私のが出てをりました。まだ未熟の私でございます。また未熟の私でございます。それから誌友でなければ御通知頂けなくてございませうか。今度の入選も何も存じませんでした。東京 北田初子)
▽別に御通知はしません。誌友でも其他の方でも、入選した場合は只雜誌で見ても頂きます。投書致しますから何卒御願ひ申します。私は熊本の田舎者ですから投書の文字も讀みにくい所があらと思ひますがその點は悪からず御判願下されんことを願ふ(原啓一)
▽五月號をうれしく拜見致しました。内容の充實さ、それは今更申すまでもありません。諸先生の御作讀者方の御作に多大な興味を抱いて拜見致してゐます。四月……もう當地は夏です。白衣の人の往

來交るのを見てももう夏が来たなと感ぜさせます。田の稻の穂付もとうに終り今は一尺近くびてゐます。青田の中に白鶯が深山鳴つてゐます。繪の様な景色が夏にまつまれば、私達は努力致して居ります。(臺北 恒子)
▽記者先生、いゝ氣持です。ほんとは申分ありません。金の星の六月號の贈物は皆面白、物ばかりです。童話と云ひ童話と云ひ挿畫と云ひ、ほんとに「金の星」は世界一です。まづい作を投書しました。あれでよいでせうか。初投書です。これから勵みます。小馬は未だ出版しませぬか、誌上に御答へ下さい。さよなら。(兵庫 木舟廣次)
▽あれで結構です。小馬はそのうち出ます。(記者)
▽誌上の皆様此度私も此のやさしいそして美しい金の星のお友達になりました。(大阪 畑野彌生)
▽此度は種々御同情に與り同大目出度です。頂上にて頂上にて同大目出度です。種々喜び居り候。いやはかき子供も大喜びで御座いました。先は失禮なはがきを以て御禮申上候。東京天理教本葛子供會)

一四九



金の星社 八月號

出版だより

近刊 ロビンフッド物語

金の星社の名著大系の第六篇とな備きをやつて、しまひには王様として近日発行の豫定です。本書は...

名著大系の第四篇

『コロンプス物語』 発行!!

出版界に大評判の、金の星社の『コロンプス』といへば、あまねく『世界少年少女名著大系』は...

愛読者通信

を知つてゐるだけで、そのコロンプスがどんな風に偉い人だったか、どんな面白お話があるか...

◆金の星の合本◆

- 第一輯 (絶版)
第二輯 (第五巻一號ヨリ) 金一圓
第三輯 (同五巻七號ヨリ) 金一圓
第四輯 (第六巻一號ヨリ) 金二圓

△武井先生の『アヲ太郎鍛冶屋』を見ました。大變感じのよい面白い本でした。實際先生の特色のある話と繪には私は元々感心して居りましたが...

名著大系の第五篇

『ガリバー旅行記』 発行!!

英國の文豪スウィフトの傑作として、『ガリバー旅行記』は世界に鳴りひびいてゐます。ロビンソン漂流記と共に世界各國語に翻譯され...

沖野岩三郎先生著

長『森の祈り』 (愈々發賣)

沖野先生の長篇名作として、非ざり畫とは、いふ／＼本書の價値常な新待をもつて出版の日を贈るを高めました。落谷先生の高雅な方々から待たれてなつた『森の祈り』がいふ／＼本となつて現れ...

本居長世先生作曲 (七月十五日頃發行)

『子守唄』と『お人形さんの夢』

(伴奏附)

◆金の星童謡曲譜集の第六輯と第七輯であります。いづれも本居長世先生苦心の作曲に野口雨情先生の作詞になるもので、『子守唄』の内容は『子守唄』と『小鳥』の二曲です。『お人形さんの夢』は、お人形さんの夢、啼いた啼いた、雄子、赤い襦袢、夢をみる人形、草遊び、はぐれ鳥など六曲がつけられてあります。それに又竹久夢二、寺内萬治郎兩畫伯の苦心になる目も覺めるやうな装幀はきつと皆さんに御満足な與へると信じます (定價八十錢 送料六錢)

小松耕輔先生作曲

『ペンペン鳥』 (伴奏附)

曲譜集の第八輯は小松耕輔先生の作曲、若き童謡作家松崎龍先生の作詞になるもので、『ペンペン鳥』、『紅燈籠』、『赤い小馬車』、『仔牛』、『お便り』、『さみだれ』等の六曲があつてゐられてあります。これらの歌詞作曲の大半は一度雑誌『ミッソ』に發表されたものです。好評だつたものです。竹久夢二先生の藝術的な香の高い装幀は一層價值高いものになる事でせう。(定價八十錢 送料六錢)

◆最近の重版書◆

- 野口雨情著 青い目の人形 (第二版)
金の星社編 ロビンソン漂流記 (第二版)
金の星社編 ドン・キホーテ (第二版)
武井武雄著 プウ太郎鍛冶屋 (第三版)
先生作曲 赤い靴 (第三版)
本居長世先生作曲 夢と靴 (第二版)
先生作曲 夢と靴 (第二版)
先生作曲 夢と靴 (第二版)

# 懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆  
 自由畫……………山 本 鼎先生選  
 幼年詩……………若 山 牧 水先生選  
 綴 方……………編 輯 部 選

[意 注] 課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君の好きなものを、諸君の好きなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるべく畫用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號へ切は七月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は十月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

## ◆一般讀者の創作◆

童 話……………野 口 雨 情先生選  
 童 話……………齋 藤 佐 次 郎 先生選

[意 注] 童話は十五行以内、童話は二十字語二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童話には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童話には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊金四拾錢送料壹錢  
 三ヶ月分三冊(送料共)壹圓二拾錢  
 半年分六冊(送料共)貳圓四十錢  
 一年分十二冊(送料共)四圓八十錢  
 但し新年號は特別號で五十錢ですが、御註文の際は、この分だけ必ず加へてお拂込み下さい。  
 振替口座東京五九五六番

[送] 御註文は必ず前金で御拂込み下さい  
 金 送金は振替が一番便利で御座います  
 切手代用は(壹錢切手)一割増しです  
 [注] 何巻第何號よりと書いてください  
 住所姓名ははつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十三年七月九日印刷納本(毎月一回)  
 大正十三年八月一日發行(一日發行)

編輯兼發行人 齋藤佐次郎

印刷所 東京市小石川久野町八百番地 大橋光吉

發行所 東京市外田端三百五十一番地 博文館印刷所

發行所 金の星社

振替口座東京五九五六番  
 電話小石川五三三八七番

野口雨情先生著 ■ 挿畫幀

落谷 虹兒畫伯  
 寺内萬治郎畫伯  
 武井 武雄畫伯

# 童謡集

# 青眼の人形

[再 版] 總絹表紙箱入美本、紙數約二百三十頁、定價壹圓八拾錢、郵送料十五錢

雨情先生の童謡中特に傑作のみ八十篇を撰んで一冊となした  
 もの。しかも、目もさめるばかり美しい装幀に飾られた本書は、  
 童謡界最初の模範的出版であります。賣切れぬ内御購讀下さい。

東京市外田端三五二  
 金の星社  
 振替東京五九五六番  
 電話小石川五三三八七番

武井武雄先生著並畫 四六判箱入頗る美本 定價金壹圓六拾錢  
 本文二一度刷三百頁 送料金十五錢

# 繪入ブウ太郎鍛冶屋 童話集

## 第三版

(目次)  
 ブウ太郎鍛冶屋 蜂の着物 竹の着物 陸軍の大将 流石の花 不眼の園 世間の話 又取つたよ 木魂の数 其他の靴 篇靴

武井武雄先生の最初の繪入童話集『ブウ太郎鍛冶屋』は果せる哉、熱狂的大歡迎を受け、出版後數日ならずして初版全部を賣り盡くし、忽ち再版を發行するに至りました。  
 本書を手にした方は、先づ装幀の獨特の美しさに驚かれる事せう。箱も表紙も五度刷の武井先生お得意の畫を以て飾られ、口繪には二枚の三色版があり、本文は全部二度刷の優雅極りなきものです。こんなせいたくな本はない」と本屋さんが評したのも尤もです。しかも定價が頗る安價であることは、金の星社の誇りとするところです。

東 京 市 東 田 外 一 五 三 番 六 九 五 九 五 京 東 替 振 番 七 八 三 五 川 石 小 話 電 社 星 の 金

## 最新刊

# 金の星童謡曲譜集第六輯

本居長世先生作曲  
 野口雨情先生作謠

# 子守唄

(目 曲)  
 子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、霜柱、葱坊主、藪の下道

(定價金八十錢・送料金六錢)

第一輯 人 買 船	第二輯 一 つ お 星 さ ん	第三輯 青 い 空	第四輯 赤 い 靴	第五輯 夢 と り
版六第 (目曲)	版六第 (目曲)	版四第 (目曲)	版三第 (目曲)	版二第 (目曲)
人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん。	一つお星さん、七つの子、鼬と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬。	青い空、燕、雨夜の傘、でんく虫、雀の酒盛り、呼子鳥。	赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝鮮館屋、眠り籠の子。	夢とり、おしやれ棒、つば子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機械り。

東 京 市 東 田 外 一 五 三 番 六 九 五 九 五 京 東 替 振 番 七 八 三 五 川 石 小 話 電 社 星 の 金  
 東 京 市 東 田 外 一 五 三 番 六 九 五 九 五 京 東 替 振 番 七 八 三 五 川 石 小 話 電 社 星 の 金



K2A-27

# ライオン水歯磨

運動のあとで、ライオン水はみがきでうがひを  
しますと、歯もきれいになり口もきれいになり  
気分もさわやかになります。



『金の星』第六卷第八號

（大正十一年六月十三日）  
（大正十三年七月九日）  
（大正十三年八月一日）

（定價金四十錢 送料一錢五厘）